

在銘	景秀(備前)	刀	
無銘	則國(粟田口)	短刀	
在銘	豊後國行平	太刀	
在銘	村正(初代)	短刀	
在銘	助秀(備前)	太刀	
在銘	備前國經家	小サ刀	拵付
在銘	宇多國宗(越中)	刀	拵付
在銘	山城國洛陽一條 信濃守堀川國廣	刀	
在銘	村正(二代)	刀	拵付
在銘	村正(初代)	脇差	拵付
在銘	國宗(備前三郎)	刀	統監在任中軍刀として常用す
在銘	國行(當麻)	短刀	哈爾賓携帶
在銘	來國次	短刀	同上

公豫て愛藏の名刀を帝室に獻納して、他日の散逸を防がんとするの志望あり。生前之を公近者

に語れるを以て、世嗣博邦君、公の遺志を繼ぎ、前表中最初の六振を奉獻して、嘉納の光榮を荷へり。行平は不幸にして記者其出所を知らず。行光及順慶長光は大倉氏、他の長光と保昌貞吉は岩崎男、則重の短刀は田中伯の寄贈する所なれば、諸氏は即ち伊藤家と共に永く獻納の名譽を分たるべきものなり。右の外堀川國廣は伊豫大三島神社に奉納し、其他の一半は遺物として、山縣公、桂侯を初め、公の知友竝に後進に贈呈し、一半は公爵家に於て保存することゝなれり。刀若し靈あらば蓋し各々其處を得たるを喜ぶべきなり。(古谷久綱手記)

## 伊藤公と犬養毅氏

本文は故統監秘書官古谷久綱の手記である。後掲犬養毅の伊藤公評と併せ讀めば必ず興味深からんと思ふ。

明治四十二年の春なりしと記憶す、憲政黨の議論二派に分れ、大石正巳君を首領とせる改革派は、多少從來の主張を枉ぐるも、非政友會的大合同を組織して、政權に近づかむと欲し、犬養毅氏に心服する非改革派は、之に反し假令見る影もなき小數に陥るも、從來の主張を抛棄する能はずと論じ、兩々相對峙して讓歩せざりし結果、評議員會に於て遂に犬養毅氏除名の決議を爲した



る事あり。其當時記者は一日伊藤公に隨行し、東京より大磯に赴く途中、新橋停車場に於て雑誌一部（中央公論と記憶す）を購ひ、車中に於て是を讀めるに、時事問題に關する論文數篇あり、一讀其興味多きを感じたるを以て、横濱邊より之を伊藤公に告げたるに、公も一讀すべしとて、自ら雑誌の閲讀を始められ、遂に大磯驛到着に至るまで是を讀み續けられたり。大磯に着するや記者も公に隨ふて滄浪閣に入り、晚餐の饗應に與り、食後四方山の閑談を爲したる際、公は肅然襟を正しうして記者に語りて曰く

先刻汽車中にて君の予に示したる雜誌中、伊藤死すとも殉死する者一人も無かるべし、然れども犬養死すれば、之に殉死する者些くも二十餘名ありと言ふ意味の一句あり。作者の意は蓋し予を貶して犬養を揚げむと欲するものなるべきも、世人の斯く言ふは會々予の志の實際に行はれ居るの一證として、予の満足に堪へざる所なり。予が數十年來微力を國事に竭すは、一朝有事の日、我同胞五千萬をして悉く陛下の爲に死せしめむと欲するが爲なり。若し予にして私恩を賣り私黨を作らむと欲せば、不肖なれども何人にも後れを取らざる自信無きにあらず。然れども斯の如き行爲に出でんか、予の陛下に對する忠義は夫れ之を如何にせん。予は一人にても予に殉死するを欲せず、予自ら陛下の忠僕となり、又我同胞をして、悉く陛下の忠勇

なる臣民たらしむるを得ば、平生の願足る矣

と。記者は此談話を聞きて感激措く能はず、「今夕の高論は、從來閣下より受けたる幾多金玉の教訓と共に、永く肺肝に銘すべし」と答へたるに、公更に語を續けて曰く

予は犬養なる人を熟知せず。乍併其政治家としての進退は、賞賛の値なくんばあらず、就中徒らに名利を追はずして、主張を最後迄固守せんとする處に一段の妙味あり。今回の除名事件に關し、世人の同情の期せずして彼に歸したる亦故なしとせず云々と。又以て政治家として公、平生の着眼如何を見るべし。（同上）

## 鐵嶺丸船上の迷懷

大阪商船會社の鐵嶺丸は、關門二市多數の紳士に見送られて、明治四十二年十月十六日午後一時、名残り多き下關を發す。公は甲板にて、鄭書記官と碁を圍み、午後六時頃、夕餉の卓上、灘の銘酒富久娘の盃を傾けて洋食を喫し、翌曉二時頃まで談話に時を移し、三時頃床に就き、八時頃起床、此日浪高かりしかど、公は平然として、午前は室内にて附員を相手に西南役の懷舊談な



どに耽り、晝食後一時間餘午睡す。この夕鐵嶺丸は、公が外遊の前途を祝する爲め晚餐會を催す。公は卓上船員の祝盃を受け、終りて事務長大河平氏の懇望に應じて一詩、勿々南北東西客、裘葛一年更幾回、萬里壯游黃海上、神嘗祭日共傾杯。を賦し、有合せたる書翰箋に無雜作に書流し、氏に手渡され、この夜も十二時過まで飲み且つ語りて興盡きず、二十日午前九時過、舟は無事大連に着し、多數の出迎人に擁せられて上陸せられしとなり。

## 伊藤公の體格

公爵の體格は、生來強健の構造なるに、壯時更に練磨せられたるを以て、筋骨發育の完全なるのみならず、五官を始め胸腹臓内に於ても、一の弱點を認る所なく、呼吸は深大、脈搏は強實、運動に依て疲ること少なく、腦力を勞して倦むこと稀なり。従て疾病抗拒の力も強きが如き、實に強壯者の標本たり。是を以て公は曾て攝生顧慮の念に乏しく、老年に及ぶも之が慣習となり、爲に動もすれば、咽喉を患へ、腸胃を害ふ等のこと時々ありしも毎に之に因れり。斯の如き完全なる身體に於ても、亦意外なる一小缺點の存するあり、則ち上腹中央部の脱腸是なり。斯る部位

の脱腸は頗る稀に見る所なり。然れども是極て軽度にして、充分脱出するも、僅かに雀卵大に達するに過ぎず、公が談話中、往々手を懐にせられたるは、此脱腸を押し復納せしめんが爲なり。昨年十月哈爾賓遭難の際、余此強壯者標本たる偉人の體格に就て、自ら参考に資せんと欲し涙を吞で、測定したるものあり。今是を左に掲ぐ。

### 伊藤公爵身體測定表

部	位	尺寸、分厘	備考
身	長	五三、〇〇	曲尺を用ふ以下之に倣ふ
頭蓋	の周圍	一九、五〇	眉毛上際より耳接際を過ぎ後頭結節に至る
同	高	七、五〇	頭頂に水平板を置き其より頤尖に至る
同	前後最大徑	六、五〇	兩脚器を以て測定す
同	横の最大徑	五、七〇	同
同	横弓徑	一〇、〇〇	一方の耳上際より頭頂を超え他側の同所に至る
同	矢狀徑	一〇、五〇	眉間より頭頂を超え後頭結節に至る
顔	の長さ	四、二〇	鼻根より頤尖に至る



同 上 幅	九、九〇	一方の耳孔より兩眼前を過ぎ他側の同所に至る
同 中 幅	八、六〇	一方の耳垂より上唇を過ぎ他側の同所に至る
同 下 幅	六、七〇	一方の下顎隅より下唇を過他側の同所に至る
鼻 背 長さ	一、六〇	鼻根より鼻尖
鼻 の 高さ	、六五	鼻中隔基底より鼻尖
同 幅	一、六五?	左右鼻翅前縁間 <small>(鼻孔に防腐綿填塞後にして計測時 之を除きたるも多少の違あらん)</small>
同 中隔より口裂	、九〇	
口裂より頤尖	一、七〇	
左右の内眥間	一、一〇	
外眥より耳輪前縁	一、九五	
眉 間	一、〇〇	
耳の最長徑	二、六五	
同 最横徑	一、一五	
同 垂	、九八	

頸 中央 周圍	一一、五〇?	<small>防腐藥液注入後ニ計リタルカ故ニ多少延長ヲ免レス 公カ遭難當時用ヒ居ラレタル襟ニ就テ計ルニ鈕孔距離一尺一寸二分</small>
肩 幅	一四、〇〇	左右肩峯突起端間
胸廓前後徑	六、五〇	胸廓中央吸氣の状態に於て兩脚器を以て測定
同 横 徑	一〇、五〇	同
兩腸骨前上棘間	八、四〇	
上肢の全長	二三、三〇	肩峯突起端より中指末端に至る
尺骨の長さ	八、二〇	烏嘴突起より下端に至る
指 極	一八、五〇	
上膊中央の周圍	九、〇〇	
前膊最大圍	八、四〇	
同 最小圍	五、一〇	
手掌の長さ	五、八〇	
同 幅	三、二〇	
下肢の全長	二六、四〇	大轉子より踵底に至る



腓骨の高さ	一一、三〇	腓骨頭より外踝端に至る
大腿中央周囲	一四、九〇	
下腿の最大圍	一一、七〇	
同 最小圍	六、八〇	
足蹠の長さ	七、四〇	踵後端より第二趾の末端に至る
同 最大横徑	三、五〇	第一及第五跗前骨頭の部に於て
足甲の周圍	七、九〇	
體 重	拾五貫五百目	明治四十二年七月廿八日大磯に於て

以上の如く計測せりと雖、後に考ふれば尙測定を要する部位少からず。例之は頭蓋最小橋徑、兩顳骨間直徑、兩下顎隅間直徑、顔の角度、頸胸腹の長さ、腹圍脊柱の長さ等是なり。然れども當時早卒の際にして注意の爰に及ばざりしは今に至て遺憾とする所なり。

體重に就ては當時是を計る迄の勇氣無しを以て、同年七月大磯にて測られたるものを添附せり。公は筋骨の發育充分なれども、脂肪は多き方にあらず。隨て體重の最も多き時に在て、拾六貫七百目を超えしことなかりしと云ふ。(小山善手記)

## 立憲的政治家

私は伊藤公には一度も面接したことが無かつた。尤も之は伊藤公許りぢや無い、山縣公其他と雖も、議會などで顔を見る位のこと、未だ曾て面と向つて言葉を交へたことが無い。元來私は人を訪問することをせぬたちで、誰の處にも行つたことが無いから、誰も知らぬ。だから私は、たゞ伊藤公といふ人を遠くから見て居るのに過ぎぬので、伊藤公に就て今彼は言ふ資格はないのである。たゞ強て伊藤公を評せよと言へば、私は、伊藤公は慥かに立憲的政治家であつたと斷言して憚らぬ。勿論伊藤公偉しと雖も、決して理想的立憲政治家で無いことは分つて居る。然し乍ら自餘の元老などいふ人達よりも、餘程立憲的政治家であつたことは争はれぬ。

明治廿五六年頃の政界と云へば、實に混亂を極めたもので、時の政府は或は暴力を以て或は賄賂金錢を以て、有ゆる非立憲なことをしたもので、其後と雖も藩閥政府は随分亂暴を極めたものである。然し伊藤公許りは、いつ内閣を組織しても、決してそんな非立憲的なことをし無かつた。時に或は陛下の御信任といふことを陣頭に振りかざして、兒戲を演じたこともあるけれども其の外には實に正々堂々であつた。此の點に於て私は伊藤公を尊敬し且つ敬服して居た一人であ



る。勿論時には或は其の政策を擁護したこともあり、又時には反対として戦つたこともあるけれども、要するに伊藤公の目的も亦吾輩の目的と同じく、立憲政治といふことに在ることに違ひは無いので、此の點に就てはたゞ其の手段方法を異にして居たに過ぎぬ。

殊に公の清廉であつたことは實に感服すべきことで、人に賄賂を使はなんだ代り、又自分も賄賂を取つて私腹を肥すといふ様なことをし無かつた。此の一點は現元老は到底も及ぶまい。此の點に於て蓋し公は大西郷或は大久保などいふ先輩と充分比肩す可き人だと思ふ。

公の薨去がどれだけ政界に影響を與ふるかは今日豫想することは出来ぬ。政友會などは慥かに打撃を被つたに相違無からう。然し又一方には、折角思ひ立つたことも公の爲に牽制されると云ふ様な從來の態度を脱することが出来て、之からは其行動を自由にするといふ便利が出来るとも知れぬ。桂侯の如きも、本より公の薨去は打撃には相違ないけれども、一方に於て又姑に對する氣兼的の苦勞が減つたかも知れぬと思はれる。然し何れにせよ損失に相違ない。

公は平和主義の政治家として世界に重きを爲して居た、此の點に於て公は慥かに日本を代表して世界に我が聲望信用を繋いで居たのである。故に公の薨去は、此の點に關して世界に多少の影響を與ふると同時に、日本の蒙る損失も少くないと思ふ。

今回の滿洲旅行は、果して其の稱する如き汗漫なる旅行であつたか否かは知らぬ。然し普通常識を以て判断して見ても、如何に閑散な地位に在りとは云へ公爵程の政治家が滿洲三界までノコノコ漫遊的旅行を試むる筈もなく、殊に露國藏相と會見するといふ如きは、必ず何等かの目的があつたに相違ないのである。ヨシ又假令藏相との會見が無くとも、又或は通り一遍の閑遊的旅行であつたにしろ、何れにしても何等か夫れ相應の土産があつたに相違ないので、實は吾輩などは如何な土産を公爵が齎すかに就て非常に興味を以て待つて居たのである。然るに齎せしものは聞くも忌はしき凶音と、還り來しは公の遺骸許り、實に悲慘の極である。

殊に刮目す可きは公と露國藏相との會見であつた。此の兩者が一室に相會して如何なる商議をしたであらうか、これを聞くの機會を永遠に失はしめたのは如何にも残念である。勿論其の話題に上る多數のことは、日清露三國に關してのことであつたに相違ないが、それに依て將來伊藤公が如何なる施設をしたであらうか、これは慥かに見物であつたに相違ない。今や内地は何等願慮を要するものなく、韓國のこと又略ぼ一段落を告げ、残る處はたゞ滿洲のみである。伊藤公が將來其の掉尾の手腕を振ふ可き舞臺は慥かに滿洲であつて、伊藤公も亦必ず何等かの成算があつたに相違無いと思ふ。今回の旅行は慥かに其の邊の考もあつて思ひ立たれたに相違無いと思ふ。



然るに不幸今回の凶變となり、遂に其の最後の晴の舞臺に於ける公の所作を見ることの出来無くなつたのは如何にも残念である。人は公の今回の死を花であつたといふ。然し吾輩は公が今回の旅行を終つて後、其の旅行に依て得たる或るものを世に施したる後こそ、眞に公の光榮ある死期であつたと信するのである。公こそは眞に今少し生かして置き度かつた。(犬養毅談)

## 造化の寵兒

私が政治に關係し始めたのは明治十四年長州派と大隈伯とが衝突して遂に大隈伯が野に下つた時であつたから、この時から凡そ十六七年間と云ふものは伊藤公を正面の敵として戦つたものである。なぜ伊藤公を正面の敵として戦つたかと云ふと、たゞ我々の先輩が無暗に伊藤公を攻撃するから自分も之に附隨して攻撃したに過ぎない。言はゞ伊藤公の爲人を知らずして盲目滅法に攻撃したのである。

殊に當時の我々は伊藤公を専制政治家の權化、民權、自由、立憲政治の敵と見た。従つて先輩よりも一層激しく攻撃した。明治三十年頃までは斯く全力を擧げて伊藤公を攻撃したのであるが

我々の攻撃が果して先方にどれだけ響いたかは分らない。兎も角も我々の先輩と云ひ、周圍の空氣と云ひ、悉く伊藤公攻撃に傾いて居たので、之に従ひ、之に包まれたる我々は自然伊藤公を正面の敵として戦つたのである。

其中に追々不思議に感じだした事があつた。乃ち我々がどんなに激しく攻撃した場合でも伊藤公は決して卑劣な手段で以て應戦しなかつたと云ふことが是れである。我黨對伊藤公の戦闘に於て我々の仲間が勝を占めた事も數度あつたが、この場合でも伊藤公は他人の如く金力や暴力を用ひての應戦はしなかつた。金力と暴力を以て反政府黨を壓伏すると云ふことは朝に立つ政治家の最も行ひ易くして且效果のあることであるから、他の政治家は皆やるが、伊藤公だけは決して是れをやらない。たゞ時々詔勅を請ふて鎮撫することがあつた許りである。之を亦我々は衰龍の御袖に隠れると云つて盛んに攻撃したものだ。

併し翻て之を金力、暴力を用ふるものと比べて孰れが好からうかと考へて見ると、勿論其孰れもよく無いには違ひないが、金力、暴力を用ふる如き卑劣にして且陰險な手段に比すれば正々堂堂と詔勅を請ふて鎮壓するは、單に其政治的手腕に於て稱すべきのみならず、又之を政治道德の上から見ても非常に優れて居ると云はねばならぬと思つた。



然るに明治三十年に至つて伊藤公は時勢に見る處ありと稱して斷然大隈、板垣兩伯の首領たる憲政黨に其内閣を譲り渡した。其行動を見ても自分は伊藤公の政治道徳に感服したのみならず又公の見識及び主義が極めて我々に近いやうに感じた。若しあの場合に他の政治家をして局に當らしめたならば、自己が辭職するとも必ずや自己の味方の者を奏薦して内閣を組織せしめたであらうと思はるゝに、伊藤公の態度は全く之と反對に出た。實に公明正大なものであつた。

憲政黨内閣は我國に於て始めての政黨内閣で、自分も其閣員の一椅子を占めたのであるが、未だ何等の功績を擧げ得ずして間もなく瓦解した。平素は我々にやらすれば立派に立憲政治をやつて見せると廣告して居たに拘らず、實際の局に當つて見ると斯の如き爲體で實に慚愧に堪へなかつた次第である。加ふるに我々の首領と仰ぐ大隈伯も我々が信じて居つた程の働きをせぬ。爰に於てか自分は益々伊藤公の政治家としての技倆を認識せざるを得なかつた。

爾後幾許ならずして伊藤公自身が政黨を組織するといふ企てを耳にした。人が感情的に動くべきものならば兎に角、苟くも道理によつて動く以上は従前に於ける行懸りの如きは之を放棄し去つて、斯かる憲政に資益する企ては之に助力して大成せしむべきものであると思つた。乃ち公が藩閥出身であるからいけないとか何とか云ふ感情を棄て去つてたゞ主義に依つて行動進退すべき

もので、従前に於て其政友たる否との如きは問ふ處にあらずと思ひ、此場合に公を助けて其計畫を大成せしむるは我々の責任である。少くも一度は助けてやらせて見なければならぬ。之れを出來ぬさきから反對して打ち壊しに掛る如きは自ら憲政の進路を妨ぐるものである。故に伊藤公の此計畫を助けることは自分の政友は誰も異存のないこと、自分獨りは淺果敢にも考へたのであつた。自分が説けば先輩政友は擧つて賛成するものと信じた。

當時の自分の考へでは自由進歩の二黨に所謂伊藤派なるものを加へて三派鼎立の一政黨を形勢するにあつた。憲政黨が失敗した原因は職として其二派の合同であつた點にある。二派の合同であるから双方が直ちに衝突する。而して其間に之を調和するものが無い、故に遂に破裂するは避くべからざる勢であつたのである。是れが若しも三派鼎立ならば異を樹つる一派は勢ひ孤立して到底勢力を逞うすることは出來ぬのであるから、常に偏することなく調和がとれて圓滑に行く。之れは獨り理論上に於て然るのみならず亦政黨史上の事實である。幸ひ伊藤公が政黨を組織するとすればこの三派鼎立の一政黨を組織せしめたいと思ふたから、自分は此主旨を以て伊藤公に説いた。

乃ち公に説くに自由黨と伊藤派のみで組織した政黨ではいけぬ、之に進歩派を加へて三派鼎立



せしめて始めて立派な調和的統一的一政黨が出来ると、熱心に二派對峙の不利、三派鼎立の利を唱道したが、何故か公は之に賛意を表せなかつた。全く反対はせぬが言を曖昧にして賛成しない頗る躊躇の色が見えた。或は自分と大隈伯との關係及び自分の從來の經歷上懸念する點があつたのであらうかとも思ふ。兎も角も公は賛成しなかつた。

自分がなぜ伊藤公の方を先きに説いたかと云ふと、大隈伯始め自分の政友は自分が説けば必ず賛成するに違ひないから之を説得することは比較的容易である。説得に困難なるはたゞ伊藤公の方面のみだと思つたから先づ伊藤公に説いて其同意を得て然る後大隈伯始め十六七年來行動を共にし來り互に能く其主義、精神を了解せる政友を説かうと思つたのである。然るに公との話がまだ十分に進捗せぬ内に、尾崎が伊藤公と密會したとか何とか新聞で騒ぎ立てたものであるから、もう猶豫して居るべき時でないと思つた。で直ちに大隈伯、犬養、大石などを説いた。

自分は屹度賛成を得るであらうと豫期して居つた處、豈測らんや、大隈伯、犬養、大石舉つて反対した。理窟なしにたゞ反対した。頗る強烈に反対した。思ふに之れは感情で反対したのであらう。尾崎は伊藤の手先きになつて説きに來たとても思つたのであらう。これは自分の失策であつた。先づ大隈伯、犬養、大石などに相談したら或は話しが纏まつたかも知れぬのであつた。斯

く反対を受けたものゝ、自分はもうやりかけたものであるから、今更ら後へ引くことは出来ぬ。そこでそれならば到底意見が合はないのだから僕はこれでお分れすると云つて、只一夕の會合で別れてしまつたのである。

併し自分は進歩黨から除名せられた。それは自分は大隈伯や犬養、大石こそ反対すれ、他の一般の代議士連は自分の意見に賛成するであらうと思つたので、進歩黨の代議士會の事務所に出て所信を述べた。これを非常に嫌やがつて、殴るとか何とか云つて威嚇した。そこで私は言つた、宜しいぢ殴りなさい、假令身は事務所樓上に斃れても言ふべきことだけは言ふと云つたら、流石に多年の情誼で殴りもえせず、結局除名が最も好都合と思つたのであらう除名して了つたのである。除名せられて後はもう事務所に出て意見を述べること出来ぬので已むを得ず手を引いた。斯く公會へ出て政友を勧誘したが私宅に於ては一人も接見しなかつた。陰に徒黨を組んで脱黨する如きやり方は自分の性格として好まぬからである。要するに當時に於ける自分の計畫は大失敗に終つた。

斯く自分の三派鼎立の計畫は大失敗に終つたから、私は暫く政友會の組織さるゝのを傍觀して居つた。傍からは連りに這入れ／＼と勧められ伊藤公始め政友會の幹部連も私獨りの方を大に歡



迎した。進歩黨を率ゐて行くことを厭がつたのである。併し私は自分一人ならば敢て急いで這入る必要もないと思つたから、暫らく悠々傍觀して居つて、其愈々成立して後に始めて這入つたのである。これから以後今日に至る十二年間と云ふものは常に伊藤公の味方として又政友會の味方としてズツと繼續して來た。乃ち私の政治的生涯三十年の内、前十六七年間は伊藤公の敵、後十二三年間は伊藤公の味方と云ふ譯である。

其後私は政友會を出たが原因は極めて小さい問題であつた。乃ち伊藤公が從來執り來つた政友會の方針を變ぜしめた、政友會が一旦地租を増徴せすと決議したに拘らず其決議を翻して地租増徴を賛成する方針を執らしめたので、幹部にあつて最も重き責任の地位に立つた自分は自己の面目を保たんが爲めに出たまでの話である。自分は當時伊藤公の不在中は會務の一切を委任せられて居つた。原は其時代議士でなかつたから松田と二人で責任の衝に當り内實は會務を自分に任せられて居たのである。故に自己の面目を保つ上から云へば、かゝる場合に脱會するより外はなかつた。

自分は自己の信ずる意見を發表して政友の賛成は求めるが人を勸めて連袂脱黨すると云ふことは素から嫌ひであるから先きに進歩黨を出て政友會に這入つた時も自分獨りで這入つた。尤も後

から二十名許り跟いて來たがこれは敢て自分が勸誘した結果ではなかつた。同様に政友會を出る時も自分獨りで出た。片岡健吉君なども進退を共にすると云ふから自分はそれは善くない、君は僕と違つて自由黨の元老であるから輕々しく政友會を出てはよくないと云つて止めたが、とうとう片岡始め所謂土佐派の連中が二三十名も脱會し、次で伊藤公も樞密院議長を拜命して政友會を去らざるべからざるに立ち至つた。

自分が伊藤公の味方となつて居る中に曾て公に反對した時に感じた公の公明の態度、政治道徳に優れて居る點などが益々事實明瞭になつた。公は敵に對しても決して之を極處まで追ひ詰めることをせなかつた。一應馳け散らせば更に再舉を圖らうがどうしやうが決して頓着しなかつた。他の政治家の如く金力、暴力等の陋劣手段を以て政敵を壓服することは公の性質として到底爲し得なかつたのである。

殊に特筆大書すべきは、公は決して自己の愛憎を以て公器を私しなかつたことである。官職と愛憎とを嚴に區別した。如何に公が氣に入つた人間でも其器量にあらずんば決して高官に就けなかつた。世間では伊東已代治が公に取り入つた爲に官海に於て稀に見る異常の昇進をしたかの如く傳へて居るが、あれは已代治が公に取り入つた爲に重職に就いたのでなくして、技倆があつた



から公が信任して用ひたのである。乃ち已代治を愛したのが本ではなく、技倆あるが爲めに愛したのである。公が公器を私しなかつたと云ふ最も好い例は森槐南に對する行動だ。

公が森を愛した事は非常なもので、哈爾賓で遭難の時も森もやられたかと云つたのが最後の言葉であつたのを見ても如何に愛して居たか分かる。森は斯く公の腰巾着として久しく愛せられて居たが、公は近頃まで森を高等官にしなかつた。近頃なつたか知らぬが、私の知つて居る間は高等官にしなかつた。其地位はいつも屬官であつた。官吏社會に於ける高等官と屬官との間は宛然主人と家來の如く、従つて屬官の高等官になりたがること非常なものである。殆ど局外者の想像し得ない程高等官になりたがる。森と雖も高等官になりたがつて屢々公に嘆願したに違ひないが公は容易に許さなかつた。十何年か二十何年かの間ずつと屬官で居られた。實際森はあれ位の詩文を草し得る能力だけでも高等官たる資格は十分あつたと認めらるゝ。高等官中にあれ以下の高等官は幾許でもある。然るに公は森を斯くまで愛しながら之が爲に公器を私せなかつたと云ふに至つては其公明、明治の政治家中に傑出して居る。大西郷は知らぬが其他は大久保でも木戸でも多少公器を私した形跡があるに獨り公のみには是れがない。だから公が引き揚げて用ひた者で、公が居ないからと云つて其立脚地を失ふ如き者は一人もない。薩摩でも、佐賀でも、先輩が居な

くなるとこれに附いて進んだ後進は其地位を保つことが出來ず直ちに失墜するものが頗る多いが、公の後輩にはこれがない。これは世人のあまり注意せぬ點であつて而かも公にあつて最も稱揚すべき一大美點である。

公は又凡て調和的であつた。従つて旗幟が鮮明でない、白ともつかず黒ともつかず常に鼠色であつた。故に敵よりは因循、姑息、無主義、無定見等の語を以て攻撃せられた。公のこの特徴は國會開設に關しても遺憾なく現はれて居る。乃ち我々の當時の意見では明治十四年に其計畫を立て、同十六年に開設すると云ふのであつた。急進派で頗る旗幟鮮明である。又一方の頑固黨は國會開設すべからずと主張した。これ亦旗幟頗る鮮明である。然るに公は其中間を取つて明治廿二年に憲法を發布して翌廿三年に國會を開設した。この調和的なる處が公の長處であり且又短處であつた。

私は聖人と云ふものをよく知らぬ、従つて公が聖人であるか否かは無論知らぬが、併し聖人は物に凝滞せずの語は公に於て其最も適切なる實例を見る。公は決して物に執着しなかつた。一旦やりかけた事であるから無理でもやり通すと云ふことは決してなかつた。其非を諫めると、始めの内は随分議論もするが、愈々理なしと覺るや翻然其非を改めた。これは公の人物の餘程大きい



處である。例へば公は溪間を流るゝ水の如く岩あれば之を迂つて通つた、決して岩を貫いて通らうとはしなかつたのである。従つて公の態度たる恰かも茫洋たる大河の流れに臨むが如き觀があつた。

既に物に凝滞せぬから利慾の念が又極めて薄い。公の持ち物で恐らく永く公が執着して居たものは一つもなかつたであらう。書畫、骨董、刀劍等の類は素より家屋でも之を手離すことを何とも思はなかつた。其高輪の屋敷の如きは随分立派なもので他人をしてあれ位の家を持たしめたならばよくよく貧乏すれば兎に角、容易に手離すものでないが、公は惜し氣もなく之を岩崎に賣つて了つた。伊皿子の邸も其通り、間もなく賣つて了ひ、小田原の邸は打ち壊して了つた。大磯の邸だけは残つて居るが實に粗末なもので普通の高等官であれ以上の家を持つて居るものは幾許もある。公は利慾の念に乏しく、邊幅を修飾する如きことのなかつた人である。

この物に凝滞せなかつたと云ふ事は之をおし擴げて人に對しても尙ほさうであつた。公は従前味方であつたものでも意見が合はなければ未練なく別れるし、又敵であつたものでも意見さへ合へば直ちに朋友ともなるし、又技倆さへあれば之を用ひた。公の最大缺點として非難を蒙るべきは好色の點であるが、併しこれとても決して婦人に溺れるやうな事はなかつた。丁度我々が縁日

の花を買つて來て眺めてしまへば捨てゝ顧みないと同様に、女を手に入れることは入れるが、楽しんで後はもう顧みなかつた。決して執着しない。普通の好色家ならば概ね女に溺れるものであるが公は女を縁日の花と同一視したのである。物に凝滞しないと云ふ性格を能く現はして居る。

公が若し執着したと云ひ得べくんばそは名譽に對してのみであらう。頗る名譽心が強かつた。其他に於ては何物にも執着しない。性格が調和的で之を山にすれば恰かも京都の東山のやうにおんもりと圓いから一寸捉まへ處が無い。従つて斷崖絶壁に對するやうな峨々たる壯觀がない。併しよく見ればこのおんもりとした處に、他に見るべからざる特質妙味を發見するのである。

一言にして云ふと公は造化の寵兒であつた。如何にも天真爛漫で且無邪氣であつた。小供のままにすつと發達した人、少しも偏せずして眞ッ直ぐに伸びた人であつた。これは其境遇が多くは順境であつたからでもあらうが、又此性格が其境遇を順境ならしめたのであらう。別に人目を驚かすやうな波瀾抑揚がない代りに、九天の上より九地の下に落つる如き悲運に遭遇することはなかつた。要するに公は造化の寵兒、運命の寵兒であつた。(尾崎行雄談)



## 余は初め公を嫌ひ後心服せり

私が伊藤公の知遇を得たのは明治二十八年からである。それより以前、故陸奥伯から屢々伊藤公に會つて見ろと勧められたが私は會はなかつた。何故會はなかつたかと云ふと私は當時の伊藤公が嫌ひであつた。だから之に觀兵式の大將軍なる特稱を附して嘲つた程である。殊に伊藤公の憲法論が氣に喰はなかつた。内閣は政黨以外に超然たるべきものとか何とか云ふのがひどく癢に觸はつた。故に陸奥伯に勧められる毎に私と伊藤公と會へば必ず憲法論で喧嘩をしなければならんから會ひませぬ。私は伊藤公と會つた時に其の憲法論を黙まつて聞き過ごすことは出来ない。云つて伊藤公との面會を拒んだ。陸奥伯はそれでは困まる、君と我輩とは斯んなに親しくして居るに我輩と一身同體の伊藤が氣に喰はんとか、會ふのが嫌とか云ふては困まる。今後も何かに附けて非常に都合が悪い。そう言はんで會つて見ると云はれたが、どうしても會ふのも嫌やだと云つて拒んで會はなかつた。

處が明治廿八年陸奥伯が大磯に病を養つて居る時、至急来いといふ電報が来たから急いで行つて見ると、陸奥伯の枕頭に伊藤公が居る。此場合となつては如何に我輩でも伊藤公に紹介せられざるを得ない。察する處、陸奥伯は伊藤公をも亦用務に托して呼び寄せ、我輩を紹介したものと見える。暫く話した後、伊藤公の云ふには、斯んな病人の枕頭で飯を食ふと云ふのも不味いからおれの處へこんなか、一處に飯を食はふと云ふのでどう〜伊藤公の宅で飯を食つて歸つて来た。此時は今迄想像した程に嫌やな男ではないと思つたが、尙ほ傾倒するには至らなかつた。其後段段會ふて談して見るに従つて、伊藤公は決して自分の以前に想像して居つた如き人ではなく、觀兵式の大將軍なごゝ罵つたのは自己の誤りであつたことを覺つた。

其後はずつと繼續して、終りに至るまで交情が變らなかつた。殊に最近に公は我輩に向つてどうだ、もう一度歐洲へ遊んで來ないかと勧めたから、我輩は歐洲に遊ぶのも宜しいが貧乏旅行はもう仕たくありませんからと云つたら、それでは書生の一人位連れて行つたらどうだとの事に、さういふ旅行なら至極面白う御座いませうと云つて、第二十六議會が濟んだら早速出掛る筈であつた處が、今度の凶變があつた。マサカ墓に向つて約束の履行を迫る譯にも行かんから歐洲行は中絶した。實に今回の凶變は大にしては國家の損害、小にしては伊藤公墓下の損害、更に小にしては我輩一個人の損害である。

世間では多く伊藤公を智餘りあつて勇足らずと見て居つたやうであるが、實際は反之して勇六



分、智四分の人であつた。智慧もあることは有つたが、それよりも一層勇の方が勝れて居つた。伊藤公が如何にも智者らしく見えたのはそれは全くサガシチイで以て智を補ふたからである。世間で見ると程多智の人ではなかつた。

伊藤公が勇氣に富んで居つたと云ふ實例は夫の政友會を組織した一事で見ても分かる。當時公の周圍からは激しい反對を受け、且嫉視せられた。之が普通の者ならば斯く激しい反對、嫉視を受ければ意氣頓に沮喪して計畫の挫折を來すのであつたらうが、公は勇に於て人に勝れて居た爲めに、斷々乎として周圍の障礙を打破してとうとう政友會を組織した。又憲法を制定する當時でも保守黨の頑強なる反對があつた。憲法は天皇の權力を制限するものであるから不都合だと云ふのである。而かも公は斷乎として此障礙を排して進み遂に千載不磨の大典を草し之を發布して我憲政の基礎を定めた。これ亦他にあつては稀に見る處の勇氣と云はねばならぬ。

世人が公を卑怯だとか何とか云つたのは多くは外交問題に關する公の態度を傍觀して放つた言であるが、これは大に恕さなければならぬ點がある。公は曾て我輩に斯う云ふ事を言つた。曰くおれは外國人に對して常に非常に好意を持つて居るのだが、併し此の好意を持つて居るおれの血管の中には東禪寺を焼打ちした血が流れて居るのだから、外國人が猜疑の眼を以て見るのも

無理は無いよと。又以て公が如何に外交に苦心したかを察せられるではないか。且公が外交上ややもすれば逡巡躊躇の色を現はすことがあつたのは他の者と違つて、先きが見えたからである。どの邊には暗礁があるとか危険物が伏在して居るとか云ふことが公には略ぼ分かつて居つた。故に無暗に船を乗りかけることをせなかつたのである。若し他の者が公程に先きが見えたら恐らく公よりも尙ほ一層の臆病者となつたであらう。他の者は暗礁や危険物が見えないから盲目滅法に突進するのである。公は決して臆病ではなかつた。たゞ其暗礁を避け、危険物に遠ざかることに苦心したのみである。併し一旦愈々已むを得ないと見た時にはまッしぐらに突進した。而して此の時の公は實に強いものであつた。

一體我國の政界には二つの人種がある。甲は飽くまでもドクトリン、クリードに依つて行かうとする一派で、乙は別にドクトリン、クリードは無くして、臨機應變で以てやつて行かうとする一派である。甲は長州人、乙は薩州人がよく之を代表して居る。伊藤公の如きは長州人中でも殊にクリード、ドクトリンに依つてやつて行く質の人で、其志業の如きも眞に忠臣として君國の爲めに盡すにあつたので、之を單に風雲に際會して功名を成さうとするものに比すると其間に大に逡庭があるのである。公は曾て日本政記を讀みて泣かざるものは日本人にあらずと云つた。吉田



松陰の流れを汲んだ長州人は殊にこの忠君愛國のクリード、ドクトリンに依つて行動する傾がある。就中公が其魁である。

我輩の見る所に依れば、凡そ國には純臣と賢臣と、寵臣と、佞臣とある。佞臣は今我國にあるかどうか知らぬが、純臣と賢臣と寵臣とはある。之を元老に當て候めれば山縣公は賢臣である。松方侯は寵臣である。而して我伊藤公は純臣である。君臣の交はり水魚の如しとは眞に 今上陛下（明治天皇）と伊藤公との間に云ふべきものであらう。伊藤公自身も純臣を以て任じ、三條、岩倉二公の後を繼ぐものは自分の外はないと期待して居つたらしい。果せる哉二公薨去の後、之を繼承したものは伊藤公であつた。

君主を直諫するといふことは古來臣下の最も難しとする處で、我國の諺にも直諫は一番槍に相當すると云つた程である。而して 今上陛下を直諫し奉つたものは獨り伊藤公であつた。公は知つて言はざるは不忠なりと信じて、時に直諫を敢てしたのである。陛下も亦公には最も遠慮なく仰せあるので、明治二十九年頃であつたか、有栖川宮殿下が東宮御補導職であらせられた當時、公は或時 陛下に何か直諫し奉つたことがあつた。陛下は公の言に逆鱗まじ／＼て公は一ヶ月許りも御前に出なかつた事さへある。斯く公は純忠の臣であつた。苟くも自己に信ずる所あれば君

主を直諫することを敢てする人であつた。世間では多く公を寵臣であるかの如くに認めて居るが夫れは全然誤つて居る。

又公の憲法論、政治論等を見ると、如何にも西洋流の人であるかの如く見ゆるが、公の西洋流は方便で、其内心殊に君臣の關係に至つては東洋的であつて、反對派からはアチアチックと攻撃せらるべき程に東洋的であつた。公は名臣言行録を非常に愛讀して、其宰相篇を以て自己の鑑としたやうである。曾て我輩に言ふには、凡そ宰相たるものは宋の王旦の如くなければならぬ。王旦は造次顛沛も其美を君主に歸すると云ふことを忘れなかつた。曾て寇準が王旦の處に往つて樞密使たらんことを求めた時に王旦の曰く、是れは怪しからん事を承はるもの哉、樞密使の任命はたゞ君主の意にある、宰相は單に君命を奉行するのみ、宰相たる余は將た貴下を如何にせん、寇準は以て王旦が己れの能を嫉むものなりとして慚ぢ且憤ほつて退出した。其後半年ばかりして後、寇準は樞密使に任せられた。そこで得々として王旦に矜るの態があつたが、王旦死して後帝より準を奏薦せしものは且なりと聞いて、嗚呼我れ且に及ばざること遠しと嘆じたさうである。且の如きは眞の宰相、宰相たるものは之れでなくてはならぬ。以て公の意の在る處を見るべきである。



公は此心懸けを以て又憲法の制定に臨んだ。故に特に天皇に重きを置いたのである。其後自ら起つて政黨を組織するに當つても、我々如き山澤の庶民は、蒼生の安寧福利を増進せしむるを以て目的としたものであるが、公は天皇の經綸を行ふためにはどうしても政黨に依らなければならぬと信じて居たのである。乃ち我々と到達點は同一であるが出發點を異にして居た。當時公の舊友たり競争者たる元老院は公の陛下に於ける御信用と、元勳の筆頭たる地位と、加ふるに人民の輿望を負ふとを以てして、政黨を組織せんか是れ虎に翼を附するが如きものなりとして、大に嫉妬し其計畫に反對した。遂には策をめぐらして、公を樞密院に祭り込めた。曰く、勅命によりて樞密院議長に任ずる尙ほ召命に應ぜずんばこれ延元に於ける足利尊氏の心事を懷抱するものなりと認むと、純臣としての公は此一言には敵し得ない。遂に經綸を行ふには政黨に依るの外なしと信じつゝも樞密院に入らざるを得ない運命に立ち至つた。この時に於て公は政治的に死んだのである。昔はシーザルがゴールから歸つて來て、乍ちにして反對黨を壓伏して權勢を得たが、遂に其反對黨のみならず、幕中のものさへ之に加擔して元老院に渠を刺し殺したが、伊藤公は身體こそ尙ほ其後も生存し居たれ、政治的にはシーザルと同じやうな最期を遂げたのであつた。

公の政治的活力の旺盛な時代には公の配下に屬するものが天上の星の如く多かつたと共に、公

に反對するものも亦濱の眞砂の如く澤山あつた。然るに公が樞密院議長となり、統監となるに及んで敵は漸次少くなり、近時に於ては殆ど敵と云ふものがなくなつた。蓋し死屍を嫉妬する者は誰も無いからである。今回の凶變に際しても朝野を舉げて之を痛嘆した。此有様を見て我輩は最光の日は人が其日を棄つるの時也と云つたフレデリック大王の言を思ひ起さずには居られぬ。

公は又非常の讀書家であつた。其經綸、考案の如きは讀書によつて得た處が多かつた。公が曾て海軍思想を普及せしむる爲に海防費献納の案を立てた如きは、カヴールの傳を讀んで得た所の方案であつた。公は又書を讀むに或目的を立て、讀む人であつた。曾て公がバークスの傳を讀んで居たから、今頃何でそんなに古いものをお読みですか？と問ふたらなにバークス時代の支那と現今の支那とどんなに變はつて居るか研究して見やうと思つてねとの答であつた。乃ち公は書物を無暗に濫讀する人ではなかつた。必ずある目標を立て、讀んだものである。(竹越與三郎談)

## 伊藤公の競争者

茲に競争者と云ふても、戦時に於ける如き殫すか殫れるかといふやうな意味では無い、又遊戯



的競争（フレンドリー、コンペティション）といふやうな意味でも無い。

大久保公が死んで大隈伯は其の後継者といふ可きであつたが、當時政府は三條公の下に寄せ世帯の有様であつたので、遂に大隈伯との間に争が起つて他の連中が共同して伯を放逐して了つた尤も寄せ世帯中は、内部で竊に同志相争ふて居ても、表面には其争ひは顯はれなんだ。明治十八年官制改革があつて、伊藤公が首相となると共に、明かに其の競争者が顯はれた。即ち黒田伯である。

其の經歷から言へば黒田伯は伊藤公より少しく先進である。伯は軍人であつて内政に關係し幾分外交にも關係した。大久保全權辦理大臣の後伯は全權辦理大臣となつて、木戸内閣顧問の後伯は内閣顧問となつた。殊に薩が長に對して重きを爲して居たのは全く伯が居たからである。従て首相を定むる場合には、先づ伯を推す可き順序であるけれども、伯に故障が起きた爲めに伊藤公が首相となつた。かくなるには井上侯等が與つて力がある。が伯が去つて西比利亞旅行の途に上つた時は、陰然敵國の觀があつた。歸朝して伯は其の鋒鏑を收めて、農相の椅子に就いたが、實は伊藤公に代つて首相となる前提であつたのである。

當時世間では伊藤よりも寧ろ黒田に重きを置いて居た。黒田内閣は大隈後藤などいふ諸士を網羅して、一時頗る有力なる内閣と見えただけで、遂に條約改正案と共に破綻して了つた。後黒田伯は樞相となり、時には首相代理又は臨時首相となつたが、又前の勢力を見ることは出来無かつた年齢は伊藤公と一つ違ひで、まだ一〇元氣を持ち得る譯であつたのに、六十に達せずして衰へ、還暦の頃に歿した。中風の爲めに苦められたらしい。黒田なるものが、伊藤と互角以上の勢力があつたことは、今殆ど忘れられた。

黒田伯に次で松方侯が伊藤公の競争者たる可き順序であつたが、侯は政事家たるよりも財政家たるに偏して居る。だから伊藤公は稍もすれば松方は一度總理大臣になつてから、政治家の心持になつたと言つてゐた。即ち伊藤公は初より其の競争者とはして居ら無かつたのである。

薩人で伊藤公の競争者が無くなつたと共に、山縣公が其の競争者たる位置に顯はれた。初めは薩派に對して、長派は共合して之に當るの状態であつたのが、薩派が衰ふると共に、長派の中で競争者が顯はれたのである。

山縣公は根據を陸軍に置く丈け、伊藤公と其の立場を異にしたが、政府部内の権力の競争は實に此の二人の間に行はれた。互に經歷が違ひ、又其の考も違つて居るので、時には激しく争もしたが、根が親友の間柄で、假令激しく相争ふても、一方が窮境に陥れば、一方が手を出して之を



救ふのであつた。其上陛下のお聲掛りもあり、到底相争ふて分れるといふ様なことは出来無かつた、が若し廿年間政府部内で競争があつたとすれば、それは正しく二公の間柄である。二公自らは相争ふの念が無くても、其の下に屬するもの、間に頗る猛烈なる競争の行はれたこともある。伊藤公の後繼者としての西園寺侯、山縣公の後繼者としての桂侯、尙ほ竊かに相争ふて居る。然し此の兩者も伊藤公山縣公の間柄の如く、肝心の場合には折合ふのである。今後西園寺侯より桂侯の領分に切り込むで山縣系を割くか、或は桂侯より西園寺侯の領分に切り込むで伊藤系を割くか、それは事實に逢着せねば分らぬ、或は延いて朝野の争とならんとも限らぬが、今日迄の處では此等兩者の競争は政府部内の競争と見做す可きであつた。が立憲政治は政府より範圍が廣い、從て政府と或る者との競争が起り勝ちである。伊藤公對黒田伯山縣公關係は畢竟するに内輪の競争である。更に廣い意味に於て伊藤公に對する當の競争者は大隈伯である。

公對伯は公對黒田伯山縣公のそれよりも類似の點が多い。夫れ丈け競争が明白である。自らは競争を意識して居るのでも無からうが、他からは比較し易い。藩は異つて居るが出身が相似て居る。明治政府を組織し初めたのは幕末の武士で、當時國政に當つて最も困難を感じたのは外交と財政であつた。他の方面では如何はしくはあるが一寸間に合ふ奴は随分あるけれども、此れ丈け

は困る。處で伊藤が多少其の邊の知識があり、大隈も亦多少其の邊の知識があつて、此の兩人は互に同じ様な位置を占めた。二人共外交に與り財政に與つたのである。

初め大藏省は内務省の事務も兼ねて居たもので、財政に與ることは頗る重い役目であつた。大久保が大藏卿となつたのも、財政に通じて居たといふよりも、もつと重い省の長官になつたのである。處で大久保の知識も、此の二人が供給したのが多い。當時伊藤公は大隈伯と略ぼ同じ位地を占め、最も有用の材を以て目せられて居たが、然し大隈伯の方が稍や上に位して居た。前に言ふた通り、大久保の死後は寄合世帯であつたとは云へ、此の場合第一の位置を占めたのは矢張り大隈伯であつた。伯自身も亦第一位を以て任じて居たに拘はらず、政界意の如くならざりし爲めに、遂に國會開設を以て其の局面を轉改せんと試みた。薩長はこれ以來伯に對して大に不快を感じて、遂に聯合して伯を放逐して了つたのである。後伯は改進黨を組織し、黨員を率ゐて大に奮闘したが、當時既に政府の外に自由黨もあつて、政界に働くには頗る困難であつた。即ち其の政黨は大に振ふに至らなただけれども、其の活動力の盛なることに至つては能く伯に及ぶものは無い。伯は議會に多數を制する政黨の首領では無いが、稍もすれば在野人士を代表する位地に立つた。



當時伊藤公は政府の中心となつて働き來つたのであるが、遂に大隈伯に内閣を引渡すの得策なることを認むるに至つた。此に至るまでには素より複雑なる事情がある。が陛下の御信任渥き伊藤公の斡旋が無かつたなら、事は爾かく圓滑に運ばなんだかも知れぬ。然し兎も角伯は首相となり、思ふ存分の内閣を組織することを得たのである。然るに伊藤公は伯の失敗を見るや、直ちに自ら政黨を組織するの考を出して、彼の政友會を組織した。然し公は之が爲めに頗る苦められて遂に之を西園寺侯に引渡し、自分は樞府に入つたのであるが、少く共公は形に於て大政黨を組織したのである。今後に於ける政友會は如何になり行くか計り難いが、兎も角公と伯と同じく政黨に力を致したのである。公伯は斯くの如くして憲政に於ける遊戯的競争を事とした。

右述べた如く、伊藤公の競争者と云へば主として大隈伯を擧ぐ可きである。伊藤公が一方に於て黒田伯山縣公等に競争があつたと同じく、大隈伯にも別の競争者があつた。即ち大隈伯は教育方面に力を伸した爲めに、福澤翁との競争になつた。或點に於てこの二人は頗る相似て居る處がある。其結果として伯の早稻田大學と翁の慶應大學とは今尙ほ相對抗して居る。然し憲政を主題とすれば伊藤公と大隈伯とは正しく競争者である。何れが勝つか何れが敗けるかは分らぬ。後年この二人の傳記を比較すれば頗る趣味ある對照を認めるに相違ないが、今日之を判斷するには尙

早い。然し個人的に對照することは左程六ヶ敷いことではない。伊公と大伯共に身體が強健である。骨格は違ふが丈夫に出來て居る。何れも善く繁務に堪ゆるのであるが、何れかと云へば伯の體格が勝つて居る。共に曾て酒を呑むだが、伯の方が強かつた、が活動に堪ゆるに至つては略ぼ同じとする。氣力も二人共に秀で、居る。何れも實行の才あつて又知識を吸収する腦力もある。實行の才許り、知識の能許りといふ様な者とは全然趣を異にして居る。公は度々海外に出でたが伯は一度も出たことがない、然しその知識に於ては略ぼ相如くのである。公は讀書を好み、英書も讀む、然し伯は直接に漢書英書を讀むよりも、譯書を讀む、が伯の頭腦の明晰なる、譯書に依つて良く原書以上に之を理解する。公が七十近くにして尙ほ良く壯者を相手に議論することが出來、伯が七十を超えて尙ほ壯者を相手に議論するのは、何れも其の頭腦の尋常でないことを示すのである。此の兩人の理解力は、何れが長じて居るかを調べて見たなら頗る面白い處を發見するだらうと思ふが、これは俄かに出來ぬ。

公は伯ほど活用の自由は無い、然し深く考へて人に揚げ足を取られぬ様にするのは公の方が勝つて居る様である。然しそれも位地が異つて居るからかも知れぬが、若し位地を轉倒したら或は違つて見えたかも知れぬ。共に普通の學者ほど學理を解し乍ら、學者風とすべき處が無い。分析



的の分子は少かつたが、共に理解力の勝れて居ることは掩ふことは出来ぬ。徳義に於ては二人共一長一短である。伯は蓄財に心懸け、公は財に淡泊なりといふが、伯は只財を蓄へる一方の人でない。必要を見れば之を費す。どれ程金があるか分らぬが、費し得らるゝ丈け費して居る。若し今一層金があつたなら、更に活動して居らうと察せられる位で、その活動の鈍るのは財力の都合に依るらしい。あれば何處まで活動するか分らぬ。だから貯金の額が増すのを喜ぶ様なことは萬々ある可き筈がない。公は財に淡泊であるといふが、これは畢竟淡泊で差支ないからである。必要の場合には金の出處がある。非常なる巨額は辨じ得られまいが、普通人の大金とする位の額は立處に辨ずることが出来る。要するに公の財に淡泊であるといふのは、自分一身に金を溜めぬといふ丈けで、その運動費の如きには苦みはせぬのである。かゝる状態の下に在るものは、格別に慾張でない限り金を溜めるなどせぬもので、いくらも淡泊にして居られるのである。こんなことで二人を評しやうとするのは間違つて居る。

品行の點では、維新の頃に成長したものを厳しく責めることは出来ぬ。伊公は頗る勤勉である。睡眠の時間が少い。絶えず女を伴つて居ても、戯けて居る時間はないのである。詰り維新頃に育つた癖である。伯は外國の風を聞いた爲めか、其邊に氣を付けて外國人に向つて家族談を爲し得

るに至つたのは稍や稱す可きを見るのである。然し養子の一事に於ては聊か面白からざる跡を残した。伊公と大伯とは明治の憲政に於てよい取組になつて居る。二人共互に相重んじて居た様である。(文學博士 三宅雄次郎談)

## 建設的政治家

私は伊藤公爵と面會したことも話したことも甚だ稀でしたから別段評論を試みる程の材料もない。それに私共が政界に居る時分は公は吾々の政黨と丁度反對の地位に立つて居る政黨政派に屬して居られた。伊藤公爵は當時超然主義を唱へられた頃で、吾々の政黨は責任内閣樹立主義をとつた譯だから、東京や地方に政談演説をやつて奔走して居る頃は屢々公を非難したり攻撃した譯で、當時のことを考へて見ると、公は憲法取調の爲めに歐洲を漫遊せられて、大にビスマルクを崇拜せられたと云ふことだが、若しビスマルクの政治上の主義が超然主義だと思つて歸つて來られたとすれば大に間違つた考で、如何にビスマルクでも政黨を眼中に置かなかつたことはないで、唯だ獨逸は政黨が截然二派に分れて居る事實がないから、種々の政黨を統率して自分に賛成



せしめやうとして居るのだ。それを伊藤公がビスマークの爲す所は超然主義だと思つて之を摸倣しようとするのは畢竟ビスマーク公を崇拜する餘りに、顔ばかり見て足元を見なかつたのだ。若しビ公の足元を能く見たらビ公と雖ども政黨の上に跨つて居るのだと云ふやうなことを演説して伊藤公を攻撃したことが屢々あつた。

元來吾々が政治上の首領に戴いて居た大隈伯と伊藤公とは、何れも政治上の主義に於ては進歩主義の人に相違なからうけれども、主義や政見の近い者が却て反對の側に立つことは今も昔も随分例があることで、公と伯とは私交上は親友であつたらうけれども、政治上から云へば久しい間互に反對の地位に立つて居られたのである。そう云ふやうな場合であつたから、伊藤公は政府側の首領、大隈伯は反對黨の旗頭と云ふ有様が長い間續いたので、それに、元來私は人の家に餘り出入せない性分の人間であるから、伊藤公とは出逢ふ機會が少なかつた。

然し、始めて伊藤公に逢ふた機會は今日になつて考ふると頗る記念すべき場合であつたのである。則ち、日清戦争が局を結ばうとする頃であつて、李鴻章が媾和使節として馬關に來た當時のことである。私は當時自分の屬して居る黨派を代表して講和の状況を視察する爲め馬關に行つて居た。他の黨派の代表者も五六人來て居た。

或日のこと、馬關の市街を散歩して居ると、彼の李鴻章が小山六之助に射撃された場所に出會して當時の非常な混雜は今も記憶に残つて居る位である。丁度此時吾々議員で馬關に駐在して居る者は伊藤公から招かれて、李鴻章の遭難に付き議會の採るべき處置に就て相談を受けた。陸奥伯も外務大臣として列席された。此が伊藤公に逢ふた最初である。其當時のことを回想すると實に今昔の感に堪えん譯で、當時、伊藤公は、眞に李鴻章の災厄に就て非常の心痛をされたのであつた。

今度は伊藤公が丁度其の當時の李鴻章の地位に立たれたやうなもので、當時李鴻章を迎へた伊藤公は今度の露國大藏大臣コツオフの地位に當るのである。李鴻章は微傷を受けた計りで佐藤博士の手術の結果快復したが、伊藤公は遂に薨去された。世の中は塞翁が馬の如しと云ふが洵に感慨に堪えん次第である。

其後私は兩三回お目に掛つたが、それは政治關係を離れた後のことである。早稻田大學廿年の祝典を舉げるに際して公の來臨を乞ふが爲めにお目通りをしたり、又早稻田大學の校賓たることをお願したりと云ふやうな専ら教育上殊に早稻田大學に關したことでお目に掛つたのであつた。伊藤公は早稻田大學二十年祝典のとき、學校にお出になつて學校の實況を目撃されて以來深い同



情を早稲田大學の事業に寄せられて直接間接に多大の盡力をされたのであつた。で、公の爲めに追悼會を催して學生に話して聞かせたやうな次第である。

右のやうな次第だから、伊藤公に就て評論をするやうな充分な材料を持つて居る譯でもなく、親炙して公の性格を研究した譯でもないが、よしんば公を評論する十分の材料を蓄へて居た處で冷靜に公を批評するに就ては時機が少し早過ぎるやうに思はれる。昨今はまだ公の薨去に就て吾も人も哀悼する外餘念のない場合だから、公に就て冷靜な判断を下すのは他日に譲つた方が適當に思はれる。

唯一二感想とでも云ふべきものを述べて見やうならば、私は伊藤公の大なる所以は建設的政治家と云ふ點にあるであらうと思ふ。又安全なる國家の水先案内者と云ふ點にありはしないかと思ふ破壊と云ふことも時と場合によりては頗る必要なことに相違ないが、然し云ふまでもなく、破壊よりも建設が大切に又困難である。幕府を仆して王政維新を行ひ、舊弊を破壊して開化を導びくといふ明治初年の事業に就ては伊藤公も亦有力なる仕事師の一人に違ひないけれども、其當時には伊藤公以外隨分働き手が澤山あつた。其當事は仕事の七分通りは破壊といふ方であつたが、それには随分多數の人がかゝつて居るので、中には彌次馬的に飛出したものも少なくないやうに思ふ。

はれる。然し其以後の立法行政に關する建設的の事業に就ては其の中心は慥に伊藤公であつて、新日本と云ふ建物の造作をするに云ふことに就ては憲法の制定を始め伊藤公の功績と云ふものは實に顯著なものと云はなければならぬ。伊藤公は新日本の建設者であり、且つ指導者であつたが同時に又最健全な指導者であつた。安全な水先案内者であつた。此點が上下信賴の伊藤公に厚かつた原因である。恐れ多いことではあるけれども、上御一人の御信用が殊に伊藤公爵に厚かつたのも、畢竟此邊に胚胎するのではあるまいかと思ふのである。

然らば假に伊藤公を歴史に現はれて居る政治家に比較したら、如何なる人に一番克く似て居るだらうか、之も興味ある問題だが、近來新聞紙などを見ると公を豊太閤に比較するものがあるのを往々見受ける。これはどういふ點から來たのか、微賤の境涯から身を起して位人臣を極むるに至つた點が似て居ると云ふ譯か、又豊太閤が一生極めて幸運な人であつたやうな風に公も幸運であつたから云ふのであらうか。成程、足輕から身を起して位人臣を極めたと云ふことは豊太閤に能く似て居るに相違ない。又幸運と云ふ側から見ると豊太閤よりも伊藤公はより多く幸運であつたと思ふ。豊太閤は生涯頗る幸運な人であつたが、死際の狀態は餘り感服が出来ない。病に罹つて大阪城中に呻吟して、涙ながらに家康や利家に息子のことを頼んで死んだなど云ふのは頗る



不手際な次第である。之に反して伊藤公は政治家らしい花々しい死を遂げられた。光榮ある生涯に相當する光榮ある死であつた。こう云ふ死方はしようと思つて出来る譯ではないが、確に運命の神機は薨去の時に至るまで公を守つて居られたと云つて宜しいと思ふ。然し、其他の點に於ては豊太閤と伊藤公とは全く性格の異つた人物であることは多言を俟たずして明であらうと思ふ。伊藤公は單に豊太閤に似て居ないのみならず、家康とも、頼朝とも境遇が異り、生活が違ふから比較は出来ないと思ふ。

先づ日本歴史中で、比較的人物を求めやうとならば、藤原鎌足公あたりだがどうであらうか。伊藤——藤原、其姓に於て既に因縁があるが、鎌足公が大化の革新に就て中心の人物であつたことや、天智天皇の御信任の厚かつたことや、それらも、伊藤公の維新の改革に力を盡されたこと陛下の御信任の厚かつたこと、先づ照し合せて考へて見ると頗る面白いやうに思はれる。

現代の日本に於て、元勳とか、元老とか云ふ者は又尠ならず居られるが、然し、何と云つても朝にあつては伊藤公野にあつては大隈伯、此二人が中心人物であつた。何れも世界的人物で、歐米にまで名聲の轟いて居る大政治家、大人物、即ち偉人と云ふ名稱を遠慮なく付けることの出来る人であるが、今其一人を失つて頗る寂寞の感に堪へぬ次第である。(法學博士 高田早苗談)

## 君の兄貴は謀叛したでないか

申すも畏き事なれど 今上陛下が後進を殊遇し給ふこと匿れもなき事乍ら、其中にも伊藤公程愛し給ひ、信任し給ひ、且つ一種尊敬を以て迎へ給はりたる人は恐らく數あるまいと思ふ。是れ元より伊藤公の人物閱歷の然らしめたる處には違ひないが、又以つて陛下御聰明の程も伺ひ奉らるゝ次第である。狡兎死して良狗煮らるの譬は洋の東西時の古今を問はず不幸にして屢々事實に成て居る。近くは獨の偉人ビスマーク公も此の事實に支配せられて居る。建武中興の忠臣たる楠公の如きは多少事情を異にするも一度び王政を恢復したる後は謀議献策一も聽かれず、徒らに長袖奸臣の下風に立たねばなくなつて、遂に湊川に討死したのである。予は楠公が湊川の最後を以て誠忠の餘り敢て憤死されたと云ひ度いのである。然るに、今上陛下に於かせられては單に藤公に限らず苟も維新元勳に對しては其の功を徳とせられ、其の勞を多とせられて、飽迄信任重用し給ひ、以て臣節を全うせしめ賜ふたのである。尤も元勳とか元老とか言つて政治上特別の優



遇を付與する事は、憲法政治の上から見ると殆ど無意味の沙汰であるが、單に理論のみでは世の中は行かれるものではない。此の元老優遇の思召の中に、畏しくも無限の有難きことが偲ばるゝと思ふ。

世には随分人目を聳動する様な壯舉を爲す人もあるが、遺憾乍ら其の多くは、餘りに一時的で個人的で、或る場合には破壊的である。ナポレオンや豊公も或は此の部類に屬しはせぬかと思はる。成る程那翁豊公は偉人で從て其の既に又將に爲さんとした事は、實に偉大なる雄圖であつた。されど其の社會に奈何なるものを貢献し、世道人心に奈何なる教訓を與へたであらうか少しく遺憾なきを得ぬのである。此の外有爲の大才を抱き乍ら時至らずして駿足徒らに長坂を眺めて朽ち若くは兇人の手に斃れた偉人もある。然るに藤公は上に明君を戴きて良狗の難なく、時常に可にして不遇を嘆ずるの要もなければ全心全力を國家に傾倒し得て、維新創業の際より今日に至る迄六十餘年の間、誠に立派な建設的事業に奮戦して能く臣節を全うした點は恐らく古今獨歩と云つても敢て溢美でないと思ふ。

公の金錢に冷淡であつた事と、私黨を作らなかつた事とは、世已に業に定評ありで、今茲に蛇足を添ふるの要もないが、此の特性は偶ま以て其の心事の高潔を表はすと同時に、奈何に公平でも而も抱負の大なるかを知るに足るではないか。公の眼中には國家ありて、區々たる私黨的小糶合などはテンデ入らなかつたのである。

公は又局面展開に對して最も大膽なる處置を取るに躊躇しなかつた。始め攘夷論者でありながら世界の大勢を知るや、防長攘夷論沸騰の渦中に投じて斷然親和開國の説を主張し藩論を一變したる如き、維新草創の際人心未だ定らざる秋に方りて、直に廢藩置縣の建築を爲したる如きは其一例である。近くは先年超然内閣の主班の地位に在しにも不拘、早くも立憲政治の擁護に於て健全なる政黨の必要を觀て取りたる公は、官僚の間に非常の反對論者ありしに拘らず、急轉直下の勢を以て有らゆる榮位榮爵を返上し、野に下て政黨を組織せんとしたのである。斯様な事は口にす可く行ふ事は至難の業である。殊に公の位置境遇及び諸種の關係からして先づ不可能と見るのが至當なのに、當時公が斷然此決意をなし、其後終に成し遂げた其勇氣には三嘆の外ないのである。政友會を組織された後も、憲政の擁護に熱心せられた事は非常で、其時西郷侯を凹ませた面白い話がある。其は藤公は餘りに政黨問題に狂奔するので、時の官僚連中は頻りに氣を揉んで何程忠告しても少しも聞き入れぬ、處で最後のお鉢は西郷侯に廻て來た、侯は例の調和的態度で頃日の公の態度は少し過劇ではないかと諄々と諫めた。すると藤公威丈高に成て、「君の兄貴は謀叛



したではないか、況や我輩國家萬年の大計より見て是なりと信ずる以上何處迄も行かねばならぬ」とキツと従道侯を睨んださうで、流石の侯も此の權幕には施す可き策もなかつたと、同侯の直話であつた。之れは半面より見れば藤公が奈何に憲政擁護の爲めに其の心血を濺がれたかを想察するに足る可く、他の半面には又卓抜なる勇斷家たるを示すものである。

公を以て主として一般政治と外交の人で財政經濟には餘り通ぜぬかの如く思て居る人もあるが之れは皮相の見で、歐米諸國の貨幣制度銀行制度や課税制度等を研究調査したのも、恐らく公は眞の先登だらうと思ふ、兎も角新日本の建設的事業にして公の手に觸れぬものは殆んどあるまい。終りに公の死は國家の大損失、憲政の大打撃たるに相違ないが、公一個人に取りては時と云ひ場所と云ひ申し分がない實に羨望に堪へぬ。人生誰れか死なからんやで一度は必ず死なねばならぬ命數を持て居る。さらば希はくば死花咲かせて死に度いものである。公は此の度不幸兇手には斃れたが、世界的偉人の最期として實に立派なものであつた。病んで床上に死ぬのは古人の恥としたところ、是れ天壽を全うするものかは知らねど、未だ以て全うしたとは曰へぬ。知らず元勳諸公其他世上の士人如何なる感を爲すにや。蒲柳驚鈍の吾輩は公の薨去に就て一種の感に堪へぬのである。(元田肇談)

## 眺むる人の心にぞ澄む

文臣錢を吝しみ、武臣命を愛しむは、國家の大不祥事である。

文臣たる伊藤公は最も痛切に金錢の必要を感じずる政治界にある事五十年、其の位置境遇から云ても此の方面にて至て誘惑され易い立場にあり乍ら、而も定評の如く少しも銅臭の跡なく斷然無關門の大道を濶歩するの概があつたのは、實に豪らかつた。唯だく感嘆敬服の外無いのである。政治家たるの第一義は先見の明と果敢の勇とである。而して伊藤公は十分に此の要件を具備して居たと思ふ。先年大選舉區單記投票法を決行せる際の如き未だ何れの國に於ても其の前例を見ざる事として、在朝在野を問はず同僚後進の別なく、各方面から大反對を受けたにも不拘、勇往邁進して遂に該法規を制定し終はり、或は又種々様々な情實、舊慣、故障、反感等を排除して政友會を創立せる如き、又或は形勢の向ふ所民意の赴く處を看取しては、恬淡弊履を捨つる様に隈板二伯に内閣を明け渡せる如き、其の先見勇斷、驚嘆せざらんとするも得ぬのである。それ故伊藤公を目して八方美人主義となすは、少なくとも公が政治上に於ける大勇を知らざる皮相の觀たるを免かれぬと思ふ。



又公は日本を世界的に觀て居た。從て日本に關する世界の論評を注意することを怠らなかつたのみならず、自分の主義政策上裨益となる事項は細大洩さず熟覽翫味して、夫れ一通過の意見を附して居たから、ウツカリ行かふものなら必ず突込まれて赤耻を搔く事がある。だから公を訪ぬる時は豫め相當の腹案を組んで行かねばならなかつた。公は大勇の外に此の如き精到周密の用意を具して居たのである。此の點も政治家として間然する處がないと思ふ。

今一ツの敬服す可き事は、我々如き後輩の献策意見でも一々熟慮翫味し是なりと信じた事は躊躇せずドシ／＼採用して呉れた。之れが他の元老大臣ならば大抵は祕書官位に任せて置くのが普通である。而して此の後進に對する雅量の特に著しかつたのは實に公と陸奥伯であつた。斯様に後進の意見獻策を念頭に掛けて居たから後進は公の下に在つて益々奮勵努力する氣に成る。從て政治問題に關しての予の意見書は何通となく公の手許に届いて居る積りである。

併し世間では公を以て金錢に冷淡なると正反對に名譽心の最も旺盛な人と考へて居る處もある。其對韓策が事勿れ主義であつたのも、畢竟折角今日迄博し得たる天下の輿望を失墜せん事を恐れた爲であるとか、又は晩年に至りて「乃公にあらざるば」と曰ふ風な一種の慢心病に罹つたなど評す者もある、此等は各人各個の觀察で所謂「眺むる人の心にぞすむ」の類、敢て辯ずるの必要はないと思ふ。(林田龜太郎談)

## 伊藤公の性格

松下村塾出身の人にして明治維新の大功業に多大の關係を有つてゐる者は甚だ多い。高杉晋作、久坂玄瑞、木戸孝允、宍戸璣、山田顯義、品川彌二郎、野村靖等中々多い。けれども伊藤公の如きは尤も偉業を成し遂げた人である。伊藤公の薨去に就いて忽ち感じた事は吉田松陰の感化の遠くして且つ大なる事である。伊藤公は明治年間における政治家中尤も卓越した一人であつて、我邦の文明發展に貢獻をなした事は他に比類なしと思はれるのである。政治家として見る事は他にその人があらうから自分は唯公爵の中々他人の企及し難き性格を有つてゐた人である事を茲に明らかにして置かう。固より人といふ者は誰でも多少缺點のあるものである。公爵と雖も矢張多少の缺點は有つてゐた。然し公爵は衆美を兼ねてゐた人であつた。公爵が大政治家なる事は無論いふ迄もないが之を大政治家として見ればビスマルク、グラッドストーン、ローズベルトのやうな人々に比べても一向差支が無いのである。我國の過去の歴史に類似の功臣を求むれば或は藤原鎌



足の如き位置を占めてゐるやうである。然し時世が時世であるから其關係の廣くして且つ大なる事はとても鎌足公の比では無い。遙に偉大なる功績があるのである。

伊藤公は獨り政治家たるのみならず又立法の精神に富んでゐた。この點において他の政治家は企及し難いと思ふ。今日大政治家として公に並び立つ者はあるけれども立法家としては公の外他に其類を見ない。又公爵は外交家として中々卓越した技倆を有つてゐた。外交の手腕は餘程穩和で巧妙であつた。此の方面においても多大の成功があつたやうに思はれる。

かういふ種々の方面を見て公爵は卓越した性格の人に見えるが、夫れのみならず、個人として中々いろ／＼の方面に抜目の無い所があつた。例へば辯も筆も共に達者である。漢文もかけば詩も歌も英文も書く。英語演説もやるといふので、いろ／＼の技倆を兼ね具へてゐた。又書もかき書もかゝれたといふ事である。公爵の詩は折々新聞紙上に表はれるから我々も讀んで知つてゐるが、中々詩才の豊富な點が見える。唯公の詩中においていさゝか奇妙に感ずる事は兎角公が自分を自慢なされる事である。これは感服し兼ねるが詩としてはちやんと立派に出来てゐるのである。人はかやうに種々の方面に勝れた技倆を具へる事はむづかしい。大隈伯の如きは民間有方の政治家であつて雄辯は世間に鳴つてゐるのであるが筆の方はその割でないやうに思はれる。我々

はその文章を見た事もなければ又伯は手紙をも書かれぬと聞いてゐる。大隈伯の如き人にして然り、中々人は何でも彼でも能くやる事はむづかしいものであるが、伊藤公は筆も辯もともに達者である、又學問もあつた。憲法制定前歐洲に渡航してグナイスト、スタイン其他法律の大家に接していろ／＼研究を遂げられた。又絶えず世の學者を引見し且利用してさういふ研究の便宜を得られてゐた事は疑ない事である。

私は獨逸に留學する前、伊藤公に會ひ又スタインの紹介狀を書いて貰つた。又歸朝してから一日小田原の滄浪閣に公爵を訪ふて朝の八時から午後の三時頃まで話した事があつた。公爵に會つた時の感じを述べて見れば、別段霸氣滿々たる政治家に會つたやうな感じはしなかつた。唯普通の知友に會つた位の感じであつた。公爵は温和の人で近づき易い人であつた。其後英國大使館などで會つた時も誠に親しみ易く且つ話も綿密であつたやうに感じた。

公の學問教育に關する影響を考ふるに、教育の側には間接には随分大きな影響があつたかも知らぬが直接には餘り見えて居ない。併し公が獨逸から歸へられて大に獨逸の學風を獎勵された。日本が法學哲學等獨逸の學風に負ふところ少なからざるは亦公の有力なる鼓吹與りて力あるので其頃留學生を獨逸に送つたのも少なからぬ關係があるのである。公が教育の側に直接感化の少か



つた事は、元來公は維新亂世の時に生れて細行に拘々たらざるものがあり、爲に教育の精神に一致しない點があつたらうと思はれる。教育の事殊に徳育の事については有力なる教を垂れるといふやうな事が殆ど無かつた。これは境遇上最も遣り悪い點であつたらうと思はれる。併し公はなか／＼美德があつた、忠誠の心の眞に篤かつた事は、世に隠れないことで、公の一生の偉勳を思へば何人も匹敵し難いことである。それに公は案外淡泊で利欲の念が薄かつたやうである。今の政治家の中には貨殖を事として商人と區別の付かないやうな者もあるが公はさう云ふやうなことは無かつたやうである。かう云ふ側から見れば公の人格も亦教育上に多大の影響を生ずる事であらう。

茲に一つ、或は之を世間に知られてゐない事かも知れぬが先年英國公使館が大使館になつたその披露宴會の席上で私は偶々公爵と食卓を共にした。話をしてゐる中に公はかういふ事を云はれた。日本は宗教に依らずして道德で立派にやつて行ける、と云はれた。私は豫ねて倫理的宗教を主張して宗教に依らずして徳育でやつて行ける事と確信してゐたからひどく之に感じた事であつた。又其の時に話が吉田松陰の事に及んだ。私は平素吉田松陰の人格學風を尊崇し、多少取調べた事もあるので、談隅々此に及んだ、すると公爵は泫然として泣いて居られた。何か松陰の事につ

いてひどく精神を刺戟したものだと思はれる。

最後に私は今回公がハルビンにおいて韓人のため銃殺されたといふ報道を聞くと同時にかう思つたのである。これは固より公の不幸のみならず日本帝國の不幸であるに相違ないが併し是れは不幸中の幸である。この不幸が一轉して幸となる點もあると思つたのである。といふのはこの九月の初め新聞に伊藤公が桂首相邸の宴會に臨んだ時に急に卒倒され或は危篤に瀕したといふ噂があつた。併しそれはホンの一時の病氣で間もなく恢復されたが公爵も年が年であるから此の先用心せられぬと可かぬと思つた。所が今回の不幸が起つた。公爵は已に高年の人であるからこの先長命された所が大して長生もむづかしからう。と思つてゐると、今回の偶然の慘事で公は實に花々しい最後を遂げられた。あのやうな晴れの場所を最後を遂げられた事は大磯の私邸で疊の上で死ぬるのとは趣が異ふ。所はハルビンである。疊の上でない。對手が對手である。露西亞人、支那人では面白くない。韓國人といふのは公爵が韓國統監として韓國の經營をされたといふ點から見ても面白いのである。而して公の身に取つては一段落のついた時期であつた。韓國經營が一段落を告げて統監職を去つて閑散の地についた時期であり、場所は中々晴れの場所であり、對手は韓國人であつたので不幸が自ら幸となつたやうに思はれる。公も今後生存へて白髮頹齡の身を



以つて藝者を擁するやうな事があつては痴態百出して世の笑を招くの恐れなきにしもあらずである。今回の惨事は對手が韓國人であるから韓國經營の爲に犠牲となつたことが明瞭である。さうして血を以て生前の缺點を補ふたのである。それで世界萬衆の同情が公の一身に集つて來たので眞に最後の花を咲かしたといふべきである。(文學博士井上哲次郎談)

## 神巧的悲劇

とにかく國家の元老が遠く故國を離れた異郷で兇手に殞れたのだから國民を擧げて哀悼し、有らゆる短處缺點が其哀悼の前に盡く消えて唯赫々たる功名だけが炳乎として輝くは當然である。

二十六日以後の新聞は全紙を擧げて盡く伊藤公の記事を以て充たし、而も赫々たる勳業以外平素の美事善事、及び歎賞感歎悦服の文字を列ねて盡さない。此數日間の新聞だけを讀むと、眞に開闢以來の一大偉人なる哉の感がある。字引上ありと有らゆる歎賞の語は殆んど盡されて了つたらう、此上に公を褒め立てやうとしても適當の語なきに苦まん。

併し乍ら今日の場合は哀悼し歎賞するより外あるまいが、冷靜なる史家の見地より見て公は歴

史上如何なる位置を占むるものかは猶大に熟慮を要する。

有史以來の大人物だとも云つた人があるが、公がナポレオン、華盛頓、古くは該撒又歴山等に匹敵すべき人であらうか。匹夫より起つて人臣を極めた其形は豊公に似てゐるが果して豊公と比肩する人であらうか。

併し歴史といふものは人物を美化する。殊に昔しの歴史は日本も西洋も一種の詩であつた故實際の史實を大に理想化して居る。我々の幼時から頭に染み込んでゐる豊太閤やナポレオンは其實曾て生きてゐた豊太閤やナポレオンでなくて數層倍理想化されたものかも知れぬ。して見れば後世の歴史家が椽大の筆を以て公一代を潤澤したる場合に於て或は豊太閤ナポレオンよりヨリ以上の有史以來の大人物となるかも知れぬ。

私は公を良く知らぬから公の昵近者の言に由りて公を偉人大人物と思ふより致し方ない。併し乍ら虞翁にしる將たヂスレリーにしる、西洋の大政治家の多くは屢々演説し或は經綸を陳べた著述をした。是等に由つて其人物を想見し又教へらるゝ事がある。日本では國情が異なつてゐるかから爾ういふものが無いからとて其人を高下するわけでは無いが、以て其物を知るの資料がない。加之ならず、日本の政治的事業は庶民の窺ふ能はざる臺閣の奥深く行はれるから、親近者に非る



限りは果して大臣が偉いのか、屬僚が偉いのか、將た運が好くて甘くトン／＼拍子に仕事が出来たのか、さつぱり解らぬ。西洋の所謂大政治家の仕事は公々然國民環視の中に立派に聲言してやるから其經綸は何人にも解る、随つて其人物も良く理解出来る。此理由からして伊藤公に限らず其他の諸公の眞價値はまだ私には十分解らぬのだ。

併し公の精力絶倫なりし事、藩閥の臭味なかりし事、能く後進を引立てし事、常に進歩的なりし事、學術を重んぜし事、讀書研鑽片時も休ずして世界の形勢に通じたりし事、常に餘裕ありし事、利慾に淡かりし事、必ずしも權威に戀々たらざりし事、是等の數點に於て少くも他の諸公よりは幾分勝つてゐた事は争はれないやうだ。

公の學問は優に大學の講座に立つだけの實力があつたといふ評判である。系統的にどれ程の學問があつたかは知らぬが常に海外から新著を取寄せ、或は折々丸善あたりへ單身行かれて新著書を探されたものだ。殊に公は片々たる小冊子を嫌はれて何百頁といふやうな浩漭のものを喜ばれた。併も此大冊子を必ず通讀されて屬僚共に講釋して聞かせた事が屢々ださうだ。専門の學者すら時として公より其専門に關する新著の批評を聞いて驚いた事が度々あつたさうだ。

徳富君の追懷談の中に、公からトルストイのレサレクシヨンの話を聞いて驚いたといふ事があ

る。之は明治三十五六年頃外國から歸る船の中で讀まれたのださうだが、恐らく日本人でレサレクシヨンを讀んだ最も早き部分に屬するだらう。斯ういふものさへ讀まれたのだから、公の讀書の範圍も可成廣かつた事と思はれる。

公の詩に就て兎角の批評はあるが、非詩人の詩として決して遜色あるもので無い。維新の志士連中の作と比べて公と詩は寧ろ佳なるものだ。が、詩の佳否は別として閑餘詩に耽つて常に槐南氏を延いて風流の友とした一事は最も公の襟懷を見るに足る佳話である。若し公が英國に生れたなら或はデズレリーのやうに小説を作つたかも知れぬ。

とにかく公は他の元老諸公から比べて才氣溢るゝやうであつた。書も巧い。木戸松菊と比べると少し劣るやうだが、晩年に及んでは所謂長州派よりもヌケて臺閣の氣象が現はれて居る。即吟の都々逸も公としては感心して置いてよからう。新喜樂で電燈の光で襖に映つた藝妓の影を墨でなすつて美人の影畫を描いたなどは當意即妙の才である。斯ういふ才が極く細かい事にまで煥發して巧みに人を操縦し得たものであらう。

且又公は割合に恬淡で、磊落で、人を信服せしむるだけの雅量があつたらしい。併し公の失を云つたら餘りに才があり過ぎやしまいか、餘りに良く世間が解り過ぎやしまいか。果斷に乏しく



てやゝもすれば不得要領に陥るやうな痕跡が公の仕事に見えはすまいか。

何うしても公は暗殺されるやうな人では無い。縦令政敵であつても公を失はんとするまでに憎む事は出来ない人のやうだ。公を知らない朝鮮人だから公を殺したんだらう。例へば公の保安條例で退去を命ぜられた人でも公よりは當時の三島警視總監の方が憎かつたらうと思ふ。公は暗殺の犠牲となるには餘り伶俐に出来てゐた。

其の誰にも憎まれさうも無い人が遠く故國を離れた異郷の土を血に染めたのである。之こそ眞に日本開闢以來の出来事である。公が有史以來の大人物だといふ理由は知らぬが、有史以來の時代に生れて有史以來の出来事の犠牲となつた此目前の事實は公の一代を輝かし眞に崇高壯烈の大團圓である、好運と云へば云へ公の如きは實に千載稀なる好運者である。位人臣を極めて此以上何等の公を顯揚する手段なき時に方つて、天は此の如き崇高壯烈の悲劇を與へた。眞に畫龍點睛で、此點睛や到底尋常凡手の能はざる處、眞に造化の神巧である。此の如き好運を得たる公は亦不出世の一大人物であると云つても可なりであらう。(内田魯庵談)

## 傑出せる人格

甚だすまないことであるが、私は伊藤公の人物をよく知らないから、同公に就て評論する権利がない、只だ、同公の薨去を、社會に起つた現在の一事件として、それに關する感想を述べるに過ぎない。

伊藤公に限つた譯ではなく、又職業上の差別如何を問はず、男子世に生れて、兎も角も自分の思ふ存分に働くといふことは、吾々に取つて會心の事に相違ない、殊に伊藤公の如く、華かに實社會の表面に出て、一生の間に幾度となく生死の中に入出し、而も自分の理想に従つて直接に社會を改造して行くに至つては、男子として如何にも生れ甲斐のある事に思ふ、殊に吾々の如く常に机に因む者から見ると、かゝる花々しい舞臺に立つて居る人が何となく羨やましい如な感がある。

政治上の技量に就ては吾々の評する限りでないが、兎も角、あれ丈の仕事を成し遂げたに就ては、公は人格として他人に傑出した點が有つたに相違ないと想像される。殊に熱心な憲法政治の擁護者として、吾々の如き者でも大いなる敬意を同公に拂はざるを得ない、けれども、吾々は伊藤公を十分に知らない爲でもあらうが、決して公を以て理想の人格を備へた人とは思感しない、實際政治家としての公は偉かつたにしても、人間としての價値に於ては、吾々にはどうも飽足らな



く感じられる。即ち精神的方面、人格的方面、又は靈的方面に於て、公は吾々に何となく飽足らない。これは伊藤公ばかりではない、實際の政治家にこれを期待するのは或は無理かも知れないが、一面實際家として偉大なる丈にそれ丈多く他の方面の缺點が吾々の目に映するわけだ。日本の政治家實業家といふ方面に於て、凡て此の感じが吾々に強い。政治家實業家と雖、人として未だ此の方面の缺點を補ふ餘地は幾らもあると思ふ。若し此の兩面を兼ね備へた人が出れば、吾々は初めてこれを偉大な人物として尊敬し得ると思ふ。

伊藤公の今回の花々しい、殆んど劇的に近い最後の爲めに、今日の新聞雑誌を見ると、同公に對する世間の同情賞讃は非常なものだ、私などは初めてかく世間から持囃される人を見た位だ。勿論これには例の國際上の關係、政治上の意味、其他死者に對する禮儀等が雜つて居るから、必ずしも深く咎むべきではなからうが、他の一面からいふと、世の同情賞讃名譽といふが如きものゝ、如何に淺はかで、雷同的で、儂ないものだといふことが實際に證明されてゐるやうに思はれる。伊藤公に關する眞實の批判は、今後追々に知れ渡る事と思ふ。(金子筑水談)

## 帝國主義の殉教者

政治家としての伊藤公がどの位偉いんだか、それは私等にはよく解らない。伊藤公が死んだので、今後の政友會がどうなるかといふやうな事は一切新聞記者の取り扱ふべき問題で、吾々は研究しないでも宜いことだ。

吾々は何んな人を見る場合にも、第一に個人としての地位に眼が付く。個人としての伊藤公は實に幸福な人だ。日本の國民生活の一番活氣を帯びた時代に於て、始終人生の華やかな前的地位に立ち續けて行つて、終に最も人の視聽を驚かすやうな最後に出遭つたのだ。即ち華美な人が思のまゝに華美な生涯を送り得たといふ觀がある。殉難者になるといふことは壯なことである。誰でもなれるといふ譯には行かぬ。朝鮮を日本の保護國にするといふことは一種の帝國主義の實行だ。この帝國主義實行の張本と見たから彼等朝鮮人は伊藤公を殺したのであらう。つまり伊藤公は帝國主義を代表してその犠牲となつて殞れた。即ち殉難者だ。これは、餘程壯な人物の遭遇する運命で、さういふ風な殉難の最期を遂げた人は世人からの同情が多く、且偉大にも見える。

なに、私行上では生前随分新聞などで非難されたのが残念だといふのかね、そんなことは何うでも宜いでは無いか。人間の行爲の意義は極めて複雑なものだ。或る人が行くと全く不徳に爲ることでも他の人が行れば、その人の徳性の片影と爲る場合もあらう。要するに、個人の自由によ



で立ち入つて局外の吾々が何もいふには及ばぬ。吾々には他人の賣物を買ふのにまで氣をつける義務は無い。

伊藤公の詩は何うだといふのかね、私は漢詩のことはよく知らんし、伊藤公の詩も餘まり讀んだことは無いが、多少文字位は他人から直して貰つたかも知れぬが大抵は自作で、自身の腹から出た奔放な想であらう。今の無學な元老の中にあつて珍らしくも氏は讀書の人ださうである。あらゆる點から見ても、伊藤公の文字ある人であることは明であらう。

私は政治上の事も餘り知ら無い。今の日本では文學者は直接他の職業の人々の仲間と交りやうがない。他の職業の人々は大抵思想淺薄で話にならぬ。藝術に關する知識が無いばかりでは無く全然モノが解らない、で、さういふ人々と交るには、此方から位を落として、調子を合はせてやらなければならぬ。所で、さういふことを度々やつて、それが上手になれば俗人になつて仕舞ふ。誰でも自分が損をして俗物の御機嫌を取るのには厭であらう。これは、文學者ばかりではない、他の學者でも美術家でも少し頭の複雑な仕事をして居る者は皆な左様だらうと思ふ。交際するといふのならば先方と此方との間に多少思想の連鎖が無ければならぬ。それを、左様いふことが一切無くして唯漫然と吾々が他人と交際するといふのならば、それは、吾々が他人の様子を見に行

くといふに過ぎ無い。他人の様子を探りに行くのは探偵の仕事だ。吾々はたまならば知らず、必要ある場合ならば知らず、始終、探偵の仕事を行ふのは御免だ。要するに、化石したやうな文字と數字とばかりで、生きた人間を支配しやうとする者があれば、それに唯々として従ふ者が多數であるところの今の日本には、吾々の行ふ文學は贅澤過ぎる。贅澤物の必要を心得ぬ世間では、文學者は獨居的の生活を行ふより他に爲方は無い。空々漠々として日を送つても減びないやうな社會のことなどは、そんなに詳しく知らなくても吾々の生活には別段不便は無い譯だ。(馬場孤蝶談)

## 時代精神の代表者

獨逸の詩仙ゲーテを評する者は、彼を以て近代的精神の代表者と爲すに一致して居る。我輩は伊藤公に對し、最も進歩せる時代精神の代表者といふ概括的月旦を下したいと思ふて居る。王政復古、維新中興の大業を翼賛したも時代精神の代表である。郡縣の治を復し、廢藩を斷行するの廟謨に參畫したのも其れである。憲法を創定し、大政黨の首領となり、國民的皇張の潮頭に乘じ韓國統監の職を肇めたのも亦皆其れである。單に政治上に於いてのみならず、社交上に於ても保



守的精神の猛烈なる真唯中に、鹿鳴館に舞踏會を開いて歐風の交際習慣を輸入したのものに漏れることはない。折花攀柳の病癖は決して進歩せる時代精神ではなく却て非文明の遺習ではあるが、是れも亦維新前後の時代精神を代表したもので、社會の進歩に隨て之を改むべきであつたに拘らず、是れは人の性に固有の衝動力と一致して居つたが爲めに、公も時々其死生の巷に出入した當時の惡癖が習性と爲り、言はず喫煙するのと同様な譯に爲つたものと苦しい宥恕を求めて居られて決して得意として居られた次第ではない。其れは兎に角模倣すべき限ではないが是れも矢張時代精神の代表といふに差間はない。殊に去三十一二年の交各地で演説を試みられた時分、一個人政府主義を鼓吹せられたのは、當時英國の進歩思想を代表すと目せられた學者の主張を應用せられたので、時代精神の鼓吹と見て然るべきものである。又、公が立憲政友會創立の當時は、泰西新刊書を繙くと頻に帝國主義の研究が行はれて居るときであつた。そこで我輩は獨逸の世界政策より研究して一書を著す所存から、其題辭を頼む考で公に著書の梗概を書いて送つた事がある、我輩は故あつて著書は其儘にして世に問はなかつたが、當時の『政友』には、公の名に依て我輩と同一趣旨の帝國主義に關する簡單な議論が出で居つたと記憶する。是れ公が常に時代精神の代表者たるべき資質を有て居られたものと看取すべき好材料ではあるまいか、世間で帝國主義

の研究が始まり新聞雜誌などが物珍らし氣に翻譯物其儘の苦作を紹介したのは其後である。さて斯る例を列擧したならば却々際限もなからうし、又世間で大概公にして了つた事を繰返すのは無益であるから、我輩は一つ二つ曾て大磯の滄浪閣に一泊し、夜中の二時過ぎまで公と對談して益を得た事柄を紹介することに止めやう。

第一は政黨員の內閣組織に關する憲法上の解釋で、是れは當時の時代精神に一鞭くれて憲政運用の妙を發揮せんと企てられた公の苦心を窺ふに足るべき事柄である。公が當時各地に演説した憲法論中、政黨員の內閣組織に付て述べた論旨が「憲法義解」と矛盾して居るとの批評があつたのに對し、公は世間の論客が不見識で困ると感じたのは、斯ういふ理由であつたと語られた。公曰く「憲法は根本法じゃから狭い小さな事は規定してない、故に廣い解釋を取るのが宜しい。政黨內閣組織の是非に付ても其通り、政黨員が內閣を組織して善い惡いのと云ふ様な規定は憲法にないから、政黨員でも何でも上の信任と下の重望とに副へば大權で任命せられて然るべきじゃ。一部大學の教授連などは僻説を採つて居る様じゃが、世運の進歩に伴ふことを知らぬので甚だ始末が悪い。學者といふ迂儒が多くて大局に付ては何も考へて居ない。頭ががらんで困つたものじゃ」と。そこで我輩も平生の所見が公と一致して居ることから、憲法には國務大臣の規定は



あるが内閣及其組織の規定はない。内閣及其組織は憲法の補充法たる行政官制の規定する所で、大権の自由行使に屬して居る。憲法の規定と大権の自由行使とは區別のあること故、憲法に内閣は政黨員を以て組織すべしと明掲せざるの理由を以て、政黨員の内閣組織を非とするの故なく、且之を非とする理由に對しては、憲法には政黨員は内閣を組織すべからずとの規定はない故、政黨員が内閣組織を爲すことあるも何の異むべきことがあらうとの論理上同格の反對説が立派に成立すると話し懸けたら、公は莞爾として首肯せられた。其後公は立憲政友會を創立して政黨員を内閣大臣に抜かれたのであつた。蓋、公が是れより先き大隈板垣に政權を譲つたのも、同一見地から來たのであつたことも是れで推すことが出來様と思はれる。而して是れは立派な時代精神の代表ではあるまいか。

第二は公の讀書法で、公の政治上の施設が往々讀書から得來つた智識に基づくものがあつたといふことである。公が「宋名臣言行錄」を愛讀し、「拿破傳」を愛讀し、「カザール傳」を愛讀して居られたことは世間に傳つて居り、又「日本政記」に依て愛國的經世家と爲つたことも概ね知られて居る。併しながら公の讀書の秘訣に付てまた人が傳へて居らぬ。公曰く、「俺が英雄豪傑の傳記を愛讀するには一の秘訣がある。外ではない、それは深く其人の天才に着眼して、其天才が發

動するとき如何なる事業を爲して成功したか、又如何なる困難なる事情に遭遇して失敗したか、即ち其成敗利鈍の因で來る所は何れにあるかと考へ之を自分の政治生涯の鑑にするのじや、俺は天才も何もない者じやから斯うでもしてどうか英雄豪傑の天才の活動を模範とする様に心懸けて居るのじや」と。是れが公の讀書の樂で又其秘訣であつた。天才に着眼し、天才を讀むは是れ亦時代精神の代表と見て宜しからう。又讀書から政治上の施設を思ひ付いた一例は、去二十年に勅語を請ふて實行した海防費献金の次第である。公曰く「先年大山（元帥）が陸軍大臣で居た時、（當時公は總理大臣であつた）豫算がないので大阪砲兵工廠を閉鎖せなければならぬ様に爲り、自分の許にやつて來て「あれを潰すは惜しい、困つたものじや」との訴であつた。俺も同感で、大山の心配も氣の毒に思ふた。其時俺は恰も「カザール傳」を讀で居つたが、其中に斯ういふ話を見出した、それは伊太利——其頃はまだサルデニアじや、其伊太利が同盟軍に加はつてクリミアへ出兵しやうといふ時の光景じや。當時カザールは内閣員中の反對があつたに拘らず、之を排して既に閣議を決定し、陸軍卿ラマルモラに一萬五千の兵を率ひて直にセヴァストポリルに向ふことを頼んだのじや。するとラマルモラは「宜しい、併しながら此に條件がある、若し君が我輩の留守中にアレキサンドリア及スベジアの防備を完成するといふ約束をしたなら快よく出師しや



う」と、斯ういふのであつた。當時の國狀からいへば財政甚だ困難で、到底是れは出来ない相談じゃつた。が、カヴールは二つ返事で承諾した。それで出師の議は一決して、兩雄が陸軍省の門前で右と左に別るゝ時の番ひ言葉は、「アレキサンドリア」「スベジア」の二語であつた。カヴールが何故に此の如く、容易くラマルモラの條件を承諾したかといへば、深く國民の愛國心に倚賴し、寄附金を募つたならば、兩地の防備は出来ないことはあるまいと確信して居つた爲めで、其れも長らく民間に在つて能く形勢を明にして居たからじゃ。果してカヴールは國民の醜金でさしもの大事業を成功せしめ、後年澳地利の勢力を伊太利から驅逐するとき、有效の防備と爲つたのはアレキサンドリアとスベジアとであつた。自分はラマルモラと同じ陸軍大臣たる大山の話に、端なくもカヴールの行つた迹を思ひ浮べ、そこで海防費献金の事を發案し、勅語を請ふて之を國民の愛國心に訴へ、實行の結果、大阪砲兵工廠も閉鎖の厄を免かれ、献金者の姓名を鐫り附けた大砲が出来て、觀音崎以西の防備の用に充てられる様に成つたのじゃと、是れは時代精神の代表に縁遠い様であるが、國防の充實は矢張時代精神で、早く既に此に着眼したのは即ち其精神の代表であらう。

第三は年少者立身の秘訣で、公は之に付て斯ういはれた。『人は何でも地位の高い先輩から依頼せらるゝ様に成らなくてはいけぬ。此心懸け一つが肝要じゃ。自分の經歷からいふても所謂大久保内閣の參議工部卿と成つたときは一番年少じゃつた。其頃故三條、岩倉及木戸諸公が自分に待つ所のあつたのは、何事に附けても諸公の頼まぬ前に其將來頼まるべき事柄の調査をして、ちやんと準備して置いた爲めで、何時でもさあといふ時に役に立てた。是れが二度三度と度重なり、遂に大小政治の樞機に參與する様になつた譯で、秘訣といへば先づそんなものさ』と、是れは個人立身の一要義に過ぎないが、帝國の地位から言へば何事に拘らず調査をしてちやんと準備して置くのは時代の要求である。公の言を以て之を國事に推せば、公は即ち知らず識らず時代精神の代表者であつた事が了解せらるゝであらう。(高木信威手記)

## 知音 十五年

自分が始めて公に面會せしは今は昔し明治二十八年九月なり、當時自分は數年間英國留學後、佛、獨、伊、澳等の諸國を經、例の遼東半島還附問題の紛擾中、特に露國に至り、當時露國の重立ちたる人々に對する感想等も識り得たる時なりき。



歸朝前特に六ヶ月間極東の形勢に付き書生ながらも自分が無遠慮に談論を試み、種々有益なる材料を得たる人々は、英國に於てはグラットストン、ソースベリー、カーズン、デルク等を首めとし、佛蘭西にては時の外務大臣アノート、タイムス通信員たりしブラウウキッツ、伊太利にて故クリスビー、澳地利にてはタイムスの通信員故ラビノ、露國に至りては宗務院總長たりし故ポベドノブスキ、故イグナチーフ伯、ノベオブレンマの持主スウオーケン等其主なる人々なりし。

今の樞密院顧問官河瀬子爵は予が英國留學中、我英國公使として懇篤なる指導を受けたる人なるを以て、歸朝勿々其他の先輩を始め同子爵を訪ひ、右旅行中の面會談を述べたるに、後二日子爵は時の總理大臣伊藤公に面會せよとの注意を與られたれば、日は記憶せざるも九月下旬予は伊藤公を總理官邸に訪ねたり。公は其時左の如く話されたり。

「河瀬より多年海外に留學せられ居られたる事情、並に今回は殊に各國を歴遊せられたりといふことで定めて有利なる御話もあらう、不肖ながらも一國首相の地位に居る上は喜んで耳新らしき識者の御話を聞き度くかくは御尊來を願ふ次第である」と、いふ調子であつたから、自分は恐縮して「是はしたり、御丁寧なる御言葉恐入ります、白面の書生、無責任の旅行、別段の御話もござりませす、却つて御指導をこそ望む處で御座ります」と言ひ、其日は格別込入つたことを話さず、「何れ御手隙の時に又御都合を伺ひませう」と申したらば、『それならば明日一時より伊皿子の私邸に來訪あれ』と言はれ、茲に始めて私邸に於ける伊藤公を知るの機會を得たり。

定刻午後一時より公を訪ひ、英國に於ける當時の國論並に東亞に對する感想中、英國は只日本の清國に勝ちし結果に驚くのみにて、未だ金力を以て日本の後援と爲るべきまで國情進まざる理由より、各國視察の有様を述べ進んで露國に至り、日露兩國の關係は全く誤解を重ね、露國は日本を以て侵略的第二のジンギスカン帝國と誤解し、日本は亦露國を以て日本の絶對的國敵なるかの如き感想を露國に與へつゝある事情を具に述べたるが、此談話は午後一時より六時まで一刻も休まず、公は時々質問を發せるのみにて始終傾聽し、夕暮、食事の時公爵夫人と列席の食卓には四方山の世間話にて別れたり。

是れ予が始めて伊藤公に接近したる事情にて、爾來大磯、伊皿子、並に永田町の官邸等、予は當時全く日露に於ける國情に關し今少し相互の誤解を解き以て韓國問題の解決方法に付て公の教を聞かんとて屢々出入訪問し、時に公より來りし書状も今尙ほ一二通は手許に在り。

斯くして半年間、公は非常の厚意を以て何時も面會し呉れ、又種々國家の大勢に關し自分に向ひ其時の政況等を分明説破せざる範圍に於て教へ聞かせられたること屢々あり、殊に公の性質の



磊落なる懇親の度深くなればなる程、例の寢酒とて午後十時頃官邸又は私邸等に到り、其の寢酒の御相手をする時、而も左右に美人の居らざる時、公が少しく耳熟し、酒の氣力廻る頃に至れば口を突いて出づるもの悉く天下國家の問題より近刊外國書籍雜誌の意見並に内外政治家の論評等談論百出するを常としたり。斯く半年の間、予は始終一貫、韓國問題の解決上、日露の誤解を緩和するの手段とし、露國に至つて露國の形勢を視察せられんことを繰返し公は唯「ウム／＼」と聞き居られたり。

斯くて翌二十九年の春に至り、愈々露帝の戴冠式には我國唯一の政治家中誰か出席せざるを得ざる場合となりたる時、或夜のこと公を總理大臣官邸に訪ね「愈々近日誰人か御指名相成るとのこと、就ては豫て數回御耳を煩はした通り公御自身の御決心如何」と云ひしに「自分は今首相の地位に在りて行くことは出来ぬ、併し昨今稻垣が〇〇を擔いで、出掛けたいといふ運動があるがね」と笑ひながら語られければ、予は直ちに「公若し出立の出来ぬといふことであれば、山縣公を起たしむべく、何となれば此戴冠式は單に儀式に列するに非ずして日本の誠意を露國に知らせ露國の誠意を日本が識り、日露兩國間に韓國問題の解決を爲さんとするには威望一世を益ふの人ならざるべからず」との旨を繰返したるに、公は相變らず「ウン」と言ひたるのみ。

四五日の後、其邊の結果に就て聞く所あらんとて公を訪ねしに、公は「今内閣會議に於て愈々山縣をやると極つたが、此事は決して乃公から聞いたといふな」と言はれたり。

予は直ちに「然らば山縣様に私を隨行させて戴くことに付ては御話し下されませぬか」「イヤ、まだそれは言はぬ」「それでは事の約束が違ひます」「よし直ぐ山縣に乃公から手紙を書いてやらう」と云ふ事になつた。

予は直ちに翌朝未明に山縣大將を目白に訪問し、直ちに大將に向ひ「愈々遣露大使の御内定になつたそうでござります」と云ふたら、大將は驚いて「誰から聞いた」と言はれたに付き、「實は伊藤公より承りました、何れ詳細の事情は公から御話もござりませうが、是非今度は御供を願ひたう御座います」と懇請したれば、大將は「兎も角も伊藤公の承諾を得て來い」といふに付き「伊藤公は御承諾下されました、此上は大將御自身が御承諾下されば最早確定致す譯でございませ」と言ひ残り、直ちに又公を訪ひ「昨夜御口止はございましたが機會を逸してはならぬと思ひまして、斯く山縣大將に申し上げました、此上は宜しく御願ひ申します」と頼みたるに、公は莞爾として「よし／＼」と云はれたり。後再び山縣大將に至り「如何に御確定下されますか、是非御供を願ひたうござります」と催促に及びしに「何れ今日の四時に伊皿子に行くから其時に來て居



れ」と云はれ、伊皿子の邸に至り伊藤公と話し居りたる時、山縣大將は這入り來り、茲にて相談一決し、兎も角も予は山縣大將の御供で露國に行くことゝはなれり。

茲に予は出立前公を伊皿子に訪ひ暇乞ひせる時、今も猶忘れ難き訓戒あり、公は葡萄酒を酌して呉れながら「サ！愈々行くことになつたが能く注意せなければならぬことは、君は役人ではないから在外の公使あたりから故障を申込まれるやうなことがあると行末の爲めにならぬよ、大凡立身出世は周圍に敵を受けざる様に注意するが大切だよ」との言葉は、今猶予が事に當り思ひ起すの訓言にして服膺するも嗚々予の不徳を如何にせん。

二十九年の秋、予は露國の戴冠式を終り、其足にてバルカン半島を一周し、歸つて公を大磯に訪問し、バルカンの形勢に付き懷中せし地圖を以て詳細に露國がバルカンに手を引き愈々東亞に手を伸さんとするの詳細なる事情を述べたり、當時「巨人の右手」とて予のバルカン視察問題は「太陽」廿三號より廿五號中其結論に「況や露國が其國策上、經濟上、歴史上の必要よりして彼は今や此右方の病人に對する外、更に其の左方に最も報酬多き新病客、即ち清國の診察に着手すると共に内顧多き彼が左右の巨手は一時に兩老朽國に臨むこと能はざるに於てをや、奇語を以て露國外交家の心膽を奪ふの批評を下さんか、余は云はん、曾て是れ土耳其の強きを恐れたる露國

は今や誠に其弱きを恐るゝものなり」云々と。

予は此時或る外交問題に付き激昂せる意見を述べたるに、公は「まあさう性急にも往くまいぞ君のことは井上も心配して居るからまあよく井上へも頼め」と云ひ懇篤に予の絶望的觀念に對する慰安を與へられたり。

斯くて後又半年越ゆれば三十年の春、英國女皇ヱクトリア帝の六十年祭に對し愈々伊公の之に參列することゝなりたれば、予は又此機會に英國の眞情を研究したく公に乞ふて隨行を願へり。

其時予は自分の外、松本君平氏も豫て公の知遇を得つゝあれば、是非兩人を連れ行き呉れんことを願ひしに、公は笑ひながら「二人では費用が掛るぞよ」と言はれたるも、衷心我等兩人の希望を容れ呉るゝ様子見えければ直ちに事情を山縣大將に訴へ、山縣大將よりも公に尙は懇談せられんことを願ひ、其足にて井上侯に至り費用の一點に就て話せしに、此費用は侯が世話して呉れるが、其事に就き伊皿子に於て偶然伊藤、山縣、井上との三元老が對坐して話し合ひたる有様を見るに、今も猶ほ記憶せるは、伊藤公は動もすれば辯論を以て山縣公に向はんとし、山縣大將は謹嚴なる態度を以て「ハハア」と微笑し、中間に居る井上侯が相を崩して二人を見詰めて笑ひ



居る有様、予は白面書生の身とし直ちに其坐を引き取れるが斯る有様の時に至り三人の性行に付き深く教訓となりたることありたり。斯くて予並に松本は伊公渡英の隨行船中に加はり横濱を解纜したるに偶然にも船室は公と相對せる向側の一室を松本と予との一室とは定まり居れり。

されば公の船室とは、僅に二尺の廓下を隔てゝ居ることなれば、我々兩人は何となく窮屈を感じざるに、公の磊落なる退屈の時は「居るか」と言ひながら戸を明け「話があるから來い」と呼出され、殊に驚くべきは氣力の旺盛なる、大抵我々兩人は朝七八時まで眠りたき時にも朝五時になると時々戸を叩きながら笑を帯びて「ゲットアップ」と言ひつゝ既に其時は服装もちやんとして居られたる事屢々なりき。

又航海の船中、夜分には我々兩人を船室に招き宮貴樓から送られたる正宗の日本酒を其處に出させ又は色々の乾物、罐詰を列べられ公の夜酌の氣焔は當るべからず、雄辯滔々議論縦横、果ては綺話逸談まで我々兩人は唯其氣力の盛なるに感ずることのみ、例すれば公は一杯機嫌に「何をしたつて君等の若い連中に負けるもんか、議論でも學問でも女でも較べつこになるものか」と大笑ひに言はれる。其態度風采、所謂、膽氣人を壓せずんば止まざるなり「オイ望月、君は〇〇と〇〇してではないか」「イ、エ」「このヒポクリットめ」と松本に向ひて例の徳相圓滿なる愛嬌溢る

ゝ大笑をなし遂に話は神戸の國のことに及んで「あいつは面白いよ乃公が斯ういふ歌を作つた唄つて聞かせやう」といふて公が二上り口調で「あくにおかれぬ歸きにやならぬ歸しやひとりて寝にやならぬ」とやつたがどうだい、と言ひながら、相を崩して笑ひ出す時の有様などは宛然、英雄回首即兒童、其の天真爛漫の有様は今も猶ほ眼にちらつくばかりで、松本は予に向つて恰で老壯士だなうと低語せり。

尙ほ殊に記載すべきは倫敦滯在中、今の大使加藤高明氏が時の駐英公使として公の旅館に來り其席には公、朝比奈、加藤並び居り予も亦其席末に居りしに、加藤氏が種々外交上の事に付き公に苦情を混へての話を爲し居れるを、公は暫く聞きながら莞爾と笑ひつゝ「そうさ君を總理大臣として乃公が君の下で公使になつて見やうか」と我々兩人を見ながら圓滿なる例の笑を漏したるに流石の加藤氏も話を他に轉じたりき。

さて予は歸朝後、進歩黨に入りたる後も時々公の門に出入し、相變らず教を受くること度々なるが、此時に至りては日露の關係は愈々誤解に誤解を重ね、韓國の運命は最早日本の手を脱して露國に移らんとするの形勢に切迫せり、予は公に教を乞ふ毎に朝鮮問題の解決に關する公の意見を問ひ、同時に當時露國の海軍力並に極東に對する軍備の詳細に付き得たる所の數字等を公の許



に持参し、或時は公の意見を追つてまでも聞かんとせしも、流石の公は斯かる重大なる問題に對しては決して分明説破したることなく、去りながら暗黙の間に公の意見を推知せるが、其時公の話に日本の國論を一致し其一致したる健全なる國論の上に政策を施すに非ざれば國家百年の長計を容易に完成するものではない、今の自由黨とか進歩黨とかいふが如き小範圍に於ての争にては逆も健全なる國論を發達することは出来ぬぞ」と言はれた、此の時は明治三十一年より三十二年頃に亘る間に、即ち公自らが政友會を組織せんとするの心組ありし時なり。

予は進歩黨に居り熟く日本政黨の内情を觀察し、斯かる有様にては立憲輿論の機關などは名あつて實なく、寧ろ大なる政黨を作る機會もあらばとの觀念を懷きければ、是れより伊藤公の意見に對する消息は時々之を尾崎愕堂氏に漏せり。愕堂氏も固より進歩黨の主義政策は、之を實行せんとするには勢ひ「より大なる範圍」に於て國論を喚起するの必要といふことより、暗黙の間に伊公との意思は面會せざる中に疏通することとなれり。

斯くて予は公の其意見を洞察せるより、朝夕公の門に出入し、愈々公が自由黨を解散させ政友會を組織せんとする決心の來りたる時に、單に自由黨といふ一つの狭き垣根のみに非ず、之を擴げんがためには進歩黨をも解散させ、而して茲に立憲自由主義を懷だく所の同志を公の許に赴合

するの意見を開陳せるに、公は始めて明治十四年來、大隈伯との政治上の關係より、恐らく此問題は大隈とは兩立し難からんと意を漏らされたり。

予は大隈伯と兩立し難ければ進んで進歩黨に於ける首領連中との意見を交換せられては如何と述べしに「ウン大石か、大石は能く乃公が知つて居る男ぢや、次に犬養、ウン是も一二回會つたマア進歩黨の中に國家を本意とし黨略を第二とする眞正の政治家は外に誰がある」と尋ねられれば、予は尾崎行雄氏の事に及びしに公は「さう、あの男は餘程流が違つて居るな、あれは話せるであらう、尾崎は一體どういふ考を有つて居るか」と尋ねられれば、予は「尾崎氏は今日の國家として何事も朝鮮問題の解決に全力を盡さざるべからず、朝鮮問題の解決に全力を盡さんには、勢ひ露國と滿韓兩邦に於ける問題を一括協定するの必要ある趣意」を述べたるに、公は默考し「フム、フム」と云ひければ予は進んで、「どうです尾崎とお會ひになつたらば」ウン乃公は無論差支ない」併し尾崎君も今日は一黨の首領であり、兎も角も公とは政治上の意見が立場を異に致したる間柄であれば、あなたも尾崎君に對する尊敬とし、尾崎君が此處まで訪問して來るといふのはどうも事情如何なものでござりませう」ウン、乃公はそんなことは頓着せないよ。尾崎がいやだと云ふなら何處へでも行つて會はふや、又國家の大事を論ずるに尾崎が場所を選ぶ必要



も無からうぢやないか」「それは尾崎君はないと致した所がそれでは事を成す上に種々の誤解が起らうと思ひます私だけの老婆心です」「ウン宜からう」「兎も角も公がそれだけの御決心であるならば事情を尾崎君に話して見ませう」と言ひ其當時此問題に最密接せる松本氏竹越氏等と協議し尾崎氏に向ひ公との會見を勧めた。

斯くて予は伊公に向ひ、當時予は赤坂氷川町に居りければ尾崎氏は大森より公は靈南坂の邸より予が家に御來駕あつて此處にて會見することには公も同意せられたり。

此同意の趣意を尾崎氏に傳ふるや、尾崎氏は公に於て既にそれだけの考もあるならば場所はこちらも選ぶ所に非ず、寧ろ進んで公に面會せんとて、此伊公對尾崎の始めての意見の交換には予並に松本二氏列席し、午後一時より午後四時まで、二人の間に朝鮮問題の解決に付き、露國と協商を開かんと付ての論議熟し、此論議の上に於て政見一致せん曉は尾崎氏は伊公と共に國論を此方面に指導せんとの黙約成りたり、是が即ち尾崎氏が進歩黨を去り政友會に赴きたる事情にて、後、數日、公より尾崎氏に宛てたる一書には内外國勢の逼迫せる事情より、公が既往の來歴名譽を抛つて民間志士と國論指導の此新生涯に入る苦心を述べ尾崎氏との提携に對する懇篤なる文字あり。

斯くて予は政友會組織後伊藤公の門には時々出入し、殊に今考へれば不謹慎の中にも公の磊落と自分の不注意とを對照する一奇談あり、それは發會式の日、愈々伊藤公が馬車にて帝國ホテルに臨まんとする時、予は會主公の玄關に公を訪問せんとせし時なれば「一所に乗ても宜うござんすか」「ウン」といふから其馬車に飛び乗り帝國ホテルに至りたり、跡にて聞けば思慮周密なる伊東子爵は公に向ひ「多數の黨員を支配する上に於ては一點の愛憎依怙あるべからず今日の發會式の馬車に望月を同乗させるなど、云ふことは宜しくありません」と云はれたることを或人より聞き自分如何にも感じたることあり。

さて此時は桂内閣となり、伊藤公は例の財政整理上如何にするも節減の餘地ありと云ひ桂内閣は餘地なしといふ其意見の分れは明々白々火を賭るよりも明なりと言明せられ、余等は此意氣に感激し、遂に議會を二回までも解散せらるゝまで奮闘したり。

此二回目の選舉が濟んで東京に来て見ると世に所謂妥協案成立となりたり。

今も余は忘れぬ、紅葉館の席上、伊藤公が「今日は皆打くつろいで縦談を試むべし」と言はれた語尾に續き、丁度其時に回向院に角力のある日なりければ、

「諸君子は只今總裁が今日の宴會に會員縦談を試むべしとの言葉に對し之が對句と致して兎角



妥協盛なる世の中であるから横議を申込まうといふ、其横議に付て思ひ起せば今日は回向院に於て天下角力の勝敗の岐れ目である其東西力士が片唾を飲んで扇が孰れに揚るかといふ其機会に行司たる者がヤレ待つた水を入れるからと言つたらば天下の観客は如何に失望するでありませう。願くは總裁閣下、今や立憲、非立憲の此の岐れ目の土俵に於て其扇をば暫時引取らざることを希望いたします。」

と是れ丈けのことを言ふて居ると、女中が只今伊藤の御前様が呼びますからといふので、予は遙か末席より伊藤公の面前に行くと「オイ望月、君の演説は眞面目でやつたのか」無論さうでござります」ウソ乃公は平生君に付て色々の同情を持つて居るぞ、今まで十六歳から國事に盡して今日の如き侮辱を受けたことはないぞ、君は短刀を持つて來て居るか、サア刺違へやう、絶交しやう」と言はれた時の怒り方は一方ならなかつたが、ハハア是は多分お爺さん、何か政略に使ふのか知らんと予は黙つて居りたり、此時予が心中には種々に考へつゝあつたが兎も角も沈黙を以て終らんと決心したり、余は別に謝罪もせず其儘其座を引下れり、當時予が平蜘蛛の如く謝れりと記載したる新聞の出來事は此事にてありたるなり。

去りながら公は翌日政友會の玄關にて予を見るや否や、後ろから脊中を叩き「オイ、餘り強い

ことを言ふな、今は強いことを言ふ時機ではないからね」と例の微笑を含んで言はれたるが、併し之を機會に余は終に其他の同志と共に政友會を脱會するに終りたるが今となつて考ふれば公の所謂強いことを言ふ時ではないといふ時といふ字には種々雑多の入込んだ政治上の關係のあつたことは跡にて知るを得たり。

其後、殊に記憶すべきは統監を辭したる前後、靈南坂にて數回の面會中、韓國の運命に對し、公の意見は最も記憶すべきの問題なり。

是は謹んで筆を擱き次に其序立憲政體の前途に就き有益なる談話あり。予は一日公に向ひ代議權の昨今は殆んど一種の骨董品となり結局は誰が安く之を買ふかとの問題となり、選舉民の腐敗を語り此選舉區を刷新するの一方法としては議員の志望を遠大にすべき行政機關の刷新上、切に文官任用令の改正如何にある事、然らざれば今の議院は事實上、單に國政の一諮詢府たるに留まり、從つて議員たるものゝ希望抱負は勢ひ目前の世情に追はれ、一の横井時雄を犠牲とせし誘惑は、更に幾多の横井時雄を生せんと述べしに、公は沈黙幾秒の後、其問題は中々容易のものではないぞとて憲政の前途に就き諄々教へらるゝ所ありき。

最後は總理大臣の官邸に於ての晚餐會の了りし後、各國際新聞協會員が争ふて公に揮毫を頼み



し時、公は立ちながら數枚を書き余が「眼鏡がなくても宜いですか」と聞きたるに「ウン、是しきのことにあるものか」直きお立ちですか「ウンすぐ立つよ」「お身體をお厭ひなさるやうに」「さう何處へ行つても死ぬ時は死ぬからね」と例の笑を洩されたり。

余が十五年間知遇を受けたる間に於て、談暗殺のことに及べば、公は常に處決して居るかの如き口調を語られ、就中最近の言葉は驚くべき程、今猶記憶を離れず、其は「もう乃公もする丈けの事はしたのだから此上己れの命を欲しいといふやつがあるなら、誰にでもやるまでのことさ」と極めて死生を眼中に置かず、今回、「ア、やられたナ」と其最後に於ける不動不迷の一言一行は如何に伊藤公平生の決心を示したるものと深き痛感に打たれたり。

尙、序ながら公が金錢に對する觀念に付て記憶すべきことあり、其一は政友會を組織する時に山梨縣の某富豪を余が紹介して公に面會を求めたる時。公は國家の爲め政友會を組織することを話され、某は自分も盡力致して甲州だけのことは如何にも自分が率先致しませうと明言したるに其時公は「ウン」と言ふたばかりにて何の言葉も無かりき、某の歸りし後余は公に向ひ、「せめて公から宜しく頼む位の御言葉があつても宜しうござりませうが」と言ひけるに「何んだあれが數百萬圓の端た金があるからと云ふて、乃公が何も頼む必要があるかい」と笑ひながら言はれたる

ことは公の金錢に對する心事を知るに足らん。

去りて公は人の貧窮等に付ては無限の同情を持てり、予は自ら進んで公に金の無心を云ひしことなきも、或冬の夜公より電話が掛りたれば行き見るに、公は「節季も近づいて來たからおぬしも小遣がいらうね、サア之をやるよ」といふて一包を與へられたることあり、此包は歸つて見れば千圓なりき、此他公の性質中殊に吾人の模範とすべきことは、如何なること起るも公の動搖せざること、又顔色に表はさざることは實に驚くべきものありき。公に出入し居る間、國家に關する重大なる電報の來る時、殊に日清戰爭前後、日露問題等の時、種々の電報來るも決して之を辭色に表はさず、何か考へに沈むと左腕を巻くりながら「ウン」と云ふて數分間、瞑目する模様のある時は、既に斷案の出來たものと思ふことが屢々あり、其他、急言疾行といふべき態度なく、いつ見ても落付き拂つたものにて此點も常々感心に堪へざる處なりき。

終に臨み公の此度の遭難に付ては如何にも悲痛なれども、此悲痛事は歴史上より見れば、余は實に古今の歴史を通じて如何にも天が注文通りに作つた偉人傳の芝居の如き最後なるを思ふ、試みに思へ防州東荷村の貧乏浪人として生れ、日本の國運が恰かも富士山の絶頂に旭日の輝くが如く發展せる時期に於て、公も亦是と同様なる名譽ある地位に迄榮達し、其隆々たる國運の發達は



公一人の方に成るものにあれざれど恰も伊藤公の作り出せるが如き觀を呈せり。而して其死するや内地にて病死せず又統監の時に暗殺せられずして、時もあらう、處もあらうに、露清兩兵の肅然たる敬禮中、而かも世界列國の新聞記者が集會し、東亞の大問題に付て一大斷案の下るならんとの想像を以て世界萬目集注の中心點となりたるハルビンに於てす。思へばハルビンは日露戰爭の當時日本軍進撃の最後の目的地と期したる所、其ハルビンに於て恰かも爛熳たる櫻花が狂風一陣、飛ぶが如くに散り去んぬ、正に是れ連城の巨壁が粉壘、其粉壘が光芒陸離と云ふ最後の悲劇にあらずや。

且つ夫れ凡そ世界の歴史にて暗殺に遭ひ最期を遂げし政治家程、内外國民より同情と尊敬とを寄せらるゝものはなし。近世史中にも佛のガンベッタと云へばチールやマクマーホンより以上吾人に悲痛の紀念と共に彼の時代に於ける佛國を回想せしむ。米のリンコロン、マツキンレー等を始として我國にても同一の事例多々あり、予は昨日公の靈柩を秋津州艦上に迎へし時、其艦上にて上村中將が斯る事は日本海軍史上始めての異變なりと云はれしが、見れば公の遺骸を包める靈柩はデツクの中央に高さ八尺周圍二三間に亘り左右前後、紅淋漓たる海軍旗にて包まれてあり名譽ある海軍將校の手にて横須賀より新橋に至れば直に忠勇なる陸軍の儀仗兵にて靈南坂に送ら

れ沿道の人識ると知らざるとなく往々合掌して涙と共に靈柩を見送るもの數百番ならず、予は公の遺徳を偲ぶと共に我國民の如何に頼母しき立派なる心掛あるかに感泣し感泣しつゝ横須賀より新橋迄靈柩を載せたる汽車に暗涙を呑んで陪乘したり、嗚呼予は生きて此偉人に接し教を受け恩を叨にする實に十有五年、依然身世索落復家國に對し一片の微貢だもなく、空しく故人の偉靈に對して嗚咽するのみ、噫。(明治四十二年十一月一日望月小太郎稿)

## 詩人としての公爵

稀世の大政治家たりし伊藤公は詩にも歌にも堪能の人なりし、就中漢詩に於ける巧手は優に一天地を有せり、身は百劇忙中に在るも感茲に臻れば數首立所に或るは常なり、其襟度の濶速自在なること眞に胸中閑日月を有する偉人の性格を得たりと稱すべし、由來詩に二種あり一は詩人の詩にして一は非詩人即ち素人の詩なり、詩人の詩は花鳥風月を吟賞するゆゑに自然詩人臭く、又た素人の詩は雅懷に乏しきゆゑに俗氣臭し、素人の詩は佶偈聲牙にして乾燥無味なり春畝公の詩風は此兩者の何れに屬するといふに、素より詩人的の詩に非ず、又た素人の詩の如く乾燥無味に



非ず故に純詩人より見れば物足らぬ心地あるべしと雖ども是れ公の餘業餘技に過ぎざれば毫も怪しむに足らざるなり、眞率に之を評せば公の詩は兩者の上に超脱して一種精妙の風調を得しものと謂ふべきなり、而して公の詩は孰れも熱誠の充溢するもの赤心の滂沱たるもの性靈の表現せるものにして、詩人等が單に山水を賞し風月を吟するが如き意味の淺薄なるものに非ず、公が一代の詩篇數百首を貫通して此の性靈の現はれざるなく誠實の籠らざるものなし、故に之を讀むものは直に公の抱負を知り天下舉つて之を傳唱す、公曾て兵庫縣知事たりし頃に一詩あり、豪氣堂々横大空、日東誰使帝威隆、高樓傾盡三杯酒、天下英雄在眼中、と此詩の如きは如何にも意氣の豪壯なると赤誠の充溢せるとが認められて、世を警め人を誠むるの力最も強し、故に夙に人口に膾炙して天下殆ど知らざるものなし、蓋し公の詩風は頗る流暢にして吟唱するに礙なく、詩人の口吻なくして又た素人の俗味もなく、而して其間に無量の暗示ありて、報國盡忠の公の精神を發現せり、是れ世人が公の詩を歓迎し、争ふて之を傳唱する所以なり。

公が一代の詩篇多くは七絶にして稀れに七律を作る、而して長篇に至つては二三あるに過ぎず故に公は七言絶句の平韻を以て最も得意とせられしもの、如し、是れ畢竟公が劇務鞅掌の傍、小感偶得を記されしとき、又舟車に乗搭して古今を懷ふとき、又た高樓玉杯を傾け感興酣なるとき

等に卽席吟咏せられしもの多きを以てなり、長篇の如きは到底隙あるものに非ざれば出來ざる詩なり、公が七絶を好みたるは粗ならず密ならず詩の上乗なるものは七言絶句に限るを以てなり、公の書も又た詩の巧妙なると共に最も圓熟し、諸元老中恐くは第一位たるのみならず、書家を以て鳴るものも三舍を避くの靈腕を有されたり、故に公の書は名手第一に置かれて之を欲するもの甚だ多く宴席にも筆硯を備へて其一揮を煩はすを常とす、公又た興熟し宴酣なるに至れば忽ち管城を取り揮洒縱横紙上忽ち雲龍を湧現し餘勢時としては襖唐紙に及べりといふ、其元氣の旺盛なること知るべきなり、大政治家にして斯の如く詩書の双絶あるは我國に未だ曾て見ざるの例なり。公が斯の如き精妙の詩を作るは如何にして之を得たるか、公は少壯の時より國事に奔走し、臥薪嘗膽又た韻事を見るの暇なき身が如何にして之を學習せしか、諸元老多しと雖ども詩作の多き公に優るものなし、而して其作何れも脱俗超凡の巧妙なるは實に驚歎の外なきなり、要するに公の天賦に歸すべしと雖ども抑又た舊武家時代に漢籍を學習し、餘暇詩作を試みたるもの遂に今日の金聲となり玉振となりしならむ。

公が今回滿洲視察の途に上るや哈爾賓遭難の當日までに作りたる詩は是れ公が最後の詩と謂ふべきなり、其詩何れも七言絶句にして且つ七首あり、妙に七を得たるは何等の奇ぞ、公が七絶七



首や以て吾人が永く傳唱すべき詩たるを信するなり、左に之を録す。

十月十四日夜大磯の滄浪閣を出發し、汽車山北を過ぎて三島に進む間に一絶あり。

秋晚辭家上遠程。

車窓談盡聽蟲聲。

明朝渤海波千尺。

欲弔忠魂是此行。

十六日馬關に着し鐵嶺丸に乗す、十七日船中に於て神嘗祭の神筵を張り一行席を共にし盃を擧げて祝す詩あり、

匆匆南北東西客。

裘葛一年更幾回。

萬里壯遊黃海上。

神嘗祭日共傾盃。

十八日船渤海灣に進み、夜大連灣に入る、二絶句あり。

渤海灣頭新戰場。

兩軍忠骨土猶香。

恩仇元是非私怨。

追弔當年轉斷腸。

西來次第覺秋涼。

漠北應知雁帶霜。

風雪當年埋骨跡。

徘徊欲弔淚成行。

十九日大連に上陸し、二十日撫順に赴く、廿一日二百三高地の戰場を見分し、午後二龍山に升る、歸途露軍戦死者の墓を弔ふ一絶あり。

夙聞二百三高地。

一萬八千埋骨山。

今日登臨無限感。

空看嶺上白雲還。

二龍山に於て、

望臺塞下二龍山。

歷々戰圖眉睫間。

破壁猶故攻取跡。

血痕和土々斑々。

露軍戦死者の墓を弔ひ花を備へて、

丘塚纍々不記名。

生靈幾萬作犧牲。

堪憐今古蟲沙恨。

手薦寒花淚自橫。

廿二日朝奉天に赴く、廿三日午前總督と共に奉天宮殿を拜觀、古器物類を見る、廿四日撫順炭鑛を參觀し、夫より急行列車にて長春に向ふ、此間汽車中にて公沈思默考し頻りに吹敲せられしも不思議に一詩を得られず、廿五日は空しく沈吟不成に了せり、而して翌廿六日哈爾濱に到着して停車場上に不慮の災禍に遭ひ、遂に春畝樞相の偉大の勳功は茲に終焉を告ぐるの止なき



に至れり。

上記の七首を読むもの誰か又た斷腸の感に堪へざらんや、秋晩家を辭して遠程に上るの起首は遂に不歸の遠程に上るの識を爲し、車窓談盡きて蟲聲を聽くの承句は遺族及萬人の腸を斷つの聲とはなりぬ、忠魂を弔はんと欲する是此行は、何ぞ圖らん、公自身の事柄を現出するの暗語となりたりたり、其他追弔當年轉斷腸と云ひ、徘徊欲弔淚成行と云ひ、空看嶺上白雲還と云ひ、血痕和土々斑々と云ひ、手薦寒花淚自横と云ひ、各首各句、何れも追弔の文字を駢べ、悲哀の語句を列ねざるはなし、一世の大政治家茲に終焉を告ぐるの日に逼りし爲めか、公の此行に於ける七絶七首の文字悉く斷腸の調を含めり、千載無限の恨事と謂ふべき也。(森槐南手記)

## 伊藤公について

伊藤公は議論が一方に偏してゐなかつた。始終大體の事を考へて自分は國といふ船の船長を以て任じてゐた。船は所々の港に寄る事はあるが、自分は之を操縦して憲政有終の彼岸に達しやうとしたのであつた。そして始終進歩主義を以て一貫した。

伊藤公は支那の事に就ていろ／＼考へてゐた。人は唯漫然と支那を如何する恁うすると云つてゐたが公は之に就いて三段に分けて考へてゐた。即ち、北清に事が起つた時はどうする。南清に事が起つた時はどうする。中部支那に事が起つた時はどうする。と、かう三段に分けて考へて居られた。が詳しい事を聞かずに濟んだのは甚だ遺憾とする所である。

公は大體の事のみならず、又細かい事にも氣が付いた。有爲の人を見れば夫れ相當の仕事を托かせ、若かい人を見ればその長所に任じた。かやうに心を配ばられてゐたので、要するに公の自ら任ずる所は、能くこの國の航路をあやまらず飽くまで憲政有終の美を達しやう、且つ若い者を引き立つてやらう、即ち前途の事を考へてゐたのである。

維新前から今日に至るまでこの國に起つた政治上重要な問題には大抵直接に關係してゐたのでその畫策し來つたことは國の元勳としてはづかしくない。それと共に立派な經驗を積まれたのである。

公は考が公平であつた、又性格の立派な人であつた。政治上の名譽は政治家の事であるから無論あつたが、少しも陋劣な私心といふものが無かつた。

又公は書物を読んで新知識を有せられ、世界各國の事情によく通じてゐた。維新後には有形の



學問にも注意せられてメカニクなどには大に注意してゐた。

廢藩置縣の事を早くから主張したのは公である。公は山陽の政記を讀んで感心し、郡縣論を主張するの動機となつたといふ。公は經綸の策に富んでゐた、之を運用する事については疑問があつたかも知れぬが、始終コンストラクチヴな心でやつて居た、之に新智識を加へて、公が政治家として其位置を持續する上に於いて大に役に立つたと思ふ。

公は藩閥の人であつたが、一部に跼蹐する人では無かつた。廣く日本并に世界の事を考へて公平に事を處理した。人は多く住んでゐる空氣の内に跼蹐するものであるが、公の此の點の無かつたのは甚だ敬服すべき至りである。即ち公は所謂政治屋にあらずして、眞の政治家であつた。

又公は議員を買収するとかいふさふ云ふコラプションを決してやら無かつた。随分窮策はやつたが決してこのコラプションを行はなかつたのは、一にこれ憲政を立派に發達させやうといふ心があつたからである。

公は飛放れた事を云はず又周圍の頑迷論に惑はされず、一步／＼前に進んで行つた。これ公が政治家として成し得る資格を十分具へてゐた所である。即ち公が立憲政治家として我國のみならず、世界大政治家の一人として數へらるゝ事は決して溢美ではないと思ふ。(鎌田榮吉談)

## 組織的大政治家

伊藤公は明治の政治家として一番智能の勝れて居る人である。徳性とか人格とか云ふことに就いては他に非凡な政治家もあつたらうけれども、智能の點から云ふと公は政治家中の初筆に置かるべき人である。

維新創業の際に當つて、内憂外患は一時に臻ると云ふ状態であつたが、此の内憂の中に於ても政治の改革制度の創立等の事は、他の時代に比較して甚だ多い譯で、行政百般の働きが明治の初めには別して複雑な關係であつた。斯様な時代に於て其の局に當る人は、特に多方面の人を要するのであつて、如何に才能は勝れて居つても、若し一方に偏して居る人では、十分成功すること六ヶしい、智能が多方面に働く人で、如何なる問題にも同情を持つて居る人でなければならぬ伊藤公は智能の點に於ては政治家中第一の人で、而して複雑な國政に當つて何れの方面にも同情を持つことの出来る人である故、斯様な難局に遭遇して仕事を爲すには、最も好適の人物であつたと思ふ。

公は何う云ふ行政問題に對しても、即ち外交、軍備、法制、經濟、農政等凡ての問題に心を寄



せて解決を下すことが出来た、其の同情の程度には自から厚薄はあつたらうけれども、其の智能は決して或る方面に偏して居らなかつた故、凡てに對して正當なる斷案を付けることが出来た。外交の如きも、其中で著しい得意の問題であつた。

公の公生涯は始めて歐洲より歸つてから、多少藩政に容喙する様になつたが、是れは慥か文久二三年の頃と思ふが、此の時から始まつて其後は御維新の時まで不絶間接直接に藩政と勤王の爲めに力を盡して居られた。而して公の最初の洋行は公の生涯に深甚な關係を有して居る。後年になつて専ら政務の中心に立たれて始終時勢に先んじて種々の畫策をされた、政務を料理するにも未來を考へて爲されたが、其能く時勢を達觀し、其の趣く所を洞察して、未發に準備すると云ふことは、公の長所であるが、是れは文久年間の洋行によつて、早く歐洲の文物に接觸した結果、眼識を廣くし大勢を悟ることが出来たからで、政治界に出初めてから先輩を凌駕して早く立脚地を得たが、爾來公は聰明なる天賦の資性を持つて居た上に、海外の事情に通じた爲に常に先きに進んで行つた。實に公の洋行は其の一生の事業に大影響を與へたと思ふ。

公は此行に依つて早く外國語を修得した爲め、後年に至るまで外國の書籍を讀むことを怠たらず、又會話も出来たから、是等は實に公の利器となつて、多大の益をなしたと思ふ。

御維新になると、伊藤公は兵庫縣知事になつたが、當時兵庫は開港問題が大變な問題となつて居たから、兵庫縣知事の任務は外交の意味も含んで居たので、公は選拔せられて兵庫縣知事となり其の衝に當つたのである。

夫れから政府は明治四年に大使を歐米各國に派遣したが、是れは明治政府の進歩的政策を採る上に非常な効能があつた。此時に至り政府の要路の人を歐米に遣つて、歐米の實況を視察せしめ將來の施政の方針に參照する考へを以て、使節の派遣は企てられた。夫れ故其使節には殆んど政府の粹を抜いて員に充てたのである。此の使節を派遣すると云ふ起りは最初伊藤公が主張した處であると思ふことを聞いたが、果してさうであるか何うか自分は今斷言することは出来ぬ。併し伊藤公は無論有力なる主唱者の一人には相違ないと思ふ、而して此の大使副使の中で、外國の事情に通じて居るのは伊藤公一人である故、公の斡旋盡力は大變なものであつたこの事である。

此の使節派遣の時、伊藤公は岩倉、木戸、大久保諸卿等と一所に二箇年近く旅行したものであるから、此の間に於て相互の交りは深くなつた。維新前は薩長など、云つて藩士の進退、起居、動作は一藩の空氣に支配せられたものであつたが、此の旅行に於て朝夕顔を合はせ、親しく言葉を言換はすと云ふやうな譯で、相互の關係も密接となつたが、此の間伊藤公は先輩諸氏に其價値



を認められ、敬重を受くるの端を開いた。

此大使の一行は明治六年に歸朝したが、折柄征韓論は其極に達し、遂に破裂して西郷、板垣、副島、江藤、後藤等の諸參議は連袂退職したので、政府は大に手薄になつた。其處で西郷以下の大立物が去つた後、政府に残つたものは共同一致して行動すると同時に、出来るだけ人物を吸収するの要を感じたが、此時一番便りにされ、内閣に列して共に力を盡して貰ひたいと望みを囑されたのが伊藤公であつた。

其處で、伊藤公を重く用ゐて貰ひたいと云ふことを、木戸より手紙を以て岩倉に申出でた。其手紙の中に、『然る處伊藤博文儀は孝允十有餘年の知己にて、兼ねて御承知も被爲在候通り、剛凌強直の性質に御座候處、近來専ら意を沈實に用ひ、細案精思其力亦孝允同朋には稀有の者に付、此際御登用玉はり候得者、必ず御一臂の御用も相勤可申と奉存、全虚心を以て言上仕候間、此段御採用奉願候とあるが、此前に大久保よりも伊藤公を推舉して岩倉と協議して居つた。夫れは岩倉より大久保に送つた書面の中に現はれて居る、最初の書面には

『伊藤進退同時に御處分有之度由、且伊藤事は彼深慮有之三木（參議）職可然云々』

其の次の書面中にも、

『將亦伊藤儀條公より大隈に被談候處、三木（參議）ならば重疊と存候得共、右思召にてなく内閣出仕被命候御趣意に候はゞ、ごうも外に名稱なく、工部卿拜命の上何の取調御用と申稱呼にて内閣へ出仕の様可被極との事に候云々』とあるが、明治六年の内閣分裂後、新分子の有力者を入れて、此の國家困難の時に當つて 陛下の御信任、國民の輿望を繋いで行くが爲めには、伊藤公は斯く先輩によつて目指されたのである。

斯くて相談の結果伊藤公は參議兼工部卿となつたが、此迄は即ち公の準備の時代である。此の準備時代に事に觸れ問題の起る毎に、力量、人格、才能等を先輩に認められた故、茲に内閣員の一人となつたのである。六年後は内閣の舞臺に立つて活動し始めたのであつるが、伊藤公は此の時代に多く先輩の間に於ける調和的機關となり、若し先輩間に誤解等のこともあれば、其間に斡旋して兩者の意志を疏通することに勉めた。公は尙ほ時に忠告もし、或は建議等の事もなした。當時公が調和的の働きをなした著大なるものは彼の大阪會議である。其結果一時政府を去つた木戸、板垣の兩氏が再び政府に入ることとなつたが、是れより元老院は設けられ、地方官會議は開かれて、進歩的局面は開展せられたのである。木戸を呼び起して大に政府に力を付けると云ふ考案は、其時の先輩の立てたものであるけれども、實行の出来る迄にお膳立てをして進歩的政策即



ち元老院を設け、地方官會議等を実現する爲め盡力したものは伊藤公であると云はねばならぬ。

明治十一年に伊藤公は内務卿(大久保内務卿薨去其後任となれるなり)となつたが、是れより公の位地は大に高まり殆んど政府の中心となつて、三條、岩倉兩公を助けた。尙ほ參議の有力者として大隈伯も居られたが、公は共に一所になつて政府の中心となつた譯である。然るに十四年に大隈伯が辭職してからは全く獨得の地位を得た、即ち明治政府の第二期の主動者となつた。

十四年以來外交の上で、重大なる出來事は、一として伊藤公の關係しないものはない、或は自から其局に立つて料理し、或は間接に人を用ゐて遣らせ。而して公が一番政治上の働きを現はし成績を擧げたのは又十四年以後の事に屬して居る。

憲法制定の詔勅は明治十四年に出たが、是れなどは後世から見ると實に空前とも云ふべき一大事業で、外國は内亂か他國との戰の結果か、少なくとも血を流さずして憲法の行はれた國はない伊藤公か他の大臣參議と共に率先して憲法の制定を唱導して、外國にては多くの人命を失なつて始めて出来る事を、確乎たる先見の爲め、太平の間に此の大事業を成就せしめた。加之又た其の目的を以て憲政取調の爲め歐洲に渡航し任務を終へて歸朝するや、明治十八年に太政官制度を廢して内閣制度となした。是れは古來の習慣となつた太政大臣、左右大臣の制度を廢するのである

から容易の事ではなかつたが、伊藤公が其の時勢と伴はざるを見て、斷然是れを廢止し、内閣制度を定めて他日憲法實施の準備をなし、自から其難局に當つたのは、又偉と云はねばならぬ。

公は内閣總理大臣となると共に、又宮内卿を兼ねて宮中に蟠まれる京都以來の弊風を一掃し、宮中府中の別を明らかにして、將來立憲政體を行なふ基礎を造るに盡力せられたのである。

條約改正の問題は明治政府の大事業であつたが、伊藤内閣の時代に遂に是れを完成せしめた、伊藤公の政治上に活動された仕事の性質から區別すると、初めは内政で、制度の創立、改革等に從事し、後半は國際關係に力を盡された形が残つて居る。内を整へて夫れから外部に活動する、即ち條約の改正、夫れから日清、日露兩戰役、韓國問題等に關して大に心を勞した。是れは勿論一人で遣つたのではないが、多くは直接に其衝に立ち、或る場合には共に仕事もしたが、又人に聲援を與へて間接に盡力もされた。尙ほ外交の事では條約改正の前に朝鮮事變の關係より支那との問題を惹起し、全權大使となつて天津にまで往つて談判をなした事がある。是れは國際關係上では大なる仕事であつた。要するに内を整理して外に働らくと云ふことは、征韓論を非認した明治政府の方針であつたが、伊藤公の仕事の遣り口を見ると、自から此の大綱を踏んで來て居られる。



是等の事業の條約改正、天津談判、憲法制定、日清戦争、韓國經營、法典編纂等は、何れも大事件にして盡く手腕を要するものなれば其中の一を以てするも、政治家としては後世に名が残る程のもので、然るに伊藤公は是等の多くの大事業の局に當られた。實に斯の如く多くの功績を遺した政治家は、世界に類を求むるも甚だ少なからうと思ふ。

以上述べた處は、伊藤公の仕事の概要であるが、今公の政治上の生涯を大觀して見ると、積極的政治家である。即ちコンストラクチヴ、ステイツマンとは、伊藤公の事を云ふのであらうと思ふ。

創業の際公は殆んど有ゆる方面に亘る制度を定めることに盡力した。其大なるものは憲法であるが、後世になつて政治家として伊藤公の名が残るのは、憲法の立案者として其の制度に最も盡力して、自から憲法の制定者憲法の起草者となつて、我國情に適ふ所の憲法を編み出だした事であらう。續いて又憲法の運用に就いて、或は貴族院議長となり、政黨の首領となり、或は衆議院の多數を占むる政治家に内閣を譲り渡すなど、其力を致したことは決して尠少でない。而して過去二十年の星霜の間、憲政をして日本に非常なる新利益を與へ、是れを成功せしめたのは、是れ又他に譲らざるの功績で首尾一貫したるものといふべしである。是等の點に於て公の名は後世に

残るだらうと思ふ。

外交上の功績も無論明治の四十年の歴史上に於て、伊藤公の上に出づるものはない、公は外交上にも初筆に上る人であらう。而して是れは憲法の制定に次ぐの功績と云はねばならぬ。

伊藤公は斯く多くの大事業をする人である故、無論其の方法手段に就いては大に苦心して、能く人を適所に使ふことに勉めた。人を見るの明は殆んど先天的で、其人の長所を見て時の事情によつて是れを各方面に任用して活動させた。斯く人の長所を見なければ、決して人の短所を見なかつた。

随分伊藤公の政策には反對する人も多かつた。或は甚だしきは利害關係の上から、伊藤公を惡し様に批評するものもあつた。時によつては政敵も多かつた、併し今日公の不幸を聽いて、僅か數日ならざるに、天下舉つて公の死を惜み其徳を稱揚して非難を加ふるものなきに見ても、伊藤公か公の爲めに始終進退し、私の無かつた事は想像せらるゝと思ふ。

伊藤公は天真爛漫で、大に詐りを嫌ふ人である。様子を造り、態度を装はひ、表面を飾つて裏面の細工をなし、或は議員を買収するとか、有ゆる手段方法を講じて、側面から議員を籠絡するやうな小政策を弄しなかつた。其處に至ると單純な、簡單な方法で、遠大な政策を極めて率直に



行なふて居られたやうである。

要するに伊藤公は政治的・智能の宏大なこと、人格の高尙なこと、政治上の仕事の多かつたこと等の點から云へば、十九世紀、二十世紀、に於ける巨大の大政治家の一人であることを失はぬと思ふ。(伯爵牧野伸顯談)

## 正義公平なる大政治家

私は韓國に赴任前はたゞ時々訪問することがあつた位で伊藤公の爲人を直接に知るの機會を得なかつた。韓國に赴任後も公の政治的の方面はよく知つて居るがこれは目下の場合尙ほ言ふを憚かるものが多いから一寸述ぶる譯には行かぬ。而して公の私的生活なるものは無論よく知らぬ。故に今は單に私の見た政治家としての伊藤公に就て一言するに止めやう。

公は一言にして云へば寛大にして公正なる政治家であつた。之を反言すれば決して無理非道を行はぬ。冷酷の處置をとることの出来ない政治家であつた。世人はやゝもすれば公を非難して軟弱だとか何とか言つたやうだが、此人達が公を非難するに軟弱を以てすると云ふことは即ち寛大

公正の政策を非難することになる。従つて非難者自身は無理無法の高壓手段を希望するのであらうが、かゝる政策は以て一時の快をとることがあつても決して永遠に亘つて功を收むべき政策ではない。凡そ世に正義公平ほど強硬で基礎の動かぬものはない筈である。従て正義公平の政策は永遠に亘る成功を得る最良の手段であると思ふ。公の政策はこれであつた。

公は斯く正義公平と云ふことを離れなかつた人であるから、俗に所謂親分子分の關係で以て私黨を造るやうなことはせなかつたし、又實際私黨を造る如きことは公の性格上出来なかつたのである。従つて私黨を好む人々より見れば公に嫌らぬ節が多かつたらう。又公自身の爲から云つても或場合に於ては私黨を造つて置いた方が大に利益があつたらう。併し之を國家の大局の上から見たらどうであるか、公が私黨を造つて子分を養ふことは害こそ多かれ益は少しも無いのである。公は自己の都合のために國家に損害を及ぼすが如きことは其性格上到底爲し得ないのである。公が他の政治家に秀で或は文明的であると云ひ、或は世界的であると云ふのも畢竟正義公平を主義として大局高處に着眼したからであると思ふ。

公は又極めて實際的の政治家であつた、嘗て或史家が伊太利建國の三傑中カヴールとマツヂニ―とを比較論評して、マツヂニ―は完全なる理想と實際に出来得べき最良手段との區別がつか



かつた人であるが、反之カヴールは常に理想と實際との相違を知つて、實行の出来る最良の方法より外空想に流るゝ如き政策は執らなかつた人であると云つたが、我伊藤公が丁度此カヴールに當つて居る、公は又實際外國の人物ではカヴール、日本の人物では小早川隆景に私淑して居つた。

ルズーヴェルトが『アウトルック』で政治家論を試みた中に、凡そ政治家たるものは高尚なる理想を有せざるべからざるは勿論であるが、之を現實にする思慮、分別無ければ何にもならない高尚なる理想を現實にする政治家即ち最良の政治家であると云ふ意味の記事があつたが、公は常に此心を以て心としたものであつた。従つて如何に立派な理想でも之を現實にすることの出来ないものは公は之を措いて顧みなかつたのである。

公は常に小早川隆景を推奨して居たが、就中隆景に關する次の一節は公の最も好んで人に話した處である。曰く、豊公の文祿の役、明軍大擧して韓國に入り我軍の本營に迫るの報あるや、我諸將大に恐れて軍議を凝らす、而かも外聞を恐れて石にかぢりついても此地を去らずと主張するものが多かつた。併し斯く主張はして見ても内實は大に恐れて居た且到底勝味はないのであるから徒らに軍議に日を経るのみで一向決せない。此時隆景は病氣と稱して軍議の席に出なかつたのである。

當時朝鮮に出張して居た三奉行の二奉行が其幕營に來つて隆景の意見を求めた。隆景曰く、拙者はたゞ諸公の意のある處に従ふべきのみ、別に意見あることなしと。斯くして奉行等は空しく歸つて復諸將を集めて軍議を凝らしたが一向に決せない。蓋し隆景は此時我軍の兵糧十日分を剩すに過ぎざるを知るが故に、この兵糧の盡きんとするに際して説かば以て諸將を服せしむべし、今は諸將外聞の如何にのみ氣を取られて居るから之を説いても到底駄目であると、暫く時期を待つたのである。

さうかうする中に明軍は追々押寄せて來る。兵糧は漸次乏しくなる。此時に於て隆景は始めて軍議の席に出た、而して徐ろに自己の意見を開陳して曰く、諸公は石に噛りついても此地を去らずと云はるゝさうだが、隆景に於ては之と全く反對である、そも今回の明の大軍に抗せんこと之れ數の上より斷じて思ひも寄らざる處なり、さらば此地に止まるに於ては我等は悉く戦死するの外なし、而かも此戦死たるや何等の効果を齎らす能はざる無益の犬死である。且兵糧なくして石に噛りついても退かぬと云ふことは諸公は或は之を爲し得んも不肖隆景は能はず、縦令隆景は之を堪ゆるとするも士卒は能はず、士卒と雖も或は二三日は之を忍ぶことを得とするも斯かる羸弱の兵を以てしては明の精兵に會ふて戦ふ能はず、故に此際に處する良策は速かに兵を撤退する



の外ならずと。諸將内々は皆撤兵を望んで居たことであるから、中にはこの隆景の言未だ終らざる内に早くも使者を自己の陣中に遣はして撤退の用意をせしめたものもあつた。

隆景は諸將の此狼狽の様を見て慨然として言ふには、諸公は隆景の撤兵の言を聞いて周章し、早くも秩序を紊して撤退せんとす、斯くの如くんば明軍の乗する處となつて總敗軍に終らんのみ我軍縦令撤退すとも最後の一戦以て士氣を振作せざるべからず、此戦に勝たば日本の總勝ち、此戦に敗れなば日本の總負け、勝敗の決此一戦にあり、希くは不肖隆景自ら此大任に當らんと、遂に明軍を碧蹄に破つて我軍を全うした。伊藤公が特に隆景の此話を好んでせられたと云ふ一事、以て公の抱負を見るべきである。公を軟弱として非難するもの、中にも當時強硬の議を唱へた我征韓諸將の亞流がありはしないか。兎も角も公が如何に實際的であり正義公道の主義を奉ずる人であつたかと云ふ事が此一話で以て見てもよく推測さるゝのである。公は決して外見のために瘦我慢の説を吐く人ではなかつた。而して最も強い大きな根柢に自個の主張を置く大政治家であつた。(統監府總務長官鶴原定吉談)

## 公を崇拜する理由

伊藤公は今までずつと官吏生活を續けて來た人、私は又官吏であつた時代は極く短かく、且其間とても伊藤公の配下ではなかつたのであるから、伊藤公との個人的關係は極めて薄い。併し先年エール大學からエル、エル、デイの學位を伊藤公と同時に貰つたので、夫れ以後公は常に私を呼ぶに同窓を以てした。別に同じ學校で學問したのでも何でもないが、たゞエル、エル、デイの學位を同時に貰つたと云ふだけで公は同窓々と親しげに言つて居られたのである。一體エール大學の有るニューヘヴンといふ處は小さな田舎の市街であるから、此學位授與式に列した時なども、四方から集まつた來賓の人々を宿泊せしむるだけの旅館がない。そこで我々どもは各教授の家に配分されて宿泊したものである。この時に私と公とは先年日本にも見えたラッド博士の家に泊まる事となつた。尤も私は講演を委嘱せられた爲に二週間許りも滞在したが、公が宿泊したのはたゞ一夜であつた。併しこれから大に心易くなつて、且公も時々エール大學同窓會に出席さるゝこともあるので、折々出會ふ機會もあつた。

公は維新の元勳、我國の大政治家であるのみならず、又實に世界の偉人である、斯の偉人に對して一介の書生に過ぎない我輩が人物評を試むるなど嗚呼がましい沙汰であるから、今はたゞ我輩が如何なる點に於て、特に公に推服するか、言はゞ公を崇拜する理由とでも云ふべきものを言



ふに止めやう。

先づ第一に公は極めて圓滿で所謂八面玲瓏の人であつた。而して其眼光が世界的であつた。公は一事を爲すに當つて必ず日本の側のみを見る如きことはなかつた。世界の形勢をよく視て然る後に動いたものである。明治維新以來我國に傑出せる政治家も二三子に止まらないが此點に於ては誰れも公に及ぶものはない。公が憲法制定の大業を成したのも一に此の世界の形勢に明かるく、能く先きが見えたからである。而も公は斯く憲法を制定したのみに満足せずして、遂に自ら政黨を組織した。この時には山縣公を始め公の友人間の反對は頗る猛烈であつたが、遂に之を説き伏せて、承はる處によれば、陛下の御裁可をさへ經て、政黨を組織した。此種の行動は世界的の大見識がなくつては出来る譯のものではない。其後公は樞密院に入り、統監となり、又最近樞密院に入るまで愈々常に憲法擁護の精神を棄てなかつた。思ふに公の眞の目的は我憲法を遺憾なく運用して、憲政有終の美を濟すにあつたであらう。従つて公にして尙ほ生存せらるれば、假令直接政局に當られなくとも、尙ほ憲政に資する處が多かつたらうに、今や兇徒の銃丸に斃る、我憲政の爲に遺憾至極と言ふの外はない。

公は又機を見るに敏であつた。明治三十年自由、進歩の兩黨が合して憲政黨の組織成るや、公は直ちに内閣を大隈、板垣兩伯の前に投げ出した。公は常に非常な勢力の障礙に出會はず時は之を避けて其勢力の通り過ぎるのを待つて居つた決して暴虎憑河の勇を試むる如き態度に出でなかつた。勢ひ抗すべからずと見た時には、極めて見切りよく身を退けた、これが亦公の偉らい點である。

公には又我と云ふものがなかつた。普通誰でも兎角我に執着するものであるが公には寸毫も斯る形跡を認むることが出来ぬ。君國のためには我一身の如きは何時でも犠牲に供すると云ふ覺悟であつた。現に公自身七十歳に近い老軀を提げてあの穢ない京城へ行て、下僚こそあれ語るに友なく、食物の如きも亦碌なものない中で幾多の苦痛幾多の不便を忍んで精勵政務を見たと言ふことは、以て如何に公が君國の爲に自己を犠牲にするの念慮が深かつたかゞ分かる。蓋し公謂へらく、韓國の統監職たる、任極めて重大なり。若し一步を誤れば、内、國政の紊亂を來し、外、列國の反抗を招かんと、深く宇内の形勢を察して、この重任に膺る者は乃公の外はないと信じ、自ら進んで難局に當つたのである。

伊藤公の對韓政策は我々の如き若輩の眼から見れば隨分手ぬるいやうにも見えたが、併し公自身と雖も其眞意を推究すれば恐らく我々と同様の感があつたらうと思ふ、たゞ公は單に日韓の關



係のみを見ずして外國との關係をも見た、米、英、露、獨、佛等の意向をも探り、萬過ちなきを期して施設したのであるから、公自身と雖も意に満たなかつた事も多かつたらうと思ふ。而して公は朝鮮を治めるには朝鮮人を信服せしむるを以て最善の方策と信じて居たから、終始一貫此方針を以てやつて行つた。故に力めて朝鮮の爲を圖つた。朝鮮の福利を増進せしむると云ふことに全力を傾倒したと云つてもよい。これが公の眞意であつて、決して詐りてなかつたから、近頃に至つて心ある朝鮮人は皆公に信頼して來た。朝鮮人が果して日本の政策に信頼して居るかどうかと云ふことは今尙ほ問題であるが、少くも公の政策には疑もなく夫の没分曉の排日一派を除くの外は皆信頼したと云つて宜からう。斯く公は居常君國の爲に己を虚しうして盡すと云ふ性格の人であつた。この性格、乃ち公の成功した所以の眞原因であらうと思ふ。(法學博士鳩山和夫談)

## 文明的忠臣の模範

予が伊藤公と始めて相識れるは、二十年前同公が芝伊皿子に居られた時分で、其の後小田原の滄浪閣(滄浪閣は元と小田原にあり)時代にも交際して居たのみならず、毛利家の關係から色々私

的交際もして居たので、拙宅にも度々駕を枉げられた。斯様な次第故同公に關しては予は多少知つて居ると言つてよいが、何に致せ藤公の如き世界的大人物に對して彼れ是れ評價を下すのは頗る僭越で、所謂盲人の巨象を探ぐるの類ならんと思ふのである。隨て予の如きは藤公觀など述ぶ可き柄でないのである。然し唯一言したきは藤公は文明的の大忠臣であると云ふ事である。勿論五千萬の同胞一人として忠臣ならざるものがないが、然し由來忠臣なる者の多くは、頑固守舊の傾があつて、忠其のものには別に變りはなけれど事實に現はれ來る結果に付きては、餘り感心のならぬのがある様に思はれる。之れは丁度子を愛せぬ親はないが、其の愛し方によりては却て子に害ふに至る如き、反對の結果を生ずると同様で、愛情には二つなくとも、因て現るゝ事實には大なる逕庭を生ずるのである。然るに藤公の忠に於ては少しも其の偏頗の意味を認めない、常に新らしい頭腦と平和的思想とを以て其の本領とせられ、一意専心社稷の爲めに盡瘁せられたのである。その一例としては藤公は維新草創の際幾度となく歐米を巡遊して先進諸國の制度文物を調べ、歸來早々或は憲法の創定に、或は造幣局創立に、仍て文明的事業に貢献せる事は實に枚擧に違がない位である。而して又た他の方面に於ては、當初所謂超然主義を抱持せられて居たが、後ちには早くも時勢の向ふ處を觀取して、民意を基礎とする主義の最も健全にして且つ正當なるを



悟るや翻然蹶起して政友會なる一大政黨を樹立し、之れによりて國家を指導啓發したのである。尤も其の間には政策や主義に對して多少の非難攻撃を受けぬでもなかつたが、其の終始一貫して國運の發展と憲政擁護の爲めに努力せられた事は、眞に偉大なるもので、是れ等は皆文明的忠臣の範例であると思ふ。處で藤公の薨去が、今後の對滿韓政策や他の政治部面に如何なる影響を及ぼすかは今俄かに豫言する事は出来ぬ、假し出来るとしても今は其の時期でないと思ふ。

想へば去る十月九日靈南坂の官邸に藤公を訪ね、三十分間會談して別れたが、今にして思へばアレハ藤公と最後の談話であつたのである。寸前暗黒人事の測るべからざる今更乍ら情なき極みである。噫。(子爵秋元興朝談)

## 維新前後の伊藤公

伊藤さんが滿洲で刺客の手に仆れやうとは實に意外でした。丸で夢のやうな話で眞に驚きました。今更公が維新前後に奔走せられた面影が眼に浮ぶやうです。

もう四十年位前の昔のことですから朦朧ではありますが、當時の有様が色々と思ひ浮ばれます。

何でも慶應三年十二月の末の頃だつたと思ひますが、當時私は薩州から江戸に歸り幕府の開成所教員をして居たが、元來開國主義者である所から兵庫奉行の屬僚となり、神戸開港の事務に執掌して居ました。或日回港碇泊の英國艦隊旗艦アスコルドの士官と一緒に一人の日本人が上陸しました。此の日本人の服装と云つたら實に珍妙で、上衣はフロックコートですがズボン是一種變つた紺の股引様のもので、鐵鞘の長いサーベルを廣い腰帶で上衣から腰に吊つて海員帽を被つて居るので、それから滑稽の次第です、フロックコートにサーベル、實に其の對照が妙チキリンで、云はば文官と武官との間の子とでも謂ふべきポンチ的怪容でした。時々思ひ出して吹き出して居たのですが、其人こそ、伊藤公の前身です。

其時私は税關の前に立つて居ますと、上陸した英國士官の一人が私にウアイルド、ボールを得られやうかと問ふたのを私はウアイルド、ボールと聞いて何鳥であるかと問ふたら、伊藤さんが何に野鳥ではない、猪のことだと言はれたので、其れに相違なきやと士官に問返すなどで大笑をしたことを今も覚えて居る。其人が伊藤俊輔と云ふ人であると知り、又私の前島來輔(舊名)を知られたのは其時です。それから税關前をブラ／＼しながら開港のことや兵庫奉行の事を問ひなぞして居る中に、國許の話が出て、私が伊藤さんに「何處の藩士です」と聞くと唯一言「鹿兒島



だよ」とすまして居る。私はこの頃鹿兒島から歸つたのだから、薩摩言葉は十分に分る。しかも、若年から言文一致説で言語に注意して居たからどうも言葉遣が長州人である様だ。そこで私が伊藤さんの顔をジーツと見詰めて「長州藩だらう」と謂ふと、伊藤さんが非常に驚いた風で「イヤ薩州藩だ」と何處までも頑張つた。しかし何うも言葉の上に立派な反證が擧つて居るから仕方がない。到頭我を折つて「君の云ふ通り長州藩だ、しかし、長州藩だと知れては拙いから鹿兒島として置いて呉れ」と頼まれた。其時の様子が目に浮ぶやうです。當時長州藩は幕府と容易ならざる間柄であつて、現に討幕の兵を種々の方略手段で陰に京都に入れる最中であり。そうして私が幕府の官吏だから極力藩籍を隠さうとせられたので、私も伊藤さんの境遇に實に同情しましたから秘密を保ちました。伊藤さんが當時死生の間を奔走して居られた有様が了解されます。

それから、兩三日を隔て、伊藤さんは税關に来て私を外に呼出し「自分は急に他に行かねばならぬ。就ては殊に依頼することがある。それは自分が伴れて来て居る一青年の世話、又事に依りては保護を合せて頼みたき一事である。」との話、當時、京阪に在る私の友人から秘信によれば長藩は討幕に銳意であるから平和は到底望まれない、戦争の機運は已に天地に満ちて近々爆發するは火を睹るよりも明であると。で、此の機に際して長州士人の世話とか、保護などは如何と思つ

たが又考る所が有たから之を快諾した。翌朝約の如く寓居へ長谷川某とて一青年が英書を携へて来て教を請ひに参りましたが、私は萩か山口かと云ふ位の意で「貴方は何處の人か」と問ふた。すると「鹿兒島だ」と答へたから、それは悪い、長州と明言したら宜からうと云ふと、此一青年は伊藤さんから能く話を聞かなかつたものと見え、大に困却と恐怖の容子で有て、其時限り來なかつた。後に聞けば其青年は大阪造幣局長の長谷川であるとの事だ。伊藤さんは斯様な時でも親切に周到に配慮せらるゝ友愛の情に富める人で有りました。

伊藤さんと二度目に逢ふたのは明治元年三月だつたと思ふ。此頃私は關東及び東北諸藩の御處分に就き献議書を朝廷に奉らんと願つたけれども、我々には道路硬塞して其手段がない。處が幸にも英國公使が國書捧呈の爲め參朝するので、公使に頼んで通辯官の名で隨行することが出來た。當時は陛下は大阪に御臨幸で西本願寺別院が行在所であつた。公使參朝の日私は公使に扈從して行在所に行つて見ると、伊藤さんは彼のフロクコートにサーベルではなく、烏帽子直垂と云ふ嚴めしい装束で公使を玄關に迎へられた。そうして公使の歸りを門まで送られたが私を見てどうして茲へ來たのかと問はれたから、私は通辯役の積りで來たのですと答へると「能く君は通辯が出來るね、仲々六ヶ敷いだらう」などと笑ひ話があつたのが、今も耳に残つて居ます。



それから、明治二年の末、民部省に出仕し、民部大藏兩省の間に設けられた取調局に澁澤、鹽田其他の人々と共に日々出頭して居ましたが、同局は大隈さんと伊藤さんとの樞密局で、軍事の外は總て此處で改良案を草すべしと云ふ勢で常に親しく其警咳に接しました。今にして追懷すれば實に感慨に堪へません。

明治十三年伊藤さんが内務卿の時私は内務大輔に仕せられて教を受けたが間もなく驛遞總監と云ふ新官に任せられ、翌十四年には退官したので、爾來は甚だ疏遠に過ぎて居ました。今日にして、此偉人の凶報を聞くなどは實に痛哭の至りであります。(男爵前島密談)

## 伊藤公の學問才力

伊藤公は元老中物の一番よく解つた人であつた。何年か今はよく覺えて居らぬが、私がまだ大學總長をしてゐた時の事であつた。その時分大學の卒業生を西洋各國に留學させる話があつた。それは行々は大學の教授を日本人にやらせるといふので、各學科の割振りをした。所が哲學の留學生を送る事について困難の事が出來た。他の學科は大學から文部省に云つてやつて直に定まつ

て了つたのだが、哲學ばかりはごうも早く定まらぬ。といふのは時の文部卿が哲學といふ概念について一つも解らぬ、何か哲學と云ものは理窟をこねる、天下の厄介物位に見てゐた。だん／＼人に聞いて見たところが矢張さうらしいので心配したと見え中々留學生を許可しない。で私は文部卿に會つて哲學の説明をした。哲學といふものは支那の儒學或は老莊學に似たものであるが形は一寸之に似てゐるが、その論ずる所は丸で異つたものであると説明した。けれども文部卿は許さ無かつた。で私は今度伊藤公の許に出掛けて行つた。伊藤公はその時何でも、内部卿工部卿參議院議長この三つの中何れかの役をしてゐた時であつたと思ふ。大臣中の物識りて西洋の學問もやつてゐた所から伊藤公なら話が解かるだらうと思つて伊藤公の所に行つた。伊藤公から文部卿にさとして貰ふより仕方がないと思つた。そこで今度大學の卒業生を外國に送る事になつた所が哲學の留學生のみは文部卿が躊躇して許さない、少しも話が解からぬ、貴下からさとして呉れと云つた。すると伊藤公は話が實によくわかる。哲學の事もよくわかる、では自分からよく話さうといふ事になつて分れた。その後伊藤公から話があつたと見えて間もなく哲學の留學生が定まつた。井上哲次郎君が行く事になつた。是れ日本において留學生を初めて海外に送つた始まりである。この話は私と伊藤公とより外に知つたものは無からうと思ふ。



伊藤公は憲法の學問によく通じてゐた。憲法の調べは自分は獨逸書は讀めなくても人に調べさせてよく知つてゐた。文才も十分あつた、又國の爲めに盡くす精神が充ち満ちしてゐた。この志のある上に才もあり學問もあつたからあれ丈けの仕事が出来たのであると思ふ。唯一つ女を好む品行の點はどうかと思ふ。

今度の韓國の刺客は耶蘇教信者だといふがそのやつた事は間違つた愛國心から起きた事だらうが、唯憎むべきは韓國におけるアメリカ宣教師連である。彼等は韓國人の排日論のある所に乘じて耶蘇教を擴めやうとして彼等を煽動する。是等は譯のわからぬ韓國人よりも大に憎む可きものだと思ふ。又刺客がピストルにダムダム弾を用ゐたといふ、耶蘇教信者として益々怪しからぬ事である。(男爵加藤弘之談)

## 伊藤公と他の元老

伊藤山縣兩公と井上侯は長州の三元老であるが、其關係に就いては伊藤公井上侯の兩人が最も親密であつた。尤も關係の最初は山縣公の方が早かつた。伊藤公は早くから吉田松陰の門に入つ

て同門下の有志者久阪玄瑞杉山松介其他の人々と交際して居つたが、伊山兩公の關係を開いたのは、安政五年の秋伊藤公が山縣公と與に、長州政府の選拔で京都に上つた時であつた。此時の天下の形勢は如何かといふに嘉永六年米國の水師提督彼理が來て、其から翌安政元年に再び來て遂に假條約を結んで歸つた。其後總領事トウンセント、ハリスが來て國書を捧呈し、將軍に謁見して正式の通商條約を結ぶ事を切りに薄つた。そこで幕府でもかうなつては致方なく應じなければならぬ事となつた。そこで老中の首座たる阿部伊勢守が外國の事情に通じてゐる堀田備中守を擧げて、外國交渉の任に當らしめ、そうして阿部伊勢守自らは内政調理の任に當つた。といふのはその時分主戰論が非常に盛んであつて水戸の老侯齊昭はその張本人であつて、天下の勤王家が皆之に和したので傍ら之等を調和するの必要があつたのである。其れで堀田を外交に當らしめ自ら内政に當つて内部の調和を謀り内外共に圓滿に處置しやうと掛つた。此の時分迄は徳川政府の外交政略を攻撃する聲が左程高くなかつたのは阿部の政策の方であつたかと思はれる。所が惜しいかな阿部伊勢守は安政四年の半ば頃に卒去して了つた。

堀田備中守はハリスの要求を容れて將軍に謁見させ、蕃所調所においてハリスと交渉して通商條約を草定した、然るに尊王攘夷の論は日に月に益々盛になつたから、朝廷の勅許を以て條約に



調印するの必要を感じた。幕府では其の勅許を受けるために最初林大學頭津田半三郎の二人を京都に上した。けれども勅許を得る事がむづかしい、むづかしい譯けは當時徳川幕府の外交政略に不満を抱いて居る尊攘論者が多く京都に居つて、條約調印は國家の大事である、それに林、津田の如きものを寄越すとは朝廷を尊崇するの意を缺いてゐると云ふて、邪魔をしたからである。その爲め二人は遂に要領を得ずして江戸に歸つて了つた。そこで、堀田はそれでは私が京都に上つて海外の事情や其他いろ／＼の事情を申上げて條約調印の勅許を受けて來るといふので安政五年の春京都に上つて來た。之を聞いた天下の尊攘論者は是れ國家の大事なりと非常な議論が起つたので、長州でも傍觀して居られない京都の形勢はどうなるか、朝廷のために盡さざる可からずとあつて、政府でも憂ひ草莽有志者の内でも吉田松陰の如きは最も憂慮して取敢へず門下生の久坂玄瑞を上京せしめた。そこで政府でも天下の形勢を視察するために中村道太郎（後に中村九郎）と云ふ者を京都にやる事にした。そして少年有爲の士を選抜して上す事にした。それは杉山松介、伊藤傳之助、岡仙吉、總樂悅之助、伊藤利輔（伊藤公）、山縣小輔（山縣公）の六人である、これが伊藤公と山縣公との關係を付けた抑もの初めである。

京都に上つてこの六人は何をしたかといふに第一梁川星巖梅田源次郎頼三樹三郎等と會見して

其の議論も聞き且つ上國の形勢を視察して復命に及んだのである、この國に歸る前に伊藤公は山縣公に向つて君は未だ松陰先生の門に入つてゐないから入門しては如何かと勧誘した。そこで山縣公は萩に歸つて松陰の門下生となつた。

伊藤公は其後江戸に出て桂小五郎（木戸孝允公）について有志者と交つて居つたけれども、その時の壯士の運動については山縣公と共にした事は無いが、井上侯とはその時から關係を開いた井上侯は藩主毛利敬親公の小姓で、江戸に住つて、早くから蘭學に志してゐた人であつた。けれどもその頃は尊攘論の盛んな時だからいろ／＼の政治運動をされた。萬延年間か文久元年頃であつたと思ふが、侯は江戸に出て、劍客齋藤彌九郎の門に通つて居たが、伊藤公は其時齋藤塾の學僕をしてゐたので井上侯と關係を開いたのである。

文久二年の正月に安藤對馬守を要撃する時にも、伊藤公は桂小五郎の隨員として關係が有つた此の要撃當日の事であつた水戸の内田萬之助なる者が桂を尋ねて來て長州の藩邸で切腹して死んだ。此人は要撃加擔者の一人でその爲めに桂小五郎も伊藤公も町奉行に呼ばれる事になつた。併し、此の厄難を免れしめたのは長井雅樂の功に歸せねばならぬ。この時に井上侯は二人の身の上を氣遣つて内々長井の意見を聞いた所が、萬事乃公の胸中にあるから大丈夫だと答へた相である



が果して長井は甘く老中等を説き付けて二人を無事放免することにした。これが伊藤公と井上侯と互に相助け合ふ初めであつた。

文久二年の末、長州の壯士等が幕府に反抗運動をした時には伊藤井上は同一の行動を取つた。即ち御殿山の外國行使館を焼いたり、幕府の穩密を殺したり、其他國體を害する様な奴を除いたりしたのであるが、これより二人の間は益々親密になつた。

文久三年に長州が愈々攘夷を決行することに付て彼の形勢を知らざる可からずと云ふので、少壯有爲の者を外國にやる事になつた。初め井上侯と山尾子爵と井上子爵（勝）の三人が行く事になつて居たが、後に伊藤公と遠藤謹介の二人が加はる事になり、遂に此の五人が洋行する事になつた。横濱から英一番館のガワルの世話で上海に行き、そこからチャヂンマツチソン會社の世話で二艘の船に搭乘した。一艘に他の三人が乗り、他の一艘（ペケジス號といふ）には、伊藤と井上とが乗つた。然るに言葉の通せぬ所から言語に絶した苦辛を嘗め互に援け合つてとう／＼英國倫敦に渡つた。是れが伊藤井上兩元老の死生を共にした關係が生じた初めである。英國に渡航して英國人の教育を受け、新聞位はどうかかうか讀める位になつた。所が長州では攘夷を決行して無謀にも條約國の船を砲撃したといふので問罪の師を差向けると云ふ事が英國の新聞紙に出た。

二人は其新聞を讀んでこれは故國の大變である、共に一死を賭して攘夷の方針を變せしめ様として三人を後に留めて、日本に向つて歸つた。長州に歸つて見ると中々自分等の議論を實行する事は出来ぬ。其の結果英佛米蘭の四國の聯合艦隊が馬關海峽を攻撃して長州はすつかり敗けて了つた。そこで二人の意見が採用されて和議をすることになつた其講和使節は高杉晋作が頭に立つて今の杉子爵などが副使であつたが、伊藤井上が通辯の任に當つて大に骨を折つた。當時は外國の事情に通じた人がなかつたから和議の成功したのは二人の力と謂はなければならぬ。第一回談判の後伊藤井上高杉等の處置は君命を矯めたものである、彼奴等を斬殺せよといふ騒が初まつて高杉と伊藤は民家に潜伏して了つた。之を死を決して再び出したのが井上侯である。そして又談判を繼續せしめて止戰條約を締結したのである。

この時、山縣公の論は少し異つて居つたかと思はれる、山縣公は騎兵隊の長官で馬關戰爭の指揮者であつたから和議は反對の方であつた。併し格別騒動も起ら無かつたのは山縣公と伊藤公と早くから關係があつたため意思の疏通がついて山縣公は却て騎兵隊などの鎮撫に力を致されたからである。是より先、京都禁門の變があつて幕府から長州を征伐する事になつた。是に於て長州は内外に敵を受ける有様となつて其上、藩論が二つに分れ一方に恭順を主とするものと、他方に



戦を主とする者と二黨派相争ふことになつた。即ち所謂俗論黨と正義黨との争である。然るに俗論黨が長州政府の政權を握つたので、正義黨は甚しい逆境に陥つた。そこで高杉晋作が正義黨の一部分を率ゐて、先づ義兵を擧げると云ふので、正義黨の屯集所たりし長府を脱走して、馬關伊崎の官廳を襲ふて姦吏を放逐して了ふた。此時山縣公は例の用意周到の順序家であるから、未だ人事の盡さざる所があるから、兵を擧げるには時機尙早しとして、高杉の擧に不同意であつたが伊藤公は高杉の論に賛成して、共に馬關に赴いた一人である。山縣公は自信の方針を貫く爲め、高杉が去つた後、正義團體の一部分を率ゐて、伊佐と云ふ所に進み、遂に敵の先鋒を襲撃し、尋で大田と云ふ所で數度の苦戦を経て、俗論黨の軍勢を撃退けた。そこへ高杉が來て、又々敵を撃拂ひ、遂に國論を回復したのである。國論回復後山縣公は重に内に居て、軍隊の事に骨を折り、伊藤公は外にあつて、外交の事に骨を折ると云ふ風で、其行動が異なつて居たから隨て議論も時に不一致の事もあつた。けれど大體に於ては協同戮力して、國家の爲め盡瘁されたのである。例の長薩二藩聯合の時も、山縣公は内に在つて桂小五郎高杉晋作等の謀議に參し、伊藤公井上侯は長崎に往つて、薩藩人との交渉に當り、且つ其名義を藉りて、外國から軍艦武器を購入する等の事に任して居た。是等の事を悉しく話せば、一回や二回で話し盡されるものでないから略して置

くが、畢竟王政維新の大事業を遂げ、日本の今日の盛運を來たしたのは、長州の三尊と稱せらるる伊藤山縣井上の三元老が大體に於て同一歩調を取つたが爲めであらうと私は考へる、私は今回不意の出來事からして、此の三尊の内の一尊を缺いたのは、私情に於て悲歎に咽んで居るは申すまでもない。國家の爲め痛惜に堪へぬのである。是は無論天下萬衆も同感であらうと思ふ。(中原邦平談)

## 人言を容るゝ君子

私が伊藤公と近づきになつた初めは明治十六年で、それから十七、十八、十九と其閣員であつたが、その内一ヶ年許りは西洋へ行つて居つたので、さう長い間の政治上の關係もなかつた。西洋から歸つて來ては世間でよく知つて居る通り私と公とは意見が衝突して其結果遂に私は退いて野に下つた。當時の伊藤公は私共から見れば急進派の人、私は又世間でも認めて居るやうに保守的の人間であるから、公と私の政治上の意見は常に合はなかつた。併し私が野に下つて後は別に名譽も權勢も求めない。伊藤公もよくそれを知つて會へば必ず意見を交換し、私共の頑固連の言



でも採るべきものはズン／＼採り用ひた、乃ち公は餘程度量の寛ろい所謂清濁并せ呑む底の人であつた。よく人言を容れる君子であつた。

私は歴史が好きだから、好んで古今東西の歴史を涉獵するが、公の如き人は史上に於ても稀に見る人格の人であつた。それは現代に於ても随分學問もあり又手腕もある人はあるが公の如く忠誠の志を抱いて、苟くも君國の爲ならば自己の一身の事は如何なる困苦でも忍ぶと云ふ底に眞に忠誠無二、國家の桂石とも云ふべき人は稀である。公は或點に於ては世間から随分批判を受けるたちの人であるが、其度量の寛ろく能く人言を容るゝことと、君國の爲に自己を犠牲にして顧みないといふ忠誠の念とは當代匹儔なしと云つて可なりである。眞個明治の大政治家とは公の謂である。私は常に公と意見を異にして居つたが、併し私が會つて共に國事を談じて見たいと、心から知己の思ひがあつたのは矢張り公であつた。公は常に對手方に同情の態度を以て其話を聴く、故に公と話す時は互に打ち明けて話が出来、公は決して人の親疎の隔てを置かなかつた。又城廓を設けなかつた。才子ぶつて人を侮蔑するやうな態度を示す如きことはなかつた。

公は又非常な勉強家で、且事務の才能に秀で、居る人であつた。重要な手紙の如きは悉く公自身筆を執つて書いたものである。決して他の或一部の政治家の如く秘書官任せにするやうなこ

とはなかつた。私の處へ來た手紙などはさう多くもないが悉く公の自筆ならざるはなしである。殊に事務を處理する才能の秀で、居つたことは、日露戦争の當時に於ける次の一例でも分かる。當時私は公を訪ふて話して居る間に諸方から公宛の手紙が盛んに來る。西洋人の手紙も随分多かつたが、之を秘書官が翻譯して公に示すと、公は一方に於て話を繼續しつゝ一方に於て之に一々差圖して、ズン／＼用務を處理して行つた。其處務の才能の非凡なることは實に驚ろくべきものがあつた。

公は我憲法制定の大功臣である。始め自由黨の如き亂暴にも主權在民的の憲法論を振り廻はして急いで憲政を施かんことを企圖したものであるが、公は遂にこの怒濤澎湃の中を漕ぎ抜けて萬遺漏なき準備の後、明治二十三年に至つて、始めて公の起草した憲法を發布し、夫の歐洲の憲法史に見るが如き慘憺たる流血の歴史を繰り返すことなくして、最も平和圓滿の裡に、我國民をして憲政の恩恵に浴せしめた。當時若し自由黨の言をして行はれしめ明治八九年乃至十四五年の間に憲法を發布したならばどうであらう、我國民は未だ憲法の何物たるを知悉するの暇なきが故に、其代議政體なるものも亦徒らに喧々囂々たる政客の論争を見るに止まり、眞の憲政の運用は到底實現することを得なかつたであらう、此點に於ても亦伊藤公は特に偉らいと云はねばならぬ。



大隈伯の如きは能く長廣舌を振ふ。殊に憲法發布以前に於て板垣伯と共に最も我憲政に關して論議したものである。然るに一度總理大臣の職に就いた時に議院に臨んだ外は伯は憲法發布以來未だ曾て我憲政運用の大機關たる國會に於て我憲政の爲に力を盡したことはない。これは立憲政治家の態度として宜しきを得たものとは言へないであらうと思ふ。憲政の本場たる英國始め歐洲諸國の政治家は決して斯の如き態度には出でぬのである。板垣伯も亦大隈伯同様の非難を蒙るを免れないが、獨り我伊藤公は帝國憲法を起草したるのみならず、又之が實施に際しても自ら先づ貴族院議長となつて憲政運用の衝に當つた。決して夫の大隈、板垣二伯の如く議院を輕視するやうな不都合はなかつた。要するに我憲政の今日あるは職として伊藤公の賜である。

日露戰爭の如きも若し伊藤公にして在らざりせば結末はどうなつたか分らぬのである。伊藤公ありしが爲め兎も角もあれだけの効果を收むるを得たのである。戰爭の如きは軍人でさへあれば出来る。且老將がなくなつても有爲の後繼者は敢て乏しくない。併し一國の國政を裁斷して大過なきを得る才能、手腕のある政治家は滅多に得られるものでない。現に先日公が滿洲に出發する前私は公に向つて、又十年の後貴公にお世話にならなければならぬ時が来るでせう、どうか御自愛を望むと云つたら公は、兎も角行つて見て置けば又有用の時もあるだらうからと云つて別れ

た事であるが、遂に今度の凶變だ、之に依て蒙る國家の損害は思ふに殆ど測り知るべからざるものがあらう。噫、公は何の點から見ても第一流の大人物であつた。眞に國家棟梁の材であつた。

(子爵谷干城談)

## 品性の高潔なる偉人

伊藤に就て稱讚すべき點は其新智識よりも又其政治的手腕よりも、其品性の高潔なるにある。我輩の如きは政治上の意見は常に反對であつた、獨り我輩が伊藤に反對したのみならず、世人も亦多くの點に於て伊藤を非難攻撃した。併し如何に伊藤を攻撃する者でも、金錢に關して渠に非難を加へたものは一人もない。これが渠の品性の高潔なりし何よりの證據である。渠は此心懸けを以て國事に執掌したから所謂執着なるものがない。従つて他の一部の政治家に見る如き陋態は渠に於ては見るを得なかつた。

渠は又この高潔の品性を以て渠の家庭を感化した。孰れの上流社會の家庭に於ても、玄關から



臺所まで通じて清福な、圓滿な、所謂春風堂に満つる底の家庭は殆ど見るを得ない、屹度其臺所や勝手の隅にはゴタ／＼が絶えないものである。若くはゴタ／＼が伏在して居るものである。然るに渠の家庭にはこれがない。我輩は渠の表裏両面共能く知つて居るが、渠の如き立派な家庭は他に類例を見ない處である。

渠の夫人は是れ亦上流社會の貴婦人連中にあつて稀に見るの賢夫人である。素より其天賦の資質の秀でたるにも依るのであらうが、職として渠の感化に依つて斯くまで圓熟したものである。之を公にしては國政を執る上に於ても毫も我執なく常に身を以て君國に報ゆるの覺悟あり、之を私にしては家庭の清福にして阿賭物に關する寸毫の非難だになかりし處、畢竟するに渠の品性の高潔なるより來る結果である。此點に於て渠の如き人格は殆ど當代無比である。

渠の死は我國の内政と外交との兩方面に深大なる影響を及ぼした。渠は内政上に於ては諸關係の連鎖であつた。諸勢力の調和であつた。然るに内政上に於けるこの連鎖、調和力は今や忽然として消え失せたのである。その及ぼす影響の甚深なるは言ふまでもない。渠は又外交上に於ては平和主義者を以て世界に公認せられて居つた。今やこの世界に公認せられたる平和主義の偉人は俄然世を棄て去つた。この缺陷は如何にして補はるゝだらうか。其影響が那邊に及ぶであらうか

兎も角も我國に取つては非常に重大な問題であるに相違ない。而して渠の死の内政及び外交に及ぼす結果に就ては今とは言ふべき時期でない。こゝ暫らくはたゞ黙して注視すべきである。

世人は渠と山縣と井上とを或は元老界の三尊と云ひ、或は長閑の三尊と稱したが、同じ三尊の彌陀でも、渠は中央の位置を占めた彌陀だ。山縣は軍事の一方面のみ、井上は經濟の一方面のみ然るにかれは全般の政治に亘つて居た。山縣井上の如く軍事や、經濟に限られた方面とは譯が違ふ。故に同じ三尊と云ふも。其中央に於ける最重最要の位置を占めた渠を失ふたのは、之を他の彌陀を失ふたに比して、其及ぼすべき影響の範圍の廣大なるべきは言ふを待たない。此點に於て渠の死は、特に重視すべきを覺ゆる。あまり喋べると、却て思ひがけぬ事を言つてのけて、故人に禮を失するやうな事があつては濟まぬから、伊藤に關する事はこれだけでもう言はぬぞ。(子爵三浦梧樓談)

## 東洋平和の爲めに惜む

伊藤公も惜しい事をしました、公に關しては新聞に詳しいことが出て居りますが、私は夫れ以



上に別段話すことを有つて居ませぬ。實に其偉大なる人物、度量の大なること、所謂終始天下國家を以て己れの任となし、毫もかはらざることは唯だ感服の外ありません。

公は實に勤王愛國の精神が深い人であつたが、此の精神は山陽の政記に依つて養はれたと云ふ事です、是れは公より直接聞いた話してはないが、故松本莊一郎が鐵道局長であつた時、私は日鐵の社長をして居りましたので、同業の關係から能く一所にもなり、又打連れて旅行もいたしたが、其時分松本の話に、『公は山陽の政記を常に身邊より離さない、夫れは自分が勤王愛國の精神は此の政記によつて養はれたと言つて居られた』との事がありました。

當時私なども政記を好んで讀んだものでしたが、實に士氣を鼓舞したものです、私が東京に始めて出て來た時分は、政記と云ふのが、記政と逆さまになつて居ましたが、私は其の頃貧乏ではれを買ふことが出來ず、知人であつた醫者の買つたのを借りて讀みました。

伊藤公とは近來多く遇ひませんが、維新前後には能く往來しました、私の公を知つたのは上海ですが、公が長州の船を買ひに來た時で、私は其時世界の形勢を視察したいと思つて脱走して長崎から外國船に乗り、上海に來て西洋人の極めて卑しい居候と云ふ様なものになつて居た。其處で始めて公と遇つて種々話しましたが、私は實に非凡の人物であると思つた、公は夫れから二隻の船を買つて歸國されたが、丁度慶應の二年であつた。私は又支那を経て印度カルカッタまで往つて歸りました。

其後明治元年に神戸で遇ひましたが、四月から十一月か十二月かまで一所に居つた。夫れは公が兵庫縣知事をして居て私は軍務官を代表して出張して居たのでした。此時官は文武と異なつて居つたが、軍艦や兵器などを購入するには、是非縣廳を煩はすの必要があつた故、公務上から度々往復したのです。其後公が宮内大臣となつた時、私は公の引立によつて明宮御教育主任となり東宮太夫となりました。

斯様な譯で以前は親しくして居たが、近來公も多忙であり、餘り遇ふの機會がなかつたのです。昨日谷と遇つて種々の話しがりましたが、公の事に關しては谷の方が能く知つて居ませう、谷は公の政友で又政敵です、谷は能く公とは反對の地位に立ちますが、あの通りの憂國熱誠の人ですから、伊藤公の所に往つて不絶政治上に關して赤心を吐露したものです、政敵ではあるが公は朝野の中心をなして居る故、其の憂國の至情をば公の所に持つて行つたのでせう、谷の意見書を集めたなら、恐らく大部の書が二冊位出來ると思ふ。是れは畢竟伊藤公の徳、谷の寛大とも云ふべきである。



公の對韓政策に就ても、種々話しが過ぎましたが、一昨年頃公が統監在任中に歸國したことがありましたが、此時會つて、公と谷と私と一所になつて、韓國問題に關する話が出た時、公は韓國より李氏の系統を取除く時は、全韓國を敵とせねばならぬ、李氏の系統を存して置けば、愛國者は、過激亂暴な事をなせば禍李氏の社稷に及ばんことを恐れて、反抗をなさぬ、されば一部を味方として韓國の改善を圖ることが出来る、又今日半屬國の状態に陥るとも、韓國民は將來の進歩發達によりて獨立することの出来る望を持つ故、過激な反對をなさぬ、夫れ故李氏の系統を存すること、大韓國の看板を掲げて置くことは必要であると云はれて居たが、儒生には甚だ困ると言つて居られた。

公の對韓政策は凡て此の見地から割出されたらうが、是れには種々の意見もあらう、けれども私が殊に遺憾に思ふのは、公の今回の滿洲視察が、果して如何なる意味が含まれて居るか、夫れは分らぬが、ともかくも使命を完全に訖へずして殫れたことである。公が哈爾濱に於て露國藏相コッコフ氏と會見するのは別段何等政治的意味はないかも知れぬが、兎に角公は日露接近論者であつた、殊に三十七八年戰役後は日露の親交を一層深くする必要があるに際し、無意味の會合と雖も、若し相互の會見に因りて兩者の意志が疏通し、日本が必らずしも戰爭を好むものでない

事が知れ、又露國藏相にして平和を欲するの意味を抱いて居るならば此の會見は日露兩國の國交に好影響を與へたであらうと思ふ、公の死が日本の大損害であることは申す迄もないが、私は東洋永遠の平和の上から見ても、實に痛惜の至りに堪へぬ。(予曾我福澤談)

## 稱讚すべし美點

私が伊藤公と近づきになつたのは明治三四年の頃で爾後明治二十三年の頃まで公の工部卿の下に書記官をして居つた。當時は別に秘書官になるものがなかつたから、書記官兼秘書官のやうな職務をとつて居た。公が大久保利通公の後を繼いで内務卿となられた後は以前の如く頻りに往來するやうな事はなかつたが、始終恩顧は蒙つて居た。

公は秘密も表面もない人であるから、世間の知つて居る以外に取り立て、云ふべき程のこともないが、私の特に感心するのは公の人に對して親疎の隔てをせぬ事である。公が工部卿時代には職務の關係上私は毎日々々公の處へ往來して居たが、公の内務卿となられて後はずつと隔たつて居て、偶々公に會ふた時でも公の態度は毫も昔と變りがない。前日の如く親密であつた。これは



私共も非常に敬服して公に倣はんことを心懸けて居る次第である。

公は又あれ位、權勢のある地位にあり乍ら利慾の念がなかつた。曾て日英同盟締結の當時、公も倫敦に在つて私と共に馬車を乗り廻した事があつたが、其時に公は何誰は大分金か出来たさうだと云ふ噂をして、我輩は何時までも貧乏だ、貧乏が我輩の本領だと云はれた。これが又實に豪らいと思ふ。清廉と云ふことは誰しも口にする處であるが、扱て之を實際に行ふことは中々難かしいものであるに公は此清廉と云ふ點に於て言行一致した人であつた。

公は又非常に讀書の趣味を持つた人であつた。暇されれば殆ど書物を手に離さなかつた。尤も英文が達者に讀めたからでもあらうが新刊の書物とか新聞とか雑誌とかを見ることを怠らなかつた。公は此讀書力に依つて常に頭腦を養つて行かれたのである。公の道樂は或は碁とか詩とかもあつたらうが、實際始から終まで箝まり込んだのは讀書であつた。これはあの位人から推し立てられ、尊敬せられる地位にある人としては實に感服に値する處であると思ふ。

公は人に對して城廓を設けなかつた。薩州人であれば薩州人に對してのみ親密に話すが、他縣人には親密に話さないとか。長州人であれば又長州人へのみは親密に話すが、他縣人には親密に話さないとか云ふ傾向のあるものであるが、公と井上侯とは是が無い。孰れの出身者に對する

も廣く日本人と云ふ點から見ても一視同仁であつた。故に公の門下生には所謂徒黨を組むと云ふが如きことはなかつた。公は役に立つ人でありさへすればズン／＼引上げたものである。或人は伊藤公は人に對して飽き易かつたと云ふが、私はさうは思はぬ、少くも私自身に對する公の態度は何時も同じであつた。

公は實に忠君愛國の思想の權化である。従つて又愛讀の書も名臣言行録とか、貞觀政要とか云ふ種類のものであつた。名臣言行録は明治七八年の交、公が熱海に在つた時に、故中井弘から送つたものであるが、其時に公は大變喜ばれて、御惠贈の書面白く手に卷を釋かずとか何とか云ふ意味の手紙を中井の處へ遣された事があつたのを今に覚えて居る。

公は一見如何にも大マカナやうであるが、物の急處を見ることは頗る明敏であつた。公の工部卿はまだ三十三歳の壯年で、非常な元氣で、議論も盛んで極めて放膽であつたが、省の經費に就ては餘程注意せられたものである。如何に經營の方針は立派でも、工事の設計はよくても、經費が之に伴はなければ何にもならぬと云ふ趣旨から餘程周到に考慮せられたものである。

最後に特に言つて置きたいのは、先きに井上侯の病氣の時も待合の女將とか藝妓とかの話をして、麗々しく新聞に掲載して居たのを見て、心外に思つた事であるが、今回の公の凶變に就ても亦或は



「公爵が十四日滿洲に出立せらるゝ前夜大磯の滄浪閣に呼ばれたる新橋藝者は廿人許り、孰れ劣らぬ寵愛を蒙りたるものなれど」など、公をモルモン宗の貫主か、土耳其のサルタンに比する如き記事を掲げ、或は藝妓を訪問して聞きたりとして「私が御前の御寵愛に預かつた初めは去年の八月頃からで御座います」とか「御前は氣が多う御座いましたわ、妾十七歳の時御寵愛を蒙りました、御前が御最後に御愛しになつたのは新玉中村のかほ代(十七)さんで多分八月大磯の高田さんの御別荘で御目に止まつたのでせう」など、いふ類の記事を掲げて居るが、是等は今日の場合勉めて避くべきものだと思ふ。斯かる記事は獨り公を侮辱するのみならず、又實に新聞紙自身の品位をも下げるのである。何も公に關する記事を掲げるのに藝妓風情の言を取り上げて陰事を發かなくても宜いぢやないか。これが若し西洋であつたら其新聞紙は恐らく社會に齒せられずなるであらう。假令これが事實であつたにした處が、此際公を侮辱するが如き記事は慎しむべきではないか。外國人に對しても慚かしくてならぬ。此種の事は新聞紙社會で相互に誠め合ふが至當であらう。(伯爵林董談)

## 節を屈して英學を修む

公との初對面は、確か慶應三年の秋であつたと思ふ。我輩は醫家の出身であるから、藩命で當時長崎にあつた養成所(官立病院)に通つて、ホートイン、マインスファイルトなど云ふ外國人の講義を聞く傍ら英學の稽古を始めて居つた。

處が同じ病院の書生の中に、薩摩藩士と名乗る今田九一と云ふ者があつた。今田は實は長州藩士なのであるが、其頃長州藩は譴責中であるから、長崎邊に居る長州藩士は皆他藩を名乗つたのだ。或時、その今田が「同藩士で友人があるから、會うて見たがよからう。」と云ふので、「夫れは面白い、會うて見やう。」と答へて置いたが、今田は一人の士を我輩の下宿に連れて來た。

名刺には、薩摩藩士吉村壯造とあつたが、會うて見ると、我輩書生とは違つて、身の廻り大小中々立派である。初對面の挨拶も濟んで、熟々其人を見るに、容貌俊秀到底尋常の人にあらざる事が判ると共に、多分薩摩藩士吉村壯造など云ふのは、世を忍ぶ假の名で、大に爲すあらんとするの士ぢやらうと察した。



そこで吉村は、「貴下は英語をやるさうだが、自分も其志があるから、差支なくば同居して貰へまいか、自分は大徳寺の隠居所に居る。」と云ふことであつたから、我輩は即座に快諾した。

其頃我輩は藩から七八圓の學費を貰うて居る官費生だから、進退も頗る軽く、行李が一個に著換の二三枚もあつたらうか、夫れに四五冊の本を持つて大徳寺に行つて見ると、一人の若黨などを連れて居る。これが今の大阪造幣局長の長谷川で、當時は十八九位であつたらう。其晩吉村は

「お察しもあらうが、吉村壯造と云ふのは假の名で、實は長州藩の伊藤俊介と云ふ者だ」と云うて身分を話された。我輩も大方そんな事と察して居たと云つて、互に笑つたことで有つた。之が恰度八九月の末で、十一月まで大徳寺に同居して、毎日々々英語の稽古をした。

公は其時分は既に井上侯や山尾、遠藤などと英國に渡つたが、内地の變を聞いて歸つて來たのだから、海外の事情も知り、會話も出来るが、本を読むことが出来なんだのだ。

我輩の英語も今で云へば、一年か一年半稽古した程にも當らんが、兎に角本が讀めると云ふので、毎朝二人で會讀をやつた。

當時伊藤俊介と云へば、既に天下に名を知られた人物であるから、毎日天下の志士が訪ぬて來て國事を談ずるので、寸暇もなきに拘はらず、一介の英學生を相手にして一生懸命に勉強したも

のだ其内間もなく將軍家の大政返上となる、有志の往來がますます頻繁になる、公が一々之に應接して、各方面の模様を聞かれ毎に、今の井上侯が兵隊を率ゐて東上するとか、幕府がどうしたとか、腹藏なく話して呉れるので、我輩も遠からず何等かの變ある事を豫想した。

時は慶應三年十一月で、英國の軍艦ロンリー號が長崎に入港した。この時公は長州公から再び洋行せよと云ふ内命書を得て待つて居たのだから、取敢ず艦長に話をして、すぐ其艦で英國に行くことになつた。早速散切り頭に洋服を省けて、今の海軍士官のやうな風をしてロンリー號に乗込んだ。

夫れで大阪に行くと、恰度兵庫開港の日に際會し、其内に英公使バークスなどが參内すると云ふので、通辯の役に當つたが、何分散切り頭では具合が悪いと云ふので、仕方なしに坊主頭に鬘を着けて參内された。之で、公と我輩とは袂を分つ事となつたが、十一月末になつて西洋紙にペンで書いた手紙を寄越した。其中に「弊藩の主人は之までの貶罪を許され、君臣再生の思あり」とか、「一橋は會津と共に京師を去りて浪華に赴き、京城は薩長土肥四藩にて警衛せり。」などの文句のあつた事は、今も尙記憶して居る。即ち此時は、最う王政復古し、七卿も都に入つて、大政官以下の新官制も出來、長州公父子の御勘氣も解けたのであつた。



其年の十二月頃には幕府との一戦争近きにあることが察せられたが、果して翌年の正月には鳥羽伏見の戦となつた。其時、公は恰も兵庫縣判事をして居た。是より先、公から今の兒玉淳一郎を以て「兵庫に、米國から教師を雇つて、醫學校を立てる積りだから、我輩（當時高橋の姓を名乗る）に出て來て總裁になるやうに」との傳言があつた。そこで我輩は其好意を謝し、且「藩命なれば仕方なく醫者修業と云ふことになつて居るが、實は醫を廢すること既に久しく、藩からは一旦歸るやうにとの命令が來て居る。併し、今歸つて見ても詮なく、此上は何方へなりと脱走しやうと心掛けて居るのだから、遠からず上京の機を得て御目に懸らう」と返事をして、自分は其年（明治元年）の五月から三年の間薩摩に流浪する身となつた。此の間我輩の身の上には幾多の曲折もあつたが、それは公に關係がないから略す。再び藩命で歸藩することゝなつたから一度東京を見て置かうと云ふので、明治三年の冬に東京に來た時には、公は最う大藏少輔で築地に住んで居た。即ち世に築地の梁山伯と謳はれた時代である。

或友人に會ふと、伊藤公が我輩の出て來たことを聞き、頻りに待つて居ると云ふ傳言があつたから、早速訪ねて四年振りに脱去後の顛末やら、今度又歸ることになつたことなどを話した。すると公は「貨幣制度の取調の爲め米國に行くことになつて居るから、是非一緒に行け。」と云ふ。

我輩は藩命已み難きを告げて大に其好意を謝したが、公は「ナニそれは朝廷から藩主に云うてやりさへすれば、何でも無いから」と云ふので、大藏省からは直ぐに辭令が來る、結局公の隨員と云ふ譯で、亞米利加の大藏省に行くことになつた。米國に着いてから我輩は或用向の爲め歐羅巴に行くことになり。公と別れて歐洲に渡り、前島、上野など云ふ人に會つて用向を果し、連れ立ち又米國に來て見ると、公は最う歸朝して居るから、我輩も續いて歸り、紙幣寮の役人に任命された。之は廢藩後間もないことだが、公は少し不遇な鹽梅で租税頭から造幣頭などをやつて居た岩倉大使渡航のときは我輩も公と一緒に行く積りであつたが、曩に一緒に米國に行つた、吉田、福地なども行くことゝなつた爲め、自分は残つて貨幣整理に従事することになつた。

話は前に戻つて伊藤公の愛國心は何處に發したかと云ふことになる。曩に長崎に居た頃我輩が深く公の非凡なる見識に感服したことがあると云ふのは、恰度新政の出來た頃、或日公が半紙に二三個條の新政綱領とも云ふ可きものを書いて示されたことがある。其中に、

- 一 幣制を統一して幣札の濫發を防ぐ可きこと
- 一 兵馬の權を一にす可きこと

の二個條があるのを見て、我輩は深く此の卓拔なる意見を服すると共に、頗る奇異の感を懷いた



と云ふのは、當時兵馬倥傯の際、大小の各藩は虎視眈々として合従連衡を事として居る。併も公は一雄藩の俊傑である。そして其洋學の程も先に云ふ通り當時は甚だ覺束ないものであつた。然るに此の公正にして卓抜なる大意見を把持してゐると云ふのだから、怪まずには居りれなかつた。自分で、自分は此の思想は多分當時廣く世間に行はれた福澤氏の西洋事情から得たものであらうとの疑を懷いて居た。

それから長崎で公が英艦で渡英すると云ふ別れの時に、菅茶山の『黄葉夕陽村舎集』と云ふ詩集と『日本政記』とを特つてあられたが、此の『日本政記』を我輩に贈られて、「此の本は自分が幼少の頃から愛讀し、曩にマドロスとなつて洋行した時にも特に持つて行つたのだが、これ迄の馴染甲斐に進呈する」と云はれた。

爾來我輩は、司法文部内務に屢公と閣班に列したが、或時曾て新政の綱領を示されたことを思ひ出して、公に其時のことを尋ね見ると、能く記憶して居ると云ふから、實はこれ／＼で多分西洋事情からでも得た考だらうと察して居つたと在りの儘に話した。すると公は「それは大に誤つて居る。實は日本政記から得たもので、自分が勤王の志を起したのも日本政記の賜である」と云はれた。そこで自分は、先きの『日本政記』のことを思ひ出して、深く不明を謝したことがあつ

た。斯く政記の一大紀念物であることの判つた以上は、内に置くよりは大略の由來書を付けて博物館にでも納めやうと思つたのは約十年前のこと、處が我輩も始終忙しくて之を果すことが、出來なうだが、一昨年やう／＼出來たのは日本政記を博物館に納むるの記である。固より公の生前に書いたものだが、今公の頌徳表みたやうなものになつて仕舞ふと云ふのは、夢にも思ひ設けぬ所であつた。(伯爵芳川顯正談)

## 非凡の卓見

公と私の交を訂したのは、維新前七卿に従て長州に下向せる以來、今日までも親交があつた。今此の親友が異郷にあつて而も兇手に斃れたと聞いては、胸中無量の感慨に堪へない。公の國家に於ける功績は遠く王政維新前より今日に至るまで實に多大なるものあるは世間の等しく認むる所である。彼の文久二年正月十五日水戸浪士の閣老安藤信正を坂下門外に要撃したる際、其浪士の一人にして櫻田門外の長州屋敷に入りて割腹せるものがあつてから、當時長州邸に居た木戸孝允及び公の如きも幕府の睨む所となり、江戸町奉行所に呼ばれて訊問せられたこともあつたが、



公は其頃より各藩有志と交を訂して、盛んなる攘夷論を唱へたる一人であつた。其後藩公の命により、井上馨、山尾庸三、井上勝等と共に英國に派遣せられたが、彼の地に至り、未だ幾何ならざるに、長州藩は朝命を奉じて、馬關に英、米、和、佛四箇國の船舶を砲撃せるを聞き、是れ長藩の一大事なりと云つて、公と井上馨とは歸朝すること、し、急航長州に着いたが、時は恰も右四國の軍艦が馬關砲撃中であつた。遂に媾和談判の衝に當りて外交問題を結了し、一方には井上氏と共に攘夷の非なるを説き、次で長藩も正論黨勝利を得て舉國一致國事に盡すの運びに達したのである。此間に於ける功績にも、公の力與つて大なるものがある。而して明治に入つた以來、公の國家に貢獻せる所は憲法史上に將た又朝鮮の經營の上に炳乎たるものありと雖も、未だ世人に膾炙せざるもので、公の一生を通じて特筆大書すべきものは、「彼の王政維新の實を收めた藩籍奉還の端緒は、實に公の發意になつた」と云ふ事である。即ち明治元年、公は兵庫縣の知事となつた際、時の内務卿大久保利通氏は木戸氏と謀つて、薩藩は十萬石を朝廷に献じやうと云ふ事になり、長藩にも此舉を慫慂したので、木戸氏は長藩の曩に得たる豊前小倉及び石州の占領地を以てしやうと公に諮つた。公は、「それも悪くはないが、寧ろ今日は率先して我藩の全領を擧げて之を献じて、全國を統一する方が可い」と云ふ事を説いたから、遂に木戸氏と共に之を藩主に説い

た結果、藩主も大に之を賛成し、茲に藩籍奉還の議は、薩長土肥の間に熟して遂に王政維新の實を大成するに至つたのだ、是れ全く公の發意に基くものとして、其大功績は公の一世を通じて大書すべきものと云はざるを得ない。他の公の經綸に至つては、悉く世人の知悉する所だから、敢て予の贅言を要しない。公の資性は宏量公平にして、人と事を議するにも、必ず敵を怒らしむることなく、一種の魔力を有せるもの、如く、爲めに廟議の如きも公にして席にあれば、紛議を生ずることが稀で、無事解決することが多かつた。(伯爵土方久元談)

## 憂國の至誠

伊藤は萩の生れで、自分は山口だから、少年時代には互に知り合ひと云ふ間柄でなかつた。自分は初め高杉と共に毛利元徳公の御小姓をして居たが、當時攘夷論が甚だ盛んで、高杉が其急先鋒となり、遂には君公に向つて袴を着けて攘夷は出來ませぬと言ひ出し、とうとう脱走してしまつた。自分等は攘夷を行ふにしても先づ海軍を興さなければ行かぬと云ふ所から横濱に出て、英語を學び度いと云ふことを君公に願ひ出でた所が、ひどく叱られた。が、百方其利害を説き哀訴



歎願したものであるから、遂には之を許され、同じ御小姓永峰藏太と共に金百圓を貰つて横濱へ出ることゝなつた。

自分と伊藤との關係を云へば、伊藤は、自分が初めて英語研究の目的で横濱に來た時分に東京に來て木戸に用ゐられて居たが、自分等が英語を廢めて英公使襲撃の計畫を定めて江戸に出た時、初めて伊藤と相知ることゝなり、爾來議論も合うて居たから往來して居た。だから、其後海軍研究の爲め英國へ行くことに就ても伊藤と一緒に行くことゝなつたが、伊藤は表向き政府の許が出ないものだから、亡命の姿で行くことゝなつた。

ロンドンに着いてから研究にかゝらうと云ふ矢先、本國で鹿兒島の櫻島戦争が始まり、又馬關でも外船砲撃事件が持ち上がったと云ふことを聞いたから、これは大變な事になつたと驚き、此のままにして置けば外國の事情を知らぬ攘夷黨がどんな事をし出かすかも知れぬ。まご／＼して居ると、今に國が亡びて仕舞ふに相違ない。さすれば、こんな事などして居られぬと云ふので、自分と伊藤とは三人を残して急に歸ることゝなつたが、扱て汽船で歸れば船賃が高く、そうすると残り三人の學資が足らぬ事になるから、已むを得ず又も帆船で歸國の途に就いた。所が此度は三ヶ月かゝつた。

歸つて見ると、下關で砲撃された英、蘭、米、佛の四ヶ國が長州藩に對し謝罪金三百萬圓を出さねば軍艦を差向け、愈最後の手段を取るとの手詰の談判最中、そこで伊藤と自分とはどうしても藩の輿論を和議に傾けさすより外仕方がないと見て、一面在横濱なる英公使ロールコック氏に向つて、廿日間の猶豫を求め、其間に歸國して藩主を説くことに決めた。けれども、外國側では二十日の猶豫は出來ぬと云ふので、結局十二日猶豫することゝなつたが、扱て歸るには何所を通つて歸るかが問題で東海道を通れば無論途中で攘夷黨の爲めに殺さるゝに極まつて居るから、信州を廻つて歸るより外仕方がないと云ふことになつたけれども、又それでは今の約束の間に合はぬと云ふので、向ふの軍艦で二人を送つて呉れることゝなり、長州姫島に着いた。

當時高杉は入獄中であつたが自分等は藩主に對し、和議の到底已むべからざるを説き、若し先方の要求に應ぜずんば敵は直ちに兵力に訴へんとして既に準備しつゝあることをも告げたが、藩の方では中々以て左様な考へは毫頭なきのみか、自分等が公使の手紙を藩主に届けたと云ふのは藩主を辱しむるの甚だしきものなりとて、盛なる攻撃に逢ふ様な次第で、結局外船砲撃は幕府の命で行つたものだから、其談判は幕府に向つてして貰ひ度いと答へるとの命令となつた。伊藤は今や遅しと待つて居る軍艦に行き、其事を傳へると、先方では然らば一應幕府に談判はして見る



が、若しも幕府が知らぬと云ふた時は決して承知せぬ、其時こそは馬關で砲丸の上で御目にかゝると脅かされた。

時正に一面長州征伐のことが起り、元徳公自ら謝罪の爲めとの名を以て兵を率ゐて出向かるゝと云ふことであるから、深く之を止めたけれども聞き入れない。さうすると、之れより先に出かけた來島又兵衛の率ゐた兵と官兵と衝突して敗れたから、元徳公は備後から引き返されたが、その時又自分にも頻りと出でて外國に對する善後策を講ぜよとのことであつた。併し自分は初め中々之に應じなかつたけれども結局行かぬ譯にもゆかず、種々善後策を講ずることとなり、専ら和議の策を献じたが、政府も漸く和議に傾き、愈伊藤が談判に出かけることゝなつた。然るに、外國は幕府に談判を持ち掛けてもはねつけられたから、今度こそは豫定通りの決心を以て軍艦を直ちに馬關に差向けた。そこで伊藤と自分と宍戸と三人で船に乗り、談判の爲め敵の軍艦目がけて乗り出すと、此時早く敵はボン／＼と軍艦より打ち出したが、藩側に於ても豫ねて山縣奇兵隊長の率ゐる藩兵がいざと云はゞの意氣込みで待ち構へて居た所だから、直ちに之に應戦し、陸よりもドン／＼と打出した。其結果は云はずと知れた敗戦で、遂に砲臺をも占領され、藩兵は敗走すると云ふ始末、そこで藩の方でも一時的和を講じたいとの事であつた。

併し、自分は一時的の平和は斷然不可なる所以を説き、盛に之に反對したが、藩主に於ても自分に對し、最初權謀を以て和を講じたいとの旨を告げられたから、自分は極力其不可を説いた。處で今度は信を以て和を講ずべしと説き示された。同時に藩の政府でもどうやら納得する様になつたが、まだ眞實からして和を講ずると云ふ考ではないらしいから、充分議論もしたが兎も角も和議を講ずると云ふ事になつた。

そこで高杉を遽かに家老と云ふ事に仕立て、伊藤と自分とが通辯と云ふ資格で、和議の談判に行つたが、勿論謝罪金三百萬圓を長州藩から出すことは絶対に出來ぬ相談だから、金は幕府から出すに依て戦争を止めようと云ふに外ならぬのである。先方は金を出しさへすれば可いとの事であつたから、一面幕府に向つて其三百萬圓を出す様に掛合つた。幕府でも色々議論が起つて容易に極らなかつたが、こちらは兎も角一時戦争を止むると云ふことになつた。そこで伊藤と高杉とは君公に其事を報告に出向き、自分は一人馬關に居て占領地の引渡し方をやつたが、藩兵の使つた大砲は煙火の筒であつた。

其後になつて又々攘夷黨の氣勢が中々荒く、今度の和議を専ら自分等が藩主を説いてやらしたものに相違ないから、殺して仕舞へとのことで、中々危険であつた。そこで伊藤と高杉は一時隠



れて居つたが、自分が船木の藩主の居る處へ行くのは危いから止めよと云ふ手紙が伊藤から來た其後又々自分と伊藤と高杉との三人で、馬關へ出掛けた。それは一旦和議を講ずる事になつたけれども、若し幕府が金も出さぬとなれば、又々こちらへ押懸けて來るかも知れぬと云ふので、それ等の様子を見んが爲めに行つたのだ、さる程に、幕府の方では愈謝罪金三百萬圓を出す事になつて茲に愈和約は成立した。で、其金を幕府から出させる事に就ても、伊藤は横濱へ來て公使に暫く待つ様に掛合ひ、同時に幕府へも迫まつたのであつた。

自分は其後再び長州藩の役人と爲つて居たが、今度は對幕府の關係に就て、萩の士族の一團から俗論黨が現れ、社稷を重しとし君を輕しとするの論を唱へ、萬事を棄て幕府に恭順すべしと主張し、其勢甚だ盛であつた。そこで藩主も頗る苦心せられ、一日自分に對し「朝廷今日の御衰運痛苦に堪へざるなり、我等父子の苦衷何れの日ぞ貫き得んや、汝之を思ふべし」との書を送られた。依て自分は親しく君公に會ひ、單純なる恭順の不可にして武備恭順の必要なる所以を説き、且御前會議を開いて盛に此説を主張し、尙又一般に對しても朝廷を補けて開國進取の方針を取るの必要なることを唱導した。

そこで自分等は犬羊と稱へられ、外國の探偵だと思はれた揚句、自分はとうとう刺客十一人の爲めに、九月二十五日暗殺されんとして幸に命だけは取り止めたが、何分頸からかけて數ヶ所の傷だから人事不省に陥り、目も見えなかつた。餘り苦しいので、兄に首を切つて呉れと頼んだ處兄も決心した様子であつたが、微かに「貴様は國家の爲めには盡したが、親には不幸だぞよ。今背に抱きついて居るのは阿母さんだぞ、親に孝行の爲め今縫うてやる。」と云ふ聲が、夢の様に聞えた。自分は返事をする聲も出なかつたが、所幾太郎と云ふ醫者を呼んで其傷を縫はした。すると、昔のことだから随分亂暴なもので、焼酎で傷を洗ひ、疊針疊絲を以て縫はれた。二週間も経つて、稍宜い様になつた。其の少し前歸つて來た伊藤は、此事を聞いて馳せ付け、自分の枕邊に涙をホロ／＼落した。其涙が自分の顔にポツリ／＼と落ちたので、自分も押へ切れぬ様に涙が湧き出して來た。自分はまだ何にも口がきけぬから、只手まねで早く歸らぬと、ち前も自分の様な目に逢ふから、一刻も早く歸つて呉れと頼む様に急ぎ立てたけれど、伊藤は中々枕許を離れ様としなかつた。

其時のことは今も思ふと、ハッキリ目の前に現はれて、針で胸を衝く様な氣持がする。

藩籍奉還は實際は伊藤が云ひ出したので、其次第は伊藤が兵庫縣令をして居た時分、朝廷の財政は舊幕府の八百萬石を持つて居られるけれど、何分にも諸種の費用が入るので足りる筈がない



そこで木戸と大久保とが「薩長の二藩から十萬石づゝを献上しよう」と云ふことを云ひ出し、伊藤にも相談した處、伊藤は「假りに兩藩で二十萬石を献上した處が矢張り不足の事は免れない。故に各藩の藩籍を奉還するが一番よい。左すれば六十餘州の統一が出来て、政治を行ふ上にも都合がよい」と云ひ出した。それが原となつて遂に藩籍奉還の事が行はれ、遂には廢藩置縣ともなるに至つたのである。其後伊藤の終始國家の爲めに一身を捧げて盡した事は、今自分が云ふ迄もなく皆世間の知つて居ることであらう。(侯爵井上馨談)

## 明治功臣の首位

伊藤公一生の功業は各人の立場に依り其見る處を異にするも、余は嘗て敵として戦ひし事もあり、味方として公と握手せし事もあるから、比較的興味を以て公の功過を批評し得べしと信ずる。蓋し公は憲政の功臣を以て人も許し、自らも之を任じ、曾て其著書に於ても我國民が政治的自覺の薄弱なるを痛歎した事がある。苟くも之を痛歎する位ならば、自ら政治思想の助長に努むべき筈であるに、公が今日迄の經歷に於ては、却て其助長を妨害せしことも尠くない。即ち彼の集會

條例保安條例等の制定の如き、又四民平等の精神に背いて公侯伯子男の制を設けたるが如き、公の創意に基いたるもので、感服する事の出来ぬ點がないではないが、公の一生を通じて之を大觀すれば、公は我が朝野の元勳中、最も新智識に富めるの士で、彼の木戸孝允公をして彼の如き偉功を成さしめたのも、亦大久保公をして其快腕を揮はしめたのも、木戸大久保岩倉諸公をして洋行の擧に出でしめたるも、全く公が其智囊となりて献策したるが爲である。爾來公の生涯に於ては前記の如く批難すべき點はあるが、公は我國文明の指導に與つて力あつたることは、何人も否認し能はざる處で、明治の功臣としては、公を其首位に置くべきは余の説明を要せざる處である。而して憲政の完美は、公が深く心を用ゐた所で、嘗て明治二十三年余に向つて「余は朝に在りて聊か力を憲政の創設に致せり、君は野に在りて同じく力を斯業に致されたり、人は始めありて終りなかるべからず、憲政有終の美をなすは實に吾々の責任なり」と語られた事がある。以て公の志の存する處を知るべきである。

其後帝國議會開會せられ、余は自由黨を率ゐて數々公を敵として戦つたが、日清戦役後東洋の大局より打算して公と握手し、彼の軍備擴張を遂行し、之がため日露戦役を迎へて違算なからしめたのは、公と余と共に先見の明ありしを誇る處である。而して余の自由黨を公に譲りたるは公



は曾て人に向つて「板垣の自由主義なら良い」と語られたこともあり、余も亦伊藤公は國家觀念を有する個人主義——高等個人主義を抱持する人なりと信じたからである。爾來公は政友會を創立し、又韓國統監の大命を負ひ、其朝に在ると野に在るとを問はず、一意専念我が國家のために心血を瀝がれたることは世人の洽く知る處である。

今回の滿洲行に就ても、世人は或は餘計な旅行だと言ふ者もあらうが、決して然らず。我帝國の一大使命たる韓國の保全を全うせんと思ふならば必ずや滿洲の事情を知悉して、之に對する方策を立てなければならぬ。蓋し公が今回の旅行は、其深憂より出でたるもので、其老軀を厭はず始終國家のために盡瘁せんとする奉公誠忠の精神は、吾人の深く感謝すべき所である。（伯爵板垣退助談）

## 政治家としての伊藤公

伊藤は實に立派な政治家であつた。伊藤の人物は此一言で盡きる。殊に吾儕が伊藤に敬服して居るのは其の頭腦が多方面であつたこと、其の性格が調和的であつたことだ。伊藤の豪らかつた

處は此處にあるが、又、政治家の生命も此處にある。

元來、政治家には頭腦が多方面であると云ふことが非常に必要である。政治と云ふことは國家を形造くる各種の勢力を色々の方面から視察して時と場所に應じて料理按排して行くことで軍事とか、外交とか、財政とか、或は教育、宗教、民情、風俗とか、能く之を比較考量して政治を行はねばならぬ。従て政治家には其の頭腦が多方面に發達して之を洞察する力がなくてはならぬ。處で、政治家と云はれる者の中に其頭腦が偏せず頗せず多方面に能く發達して居るものが幾人あるか。近頃追々立派な政治家も我國に出る様になつたが、然しどうも眼界が狭く、全體に行き涉らない。所謂専門に走つて常識が發達して居ない。頭腦が多方面に働くことが出来ない、處が、伊藤はさうでなかつた。實に頭腦が多方面に涉つて居た。

又、伊藤の性格が極めて調和的であつたことは、多數の政治家に稀に見らるゝ美點であつた。政治には兩方面の衝突が必然伴ふて來る。一は政權の爭奪で、他は責任の歸する處を互に譲り合ふことである。野にありて政權を離れて居る間は常に朝にあつて政權を握つて居る者を仆さうと苦心する、所謂積極的の衝突である。一度、廟堂に入つて政治を行ふことゝなると互に其失政に就ては其責任を逃れやうとする、所謂消極的の衝突である。此の積極的消極的兩方面の衝突は政



治に必然伴ふて來る現象であるが爲めである。無論政治家には野心と云ふものが存在する、野心がなければ政治家の味ひがない。然し餘りに野心が燃えると、唯野心の爲めに政治を行ふことになる、唯だ無暗に政權の爭奪に腐心したり、又はお互に責任の所在を避けやうとするのは實に此の野心の爲めに政治を行ふとする結果で、之は誠に政治界の爲め國家の爲めに忌むべき現象である。多くの政治家は滔々として此の弊に陥り易い。處が、伊藤はそうでなかつた。常に國家の爲めに政治を行ふて野心の爲めに政治を行はなかつた。無論政權を握れば、充分自己の政治的野心を充す爲めに全力を盡したけれども國家と云ふことを忘れなかつた。であるから、濫に政權の爭奪や、自己の責任を逃れやうとすることはなかつた。之は實に伊藤の調和的性格が然らしめたので、伊藤の豪い處は此處にある。吾國の政治が比較的圓滿に淀みなく發達を遂げて來たのは實に此の伊藤の調和的性格に俟つ處が多かつたのである。

今回伊藤が滿洲視察の出發際に、桂の新聞記者招待會で伊藤が極力今度の滿洲旅行は政治上の意味はないと辯護するから、吾儕が、政治家は轉んでも政治的のものでなくてはならぬ、又一體政治家の云ふことは、頭で考へて居ること、多く別々に働いて居るから、伊藤の演説は反面に眞理があることを洞察する位の炯眼がなくては記者たる資格がないぞと邪揄したのであるが、

兎に角、吾儕は伊藤が今度の滿洲視察は大なる土産を齎らすことを楽しんで待つて居たが、實に残念なことをした。

伊藤は吾儕よりも二三年下である、年齢から云ても未だ死ぬる時機ではない。況んや、吾國はまだ／＼伊藤に俟つ處が多いので、返す／＼も残念なことをした、然し、どうせ仆るゝものなら壘の上で死ぬるよりも、滿洲の野で刺客の手にやられたのは却て死榮があつたと思ふ。ビスマークの晩年はどうだ。誠にミジメなものではないか、吾儕はビスマークの晩年に比して伊藤は實に花々しい死を遂げたと僅かに自らを慰めて居る。

要するに、伊藤の今回の死は、洵に國家の不幸である。併し吾儕は唯だ悲觀して居る譯には行かぬ。伊藤は死んでも、國家は益々生存競争に奮闘せねばならぬ、そうして、我國は益々伊藤のような大人物を要するのだから、將來必ず第二の伊藤が現はれるであらうと思ふ。(侯爵大隈重信談)

## 伊藤公と金と女

伊藤さんと私との懇意は世間周知の事であります。伴の喜七郎の婚禮も伊藤さんの媒酌でした



伊藤さんとは斯うした別懇の間柄であつたので、伊藤さんと私との間に何か金銭上の関係でもあつた様に考へて居る人もある様ですが、噂は噂で私は一向差支ないが故人伊藤さんの爲めに何ともお氣の毒でならぬ。亦國家の爲めにも悪影響がある。何となれば一商人の大倉と國家の元勳伊藤公との間に金銭上の關係のあつた等といふ事は、假令噂だけにせよ、一般人心の上に明かに悪影響を及ぼします。伊藤さんに金の事などは、云へば怒られますよ。

なる程、私の向島の別宅へチョイ／＼見えられましたよ、それはあの多忙な伊藤さんが頭を休められる爲めでした。あの頃伊藤さんはよく斯う云はれましたヨ「家に居ると何だかんだと大勢押し掛けて来て少しも體や頭を休める暇がないよ、お前のとこへ来て斯うして靜かにして居ると氣がノビ／＼するよ」とネ。

伊藤さんの向島別宅通いで、大倉は伊藤公に女でも取り持たんだらう、なんて噂もあつた相ですが、飛んでもない事。そりや、よく藝者をつれて來られたものですが、金の事等も女中頭に命じて自分で拂はれましたよ。

亦、あれ程の伊藤さんが大倉が取り持たなくても、女に困るなんて筈がないじゃありませんか伊藤さんはサツパリした人でしたよ、女に持てる人でしたよ。

金の事だつてそうです。第一伊藤さんは子孫に金を遺さう等と考へる人ではなし 陛下の御手許金を頂戴するのも伊藤さんが第一でした。

洋行される時などは八萬圓を頂いた相です。明治天皇と伊藤さんとの關係は丁度主人と丁稚上がりの番頭といつた様な間柄でした。

伊藤さんと云へば女好きといふ事が直ぐ考へられる様だが、案外サツパリした人でしたよ。アノ方も口程強くはありませんでした、「ナアニ大倉俺は未だ……」と云はれながらもネ。

それに就て面白い話がありますよ、明治十五年でしたらうか。伊東己代治サンを伴れてヨウロツバへ行かれた時でした。伊藤さんはホテルへ何時にと約束してある女を呼んで置いた。處が用事で一時間許り遅れて歸つて見ると、女は時間通りに來て居て、留守居の伊東己代治サンが失敬して居る最中でした。己代治さんは飛んだキワドイ所を見つけられ、「これは／＼と頭をかいた。カン／＼になつた伊藤公は時の獨逸公使青木周藏を呼び附けて……事小なりと雖も……とヤツ附けた相ですヨ。その時の伊藤さんの顔が見える様な氣がしますよ。己代治さんは公の愛妾光菊も失敬しました、癖の悪い人です。

伊藤さんに就ての話は未だ澤山ありますがネ、ところで此の間ある實業家が來て、伊藤さんと



私との金銭關係云々の話に及び、私の云ふところを聞いて「ナル程」と信じて行きましたよ。大倉が伊藤を利用して金儲けをして居たら、今日九十になる迄七十年間に私はもつと金持ちになつて居ますかも知れませんが。イヤ伊藤さんには商賣の事を話してもわかりませんよ。私の財産なんか安田さんの半分もありますまいよ。知れたもんでゴワすよ。そして安田さんは早く死にましたね。

又、現に生きて居るある高位高官の人で、伊藤さんに女を取り持たうとして、出入りを差止められて居る人がありますよ。(男爵大倉喜八郎談)

## 伊藤公と新喜樂女將

築地新喜樂の女將は素と芳原の花魁。才氣縦横、辯舌人を壓す、公之を殊愛し、一夜女將に向ひ、

「お前も随分歳をとつた、此の世の名残りに見ぬ處を見ておくが、おれのある中に、朝鮮へ来てはごうぢや」

と戯談の積りで話された。女將の方は至極眞面目で、

「御迷惑にさへならなければ、参りますよ、たんと御馳走をしてください、朝鮮料理でもネ……」

女將の事だから、勿論手錢で出かける筈がない、横濱の某々豪商の若紳士が新喜樂へ遊びに来た時に、女將が、

「あなた方も少し大きな遊びをやつて見たらどうです。」

と何氣なく油をかけると、その一人が、

「箱根へでも行くか」

といふと他の一人が、

「京都までも行かうか」

といふ。

「まだノ、小さい。」

「宮島までのすかな。」

「もう少し先きへ。」



「まさか長崎でもあるまい。」

「あなた方はまだ帝國の新領土を見ますまい。」

「朝鮮か。」

「さうです。」

「おもしろからう、併しさういふおかみもまだ見まじ。」

「それだから、一緒に行かうぢやありませんか。」

「ゆけるかい……お前が？」

「いけますとも、思ひ立つたが吉日、明日仕度をして夜行に乗りませう」

「本統か。」

「勿論。」

「よし。」

人の好い若旦那達が女將の口車に乗せられて、朝鮮にまで飛び出すことになった。

京城に着くと若紳士達があちこち見物してゐる間に、女將は南山の統監邸に車を驅つて、案内も請はずに、ズーツと伊藤公の居間に通つて、

「御前今日は」

とやつた時に、さすがの公も肚膽を抜かれた。

「どうして来た。」

「獨りで態々御機嫌伺ひに参りました。」

「さうかよく来た、おれもさみしい處だまあ飲め。」

早速酒が出る、公も女將も酒好きで話上手と來てゐるから耐らない、飲んで話しては語り、語つては飲み、興はだん／＼増すばかり、その中に飲む方ではヒケをとらないお附武官の村田惇が來る、掬翠樓から藝者も來て取り持ちする。女將すつかり好い心持ちになつて、昔し執つた杵柄で躍り出した。四五日してから歸る時に女將が何か記念に書いてくだされといふ。公乃ち筆をしめして左の一絶を書いて贈つた。

聞説 阪東女將軍 剛腰踏破三韓雲

滔々雄辯驚人去 又帶微醺翻舞裙

喜樂老將來韓城 勇氣壓滿城

將去求書援筆漫然送之



公逝いて後ち、女將池上久ヶ原に一家を興し、如意庵と號し、公の筆迹を石に刻んで門前に建てた。女將の後嗣今尙ほ此の庵を營んでゐる。(小松綠手記)

## 伊藤公と東拓

明治四十一年九月十二日に帝國ホテルに東洋拓殖會社の創立委員會が開かれ、朝鮮側から白完燮、白南信、趙鎮泰等と私が出席した。その時公は壯重な口調を以て、東拓が日本の爲めではなく朝鮮開發の爲めに設立されるものであるから、日鮮兩方とも誤解してはならぬ、此の會社には多大の特権を與へたが、之に副ふべき重大な責任も負はせてある、東拓が若しその特権を濫用して統監府の施設と矛盾するが如き行爲に出てはならぬといふ趣旨の演説をされた。私は朝鮮側委員を代表して、東拓が日鮮双方の利益を圖る爲めに出來たといふ趣旨の御訓辭を拜承して大に安堵しました。若し朝鮮人中に誤解を懷く者でもあれば出來得る限りそれを匡正することに努めませう、農耕を國本とする朝鮮に此種の會社の興つたことは誠に結構な事である旨を述べた。その翌日

私は早朝大森の恩賜館に公を訪問した。それは七時頃であつたが、既に十四五人も控へてゐたがそれに拘らず、自分を引見して、朝鮮統治に就いて十時半までも話を續けた。その間、他の面會を拒絶された。公は午餐を共にせよと勧められたが、私は他に約束があつたので、それをお断りして退出した。同年十二月二十日に公は京城に到着され、その夜韓國大臣を晚餐に招かれたが、宴終つてから首相李完用、稍重應等を引留めて、東拓役員を選定に就き相談され、宇佐川中將の總裁に配するに、朝鮮側は副總裁に閔泳綺を理事に私を任命された。之より先き此等の役員の指名に就いては意見が纏まらずに統監の御歸任を待つてゐたのである。公が私を永い間引留めて話を交へられたのは、理事試験をやられたのであつたと、後ちに思ひ當つた。公は飽くまで公平で親切な大人物であつた。(韓相龍手記)

## 公平倒れとの評

伊藤公は、元來淡泊の性質で、萬事公平で、偏頗のことが嫌ひであつた。その爲め、公の「公平倒れ」といふ冷評さへあつた位である。



例へば、西源四郎は、曾て馬關で公を暗殺しようとした長府の野村某の親戚であるが、長府人の某といふ者が、西の世話を公に頼むと、公は快く引受けて、書生として、なにくれと目を掛けて、其の業を成さしめた。(編者曰く、次女朝子をも妻はせた)

又某政治家は、維新前からの知人であつたが、明治十年の役の際、一部の人々が政府を顛覆しようとして、まさか此の某が、要路の大官(論者註、此の大官中には無論公も在つた譯である)を暗殺する計畫にまで同意したものと思はれなかつたが、ともかくも連類の一人として獄に投せられた。其の後刑期が満ちて出獄すると、公は舊交を思つて、よく此の某を世話し、其の洋行するときには、丁度末松謙澄氏がロンドンに居たので、これに添書して萬端の周旋を頼むなど情誼懇切を極めた、尙ほ其後に、公は、某が一旦方向を誤つたことは惜しいものである、元來勤王の志厚い人物で、今は悔悟の念も十分に顯はれてゐる、其の才は大に用ゐるに足るものであるとのことを、雲上に聞え上げ、重き責任の地位に推舉し、某をして切成り名遂げしめた。(末松謙澄子の記述による。編者曰記述中某とあるは陸奥宗光伯を指したものであらう)

## 伊藤公の涙

伊藤公は己れに克つ工夫、偏僻を矯める修養には随分骨を折つたと、自分で時々言つた程であつたが、それでも、とう／＼己れに克ち了せないで、涙にうち負けたことが、三度あつた。

第一は、ベルリンで泣いて了つた。それは、末松謙澄子がまだ壯年の頃のこととて、明治十一年に、子は公の推舉で、遊學の爲めに、官等を下げて、外務省の小役人になつて、公使館附屬といふ名儀で、ロンドンに留學した。然るに、或事情で、明治十三年に、子は官を罷めて、これから如何なる艱苦に遭ふとも必ず獨力で業を成し遂げると決意して、その態度を取つた。さうして居ると、明治十五年に、公が憲法取調の爲めに渡歐して、ベルリンに着いた。子は、無論自分の目下の苦境を訴へる爲めではなかつたが、公の舊誼が子をしてロンドンに晏臥せしむるを許さなかつたので、子は早速ベルリンに公を訪ねて、暫らくそこに滞在した。公は、隨員をして、子に一行中に加はるやう切りに勸告させたが、子が可かなかつたので、一日、兩人差向ひの席で、公はそれを言ひ出した。然るに子は尙ほ初志を翻へさないで、諄々と辭退の意を陳べて、私は自分から政府に頼む心はありませぬ、といふ一段に到ると、公は無言となつて、涙をハラ／＼と落とし、ハンカチで兩眼を掩うて了つた。

第二は、明治三十五年十月二十五日、公が大磯滄浪閣で、親戚故舊を集めて、還暦の小宴を張



つたとき、主人に對する祝杯が終つて、公は老友井上侯の健康を祝すとて、立つて演説し始めたが、四十餘年の浮沈を説き、侯と共に死生の境に出入した所へ行くと涙が流れて語を成さなくなつて了つた。座客も一人として貰ひ泣せないものは無かつた。

第三は、明治四十一年に 井上侯が大病に罹つて、全く絶望の容態となつたのが、不思議に回復して、翌四十二年 内田山の邸で快氣祝の園遊會を催し、公は招かれて、祝辭を陳べる旁ら井上侯との親交を叙し、情迫つて、終に飲泣して了つた。(直話の部、友愛の至情、説く者聞く者皆泣くの項参照)

右の外、公が幼年のとき、(十一二歳の頃)萩で、福原家に俸公にやられて、父十藏翁が心配して、或夜窃かに立寄つて様子を覗ふと、家内中留守で、公が獨り玄關わきの小座敷に坐つてゐた。翁を見ると、幼い公が遽かに泣き出したので、翁は大喝して去つた、といふ事實がある。これも公の涙の一つに算ふべきであるが、寧ろ幼年通有の涙の部に入るべきものであるかも知れぬから、暫らく之を措いて公の涙としては、前記三回のそれを特記して置く。(未松子の記述に依る)

## 公の癖

伊藤博文公は非常に讀書の好きな人であつた。名高い近代の政治家で、彼のやうに讀書を好ん

だ人は多くはあるまい。彼が常に他の政客に一頭地を抜いて新知識に富み、新見識に秀でゝゐたのは、實に之がためであつた。彼は斷えず歐米の新刊書を取寄せてゐた。

彼が洋行した時には、何よりも多く書籍を買ひ込むのが例であつた。他の政治家に比して語學も餘程出來たので、洋書を自在に讀破するだけの力があつた。彼は好んで歐米大政治家の傳記や政策を讀んで、之を日本に適用することを怠らなかつた。

彼が喫煙癖もなか／＼強かつた。二六時中斷えず其手から葉卷を離さなかつた。彼は喫煙しても、唯だ口の中に煙を入れるだけで、決して胸深く吸ひ込まなかつた。そして一度火をつけた葉卷が、吸つてゐる途中に火が消えると、其煙草を直ぐに棄てるのが例であつた。例令僅かしか吹かなくとも、決して其煙草に火をつけず、他の新しい葉卷を出して用ひた。彼の喫煙癖は聖聞に達してゐたので、屢々御手元から上等の葉卷を拜領した。この時の彼の喜びは例へるにもものゝないほどであつた。

彼は朝食を食べないで、唯だ毎朝梅干を食べて番茶を飲んだ。酒も多くは飲まないで、晚餐に三合ぐらゐであつた。然し彼には必ず寢酒を飲む癖があつた。彼は月夜を好み、月が出ると夏などは緋の單物に角帯を締め、庭下駄を穿いて飄然として邸外を散策した。彼は刀劍を好み、氣が



屈した時は大刀の鞘を拂つて振廻すなどすることもあつた。圍碁も好きであつたが、強くはなかつた。

## 板垣伯と公

板垣伯は公の先輩であつた。明治四年七月公が大藏少輔であつた時分に、板垣は西郷木戸と同格の参議であり、公が同年十月に岩倉と共に洋行される前月に工部大輔となつたが、その時板垣は参議をやつてゐた。板垣は征韓論の結果西郷と一緒に野に下り、明治八年の大阪會議の結果、今度は木戸と共に再び参議となつた。その時公は一段下の工部卿であつた。間もなく板垣は木戸と意見を異にして辭職して以來引續き下に在り、明治十四年に自由黨を組織して其の首領となつたのであるが、明治三十三年に至り、公が自ら政黨を組織せんとする志を起した時に、板垣は部下に向ひ、「吾輩は創業の力に於て自ら他に一日の長ありと信するも、守成の事に至つては、憲法起草者たる伊藤に譲ることに決したから、若し伊藤が新政黨を組織するならば、公等伊藤と共に憲政の爲めに盡力せよ」と告げて、隱退の意を示した。是に於て板垣の自由黨は舉つて公の政友

會に加入することになつたのである。亦以て板垣が如何に公の才幹に敬服してゐたかが判ると共に、公も常に板垣の好意を多としておられた。(小松綠手記)

## 王妃と内親王との複本位

明治天皇の第六皇女昌子内親王は、竹田宮恒久王に嫁し給へるが、竹田宮となられても、尙ほ昌子内親王と稱せられたのである。それと同時に宮内省に於て決し兼ねた問題は、内親王の宮中席次であつた。内親王としては、その夫君たる王の上席であるし、單に竹田宮妃としての地位よりすれば、當然王の次席とならなければならぬ。式部職などでは、皇女が婚嫁後依然内親王たる資格を持ち給ふ以上は、他の王及王妃の上席にあるが當然なりとの説があつたので、終に確定することができず、結局明治天皇の勅裁を仰ぐことになつた。

英明なる明治天皇は、事皇家に關するが故に、專斷を憚るとて、特に伊藤、山縣、松方、井上の諸元老に御下問になつた。かういふことになると、松方や井上は勿論、山縣にも判らない、孰れも篤と考慮の上奉答に及ぶべき旨を言上して引下つたが、獨り公だけは即座に御答へした。



「婚嫁後の内親王を王の下に置かるゝも又その上に置かるゝも共に不可なり、若し前者の如くなれば、内親王たる敬稱を保たるゝは無意味となり、又後者の如くなれば、夫を凌ぐの嫌ありて人倫の常規に適はず、臣謹みて惟ふに、若し夫君たる竹田宮恒久王殿下と共に殿下の御配偶として宮中に御召の節は、宜しく夫に従ふの正例に依り恒久王の次席に置かるべく、若し又内親王たる單獨の資格にて御召の節は他の王及び王妃の上に置かるゝを適當と認め奉る」と奏上したところ、陛下はその説當れりとして、その通りに御裁可になつた。

公は公私の別を明かにすることには頗る精透なる見解を持つてゐた。それといふのもよく古今内外の事を知つておられたからである。右の話をされた序に、その直接の實例ではないが、公私の分界を明かにする一例として英國の女帝ヴィクトリアの逸話を語られた。

「ヴィクトリア女王の配偶は、プリンス・アルバートといつたが、なか／＼よく事理を辨へてゐた人物であつた。アルバートは公式の場合には一天萬乗の君主たるヴィクトリア女王の下に日蔭者となつてゐたが、家庭にあつては夫たる地位を嚴守して少しも譲らなかつた。即ち外にあつてはヴィクトリアを女王陛下と尊んだが、内にあつては自ら主人として、陛下を呼び付けにしたものだ。併し飽くまで剛慢なヴィクトリア女王は、如何なる場合でもは自分を「クウ

イーン」と心得てゐた。或時女王が自らアルバートの控室にはいらうとして戸をノックした。するとアルバートが内から、

「誰だ？」

と訊いた、女王は即座に、

「吾は女王ヴィクトリアなるぞ」

と答へた、間もなくアルバートの聲として、

「こゝは女王陛下のはいらるべき部屋では御座りませぬ」

とたしなめた。女王は始めてそれと悟つて、

「御身の妻ヴィクトリア」

と言ひ直した。

「然らばはいられよ」

とて戸を開けさせたことがある。ヴィクトリアも偉いが、アルバートも賢明な人であつた、不幸にして早死をしたが、その死後ヴィクトリアは自らアルバートを慕ふ誠意を籠めた記録を發表して、アルバートの美徳を激賞した。



公はこんな話をよく覚えてゐられた。(同上)

## 公の英語自慢

公が倫敦留學は一年にも足らなかつたから、その間には一寸した通譯ができる位に勉強された丈けであつたが、歸朝後は英學の心得ある者に會へば節を屈して勉學を續けられた。随つて維新以來の元勳元老中で英文を讀み英語を繰る人は公たゞ一人しかなかつた。それが公が常に新知識を振り廻はして餘人を壓倒された所以である。

筆者が明治三十五年十月に、米國から歸朝した時に、公を大磯に訪うたが、折りしも當時の皇太子嘉仁親王より御製の詩を賜つたとて、墨痕淋漓たる御親筆を示された。

多年從政盡忠誠

内外事情如鏡明

綠野堂中回曆宴

祝卿爵考保功名

それから公が、東京に出られるといふので、筆者も同道したところ、汽車に乗つてから間もなく、

「君はコサツクの由來を知つてゐるか」

と突然訊かれた。露軍中に驍勇なコサツク騎兵があるといふことは誰でも知つてゐるが、さてそれがどうしてできたものかに至つては、恐らく知つてゐる者は多くはあるまい、

「まだ研究したことはありませんね」

と答へると、公は得意氣に、手提カバンから一冊の洋書を出した。

「これはビーター傳だが、コサツクはビーター大王が特に編成した事情が此の中に書いてある讀んで聽かせよう」

それから公はあまり巧くない英語で音讀を始められた。此の一等室は借切りではなかつたが、公と筆者との外に乗客がなかつたので、筆者は大磯から新橋まで謹聽を仰付かつた。筆者は公の根氣の好いのに驚嘆した。

それから四年後の明治三十九年に韓國統監として京城に居られた時分に、仁川に上陸した兵隊の哨兵線内にはいり込んだ英國婦人と言葉の行違ひから哨兵が鐵砲の臺尻で突き出したといふので、京城駐在英國總領事コーバーンが抗議を持出したことがあつた。

公はかゝる些細な地方問題は、中央政府に持ち出さずに地方的に解決すべきものであるとて、



筆者をして、その趣を書面でコーバーンに通告せしめられた。すると、コーバーンは京城で解決が付けば結構であるから、それまでは東京の英國大使に對する報告を差控へると言つて寄越した。そこで公は當時師團長岡崎中將を招いて、先方は事情を知らぬ外國婦人の事であるから、理窟を言はずに、哨兵の無禮を陳謝してはどうかと相談されて略ぼその通りに決定し、一兩日中に手續をするばかりになつてゐた時に、俄然東京の外務省から電信が來た、それには英國大使から仁川に於ける英國婦人侮辱事件に付て抗議を申込んで來たから、其の實情を承知したいとある。

その時、公は赫として怒り、すぐにコーバーンを招べといはれす。そこで統監が急用で會はれないといふから御都合次第可成早く御出を願ふといつてやると、コーバーンは呼び付けられたのを不満に思つてか、背廣服でやつて來た。

コーバーンを應接室に待たせて、公に取次ぐと、公は、

「わしが直接に談判するから、君は傍でその問答を筆記せよ」

と言はれるので、當時外事局長たる筆者は年寄の冷水だわいと思ひながら、よろしう御座いますとて立會つた。

公の英語は、主として讀書から會得したものであるから、發音も文法も變則である。Internationa-

ional Powers をインテルナショナル・パウエルと言ひ又 Civilized Country (シヴィライズド・カントリー) とシビライズド所を Civilized Country (シヴィライズド・コントリー) といふなど、随分亂暴な言葉を使はれたが、コーバーンは能く了解ができたものと見え、殆ど聞き返へすことさへなかつた。

公の論旨は、當該事件を自分が地方問題として解決すると受合ひ、貴下もそれを承諾しながら東京の大使へ通告し、大使から我が外務大臣に抗議を提出したのは、背信行爲ともいふべきもので、文明國の總領事たる態度として甚だ遺憾とする所である。一體貴下はかくいふ自分の解決能力に信頼を置かないのかと、率直に詰責したのである。

是に於てコーバーンは頗る恐縮して東京の自國大使は多分拙者の報告文を誤解したのであらう拙者は之を地方問題として解決ができると思ひ、單に事件の現状を報告するに止め、貴國外務大臣に抗議すべき意を含ませたことがなかつたと答へた。そこで公は然らば早速其の誤解を正す爲め貴下より大使に電報されることと思はれるが、否らざれば、當方より外務大臣を経て大使の誤解なりしことを通告すべきであると言はると、コーバーンは拙者より直に其の旨を電報にて大使に申送るべしとて、會見を終つた。コーバーンは歸りがけに、平服で統監の前に罷出た失禮を



も謝した。

公は此の會見筆記を外務大臣に報告せよと言はれたので、筆者は公の應對を正則の英語に書き改めて、公の檢閲に供したところ、公はこんな巧い事は言はなかつたとて、修飾的文字を削りその言はれた通りに筆を加へられた。公の英語も英文も相當に役に立つ丈けにできてゐた。(同上)

## 臨終の光景

公の主治醫たりし私は公爵の後方に居つたが、恰度爆竹の様な音がするから、何處でか御喜びに此様なことをやるんだなと、呑氣なことを考へて居ると、最う丸が三つも這入つて居るのです。(傷害の専門的陳述は略す)私は公爵の手當に掛りきりで他の様子は能く知らないが、公爵を列車内に抱へ入れると直ぐにブランデーを飲ませて盛んにカンフル注射をやつた。血はホワイトシャツに一尺回り計りにじみ出た丈だが、肺部を打診して見ると濁音が聞える。即ち第一弾及び第二弾共肺部を貫通したのが致命傷で、内部の出血が餘程激しかつたものと見える。夫れで公の創は皆右から這入つたのだが、隨員の森君田中理事川上總領事などは皆左から打たれたのである、と云ふのは伊藤

公丈は日本人の並んで居る前でクルリと廻つて軍隊や日本人の歡迎者を右手に見て二三歩足を運んだ處で、隨員の人々は未だ廻りきらぬ所であつたから、一方は右、一方は左から彈丸を受ける様になつたのである。遺骸の仕末は長春でもやりましたが、大連で悉皆片付けて前にやつて居た繃帯を捨てて創口は縫合はして萬創膏を貼り、彈丸は何時でも取れるのだから、抜き取らずに其儘にしてあつた。森君の創は左上膊中央の外側より後側を貫き、左肩押骨外側軟部を貫通せる創傷だが、丸を見ると尖端が十字形に割れて居る。丸の割合に傷の大きくなかつたのは此の爲であらう。旅行中の伊藤公は非常に元氣で、旅順で一寸風邪をひかれたが、是れはホンの藥一服で直ぐに癒り、哈爾濱に着いた時も至極元氣であつた。併し是れ迄も危険なことが色々あつたから、私は繃帯を體に着て居た。韓國に居る時などは、少なくとも三種位の繃帯は始終持つて居たが、色々用意をして居るときは何の事もなく、思ひ掛けない時に思ひ掛けない災難が起つたものである。遭難の日は、實に厭な天氣で薄暗い程曇つて今にも雪が降り出しさうな陰鬱な空模様で、それに激しい湖北の寒風が身にこたへた。氣温と言つたら、無論零度以下であつたらう。公爵はフロックコートの上に毛皮の裏の付いた外套を着けて、黒の山高帽を被つて居られ、露國の藏相は確か制服であつたと思ふ。(小山善談)



## 凶變の前兆

以前鹽田公便が清國で兇漢の手に殞れた時は、日本から軍艦を派遣して其遺骸を持ち歸つた例があるから、伊藤公の遺骸も多分軍艦に載せて來るだらうと思ふ。

曾てスチーブンス氏が米國に歸る際、木挽町の田中屋で送別會を開いた事がある。其時出席者が非常に少なくて僅に十三名であつた。西洋では十三と云ふ數を非常に忌み嫌ふさうだ、スチーブンス氏もひどく氣にして居たやうであつたが、果して桑港へ着くや否や刺客の手に殞れた。今度公が殺されたに就ても、矢張り迷信的の事があつた。

公は是迄外國などへ赴く際には大抵大磯から早朝に出發するを例とし、見送人も澤山前の晩から泊つて居て、何時も大變賑かであつた。處が今度に限つて、午後五時の出發で、見送り人も、前夜から泊り人も少なくて、大層寂然として居たので、何うも氣になつて仕様がなかつたが、果して今日の兇報を耳にすることとなつた。

公が常に座右に置いて在るのは『名將言行録』で、殊に小早川隆景の着實な行を愛慕して居た又伊太利のカブルをも非常に尊敬して之に私淑して居た。昨年(明治四十年)の今月廿二日は丁度公の

誕生日に當り、夫人の還曆の祝を兼ねて大井町の恩賜館で盛んな宴を開いた事がある。其一年後の同じ月にこんな變事が出來したのは何かの不思議な因縁であらうと思はれる。(鶴原定吉談)

## 熱狂の徒の餌となる

私は、公を個人としては能く知らない。併し世界大舞臺の偉人である。日本と清國とが望を公の今度の行(ハルビ)に屬して居たのは勿論、關係列國皆公の健在を祈つて居た。多少演説もせられたから、此行が幾らかは既に用を爲してゐるが、安全に旅行の目的を達せられたら、其の効果の極東に及ぶの程度到底測り知るべからざるものが有つたらうと思ふ。残念なことである。

公の後繼者は誰だらう、一寸六かしい。何分種々の長所を持つた方は澤山居られるが、公の如き完璧は一寸得難い。フアナテックスには實に困る、私の國でもリンコルン、ガーフィールド、マシキンレーと、最も秀でた大統領、大人物で最も人望のあつた者を三人までも兇手によつて失つた。マシキンレーの横死も僅八年前、何時迄此様な野蠻な行爲が續くのであらう。何分氣狂には困る。ステヴンソンも朝鮮人の手に斃れた。今の世の刑罰は、慥に惡を懲す力が薄い。尤も氣狂



者の行爲は、何とも仕方はないが、彼等とて全く精神錯亂したものであるまい、國に盡す積りなのであらう。國家の大害を爲すとは知らないから、困つたものだ。何うか、せめて同行者の怪我でも輕ければ宜しいが……。

兇行者の處分は何うなるだらう、場所がハルビンだから、世界到る處此の世界的英雄の横死を惜しまぬ者は無からうと思ふ。(當時の米國大使オブライエン談)

## 大連に於ける公の遺骸と韓國勅使

公は哈爾濱に二日間滞在の豫定であつたが、圖らぬ凶變の爲め直ちに長春に引返し、此地で創所手當の材料、看護婦等の供給を得、約三時間内に手當を完うし、更に大連に向つたのである、大連に至りて柩を整へ、遺骸には防腐の爲四千グラムのホルマン液を注射し、棺の中にはホルマリン瓦斯を入れて密閉した。

秋津洲(公の遺骸を載せた軍艦)が將に大連埠頭を離れんとした時韓國勅使は弘濟丸に搭じて來り、勅旨を傳へんとしたが、我が陛下の御沙汰に先立つて之を受けるのは不都合であらうと云ふので之を拒

絶し、古谷秘書官が個人として迎へ、公爵の未亡人に御傳言があるならば承はつて置きませうと云つたが、勅使は唯棺前に額いたのみで立去つた。(中村是公談)

## 公の遭難實況の寫眞

或時、原がヒョッコリ我等の處へやつて來た。

唯今山縣さんの所へ往つたら、あなたの話が出た。三浦といふやつは、良い點は實に良いと言はれた。

といふから、

それは良い點は實に良いだらうが、惡い點は極く惡いだらう。

といふと、原はハッハッと笑つて居つた。

おれが皆な良かつたら、夙くに平田東助だよ、良い點は良いが、惡い點は極く惡いから、こんなだ。

と言つて笑つたことがある。それに就てかういふ話がある。



伊藤さんがハルビンで遭難の年だ。晦日前のことで、例年の通り、寒くなるから、此の熱海へ来ようとした時だ。ふと新聞を見ると、伊藤さんの遭難寫眞を兩國の國技館で見せるといふ廣告が出て居つた。これは怪しからぬと思つて、直ぐ山縣の所へ出掛けて往つた。

どうも、かういふ事をさしては濟むまいぢやないか、一方では國葬として禮遇した國家の功臣を、一方では見世物にして、その悲惨の最期を公衆の目前に暴らさすといふことは、政府の處道として餘り矛盾ではないか、遺族の人に對しても、かういふ事を許すのは、氣の毒ぢやないか。

と言ふと、

イヤ、些つとも知らなかつた。

といふのだ。

今日の新聞にさういふ廣告があつた。僕は明日熱海に往かうと思ふから、どうか桂に言つて、政府が止めるやうに計らつて貰ひたい。

と頼んだ。桂は其時總理大臣であつたからだ。山縣は、

如何にもさうだ。やらせてはならぬ。

と言つて、承諾したから、吾輩も安心して、此の熱海へ来たところが、一月になつて新聞を見ると、兩國でチャンと興業してゐる。

これは驚いた。あれだけ山縣に言つて置いたのに、怪しからぬ。

と思つて、早速山縣へ詰問狀の手紙を出した。其の趣意は、

伊藤の遭難寫眞興行差止めの事に關し貴意に托して此地へ来たところが、なんぞ圖らん、現に兩國で興行してゐるではないか、彼等は唯だ金儲けの爲めに興行するのである。貴君と井上が出金して買取つても濟むではないか、かゝる事を捨て置いて、どこに友人の甲斐がある。それが出來ずば政府に買取らせてよい。とにかく斯様な寫眞を公衆の目前に暴さねば、それでよいのである。自分は、他人を做ねて伊藤さんの墓へ百度詣りをするやうなことは好まぬ、併し、死んだ故舊がかやうな侮辱を受くることを座視僞觀することは出來ぬ、これが自分として故舊に報ゆる道だと思ふ。

といふので、それは随分激しい事面であつた、すると早速謝飛の返辭が來た。

今更辨解は致さぬ。正直に申すと、君のあれだけの精神に對して、失念したと言つては濟まぬが、年來年始の俗事に取紛れて、全く失念して居つた。今御書面に接して、大に驚いた。何と



か至急方法を講ずるから、其段容赦して呉れ。

といふ意味であつた。

それで、平田が内務大臣であつたから、吾輩の書面を平田に示し、平田は又警視總監に何とか言つたものと見える、二三日たつと、又山縣から、

御書面の話、平田に言つてやつたが、平田から別紙の書面を寄越した、それを見てくれ、と言つて来た、平田の書面といふのは警視總監の辨解だ、それは、

實は寫真と言つても、眞黒のもので、何が何やら殆んど判らぬやうなものであるから、差支ないと思つて許した。

といふ趣意だ。寫真が黒からうが、白からうが、それは問題ではない。苟も國家の元勳たる伊藤公遭難の實況を、喇叭や大鼓で囃し立て、見せ物にさせるといふのが問題だ、此點は決して自分としては看過することが出来ぬと、又言うてやつた、それで政府は終に之を買取つたといふことだ。山縣が吾輩のことを、良い點には實に良いと言つたといふのは、こんな事なんだ。

(子爵三浦梧樓談)

## 公と華族制度

伊藤公が維新の皇謨を翼賛され内治外交共に絶大な功績のあつた事は、何人も首肯する處で、今度の兇は上下擧つて痛恨措く能はざる所である。余は政治上に就て之を論議することを止め、公が現在の華族に對して盡瘁された功績に關して述べやう。明治十七年始めて華族制度を布くに至つたのは、一に公の力に歸せなければならぬ。然るに公は、華族をして其儘に放任すれば、其體面を保持する事が出来なからうと憂慮され、世襲財産の制を設け、續いては其才能知識を養成せしむる爲めに、華族の教育所として學習院を設置するに力を致し、當初三十五萬圓の基本金によつて同院を維持する筈であつたが、夫れのみでは到底完きを期し得ないので、公は帝室に請願せられたる結果、宮内省の費用によつて支辨さるゝことゝなつて、華族教育の基礎を確立して、今日あらしむるに至つた。夫れから又、宮中に於ける華族の待遇をも定められた。其他公が華族の爲めに致されたことは屈指に遑あらずである。予は華族として、特に公の恩義を今更に感謝するものである。(子爵堀田正養談)



## 最終の樞密院會議

伊藤公遭難の事は眞に意外の出来事で、唯驚愕の外ない。思ふに此趣を聞召されたる 陛下の御軫念あせられた事は恐察し奉るに餘りあり。狙撃者は韓國人なりと云へば、或は公が多年韓國開發の爲に盡されたる功績を誤解したる結果に出たものであらう。公は我國の元老元勳たるのみならず、實に東洋の平和を以て終始一貫せられたる人で、所謂惡辣なる手段を採られた事もなければ、他より怨恨を受けらるゝが如き性格でなかつたのに、過つて兇漢に狙はれたのは如何にも遺憾の次第である。明治の元勳として曩にも大久保公の兇刃に斃れたるあり、今亦公の遭難を見る。我國の元勳とも云ふべき人々は妙に天壽を完うせざるが如き頗る奇なる現象と云ふべしだ。公が東京出發の前々日は、即ち公が樞密院議長としての最終——例の韓國司法制度に關して御諮詢のあつた日で、特に 陛下も臨御相成りたる程であつた。公の旅行は、韓國の制度も漸く一段落を告げれば、豫て懷抱せられたる滿洲視察をなされたので、其際歸途の何れに依るかは何は尙ほ未定だと語つて居られたが、遂に歸らぬ旅路となつたのは如何にも残り惜しいことで、御氣の毒千萬なるは勿論 陛下の爲め將た國家の爲め不幸の至りである。(千爵清浦奎吾談)

## 藤山二公の比較月旦

一つ伊藤と山縣との月旦を試みよう。此二人の性格は、總ての點に於て非常に異つて居る、伊藤は存外稚氣があつて、比較的率直であつた。ザツと言ふと

おれは是れ程偉いのを、何うも天下の多數の奴が知らない。

といふことが始終氣に掛つて居つたやうである。總ての事が極く陽氣で、華やかであつたが、之に反して山縣は、

俺は唯だ一介の武辨だ。

と云つた調子で、表をつまらぬものゝやうに見せかけて居つた。

これが二人の間の相異なる點である。或時郷里の者が東京へ出て来て、二人の處を訪ねた、それがあとで、

山縣さんへ行くと、お取扱ひが誠に親切であつたが、伊藤さんは大違ひで、ろくに話も聽いて下さらない。

と言ふから、我輩が、



成程それはチョットさう見えるが、伊藤の泣く折りは、本當の涙を出す、目白の涙は、どうも當てにならない。

と言つたことだ。これは二人に對する適評だと思ふ。中原邦平といふ郷里のものが、此事を聽いて、其の同窓であつた日本新聞の陸實に話すと、それは名評だと言つて、其新聞に載せたことがあつた。(子爵三浦梧樓談)

## 不適なる仲人

或時、觀樹將軍三浦梧樓と、含雪將軍山縣有朋が、軍事上の問題で衝突した。段々議論を進めて見ても、何分納まりが着かぬ。そこで、觀樹から、双方昵近の伊藤と井上を仲人に立て、根から洗つて議論を盡して見ようと申出ると、含雪は、貴公と俺の間へ仲人を立てるでもあるまいと躊躇した。觀樹は、イヤさうでない、盡すだけ盡して見ぬとさつぱりしないといふことで、結局此の二人を仲人に立てた。

ところが、二人の仲人振りがまるで違つて、それ／＼其の人の性格を現はして面白いが、仲人としては二人とも役に立たなかつた。

井上に立證させると、「それはかく／＼、何々はしか／＼」とはつきり證言するが、それへ自分のやかましい意見を付け加へて、爭議當事者たる兩將軍の議論に、盛んにケチを付けるので、證人が爭議者に行つたのやら、爭議者が證人をなだめるのやら、譯の判らぬ場面が展開して了ふ。

伊藤に證明させると、ノラリクラーと瓢箪鯨で、含雪が、「イヤ、それはさうでない」と向き直ると、證人は、「いかさま、それはさうでなかつたやうだ」と合槌を打つ。觀樹が、「莫迦云はつしやい、そんなことがあるものか、斯うだ」といきり立つと、「ウム、さうらしかつた」と請け合ふので、とんと證人にならない。

こんな有様で、兩將軍は、折角の氣勢をした、か挫かれて了つた、その後、陸軍少將田中光顯(後の宮内大臣)を仲人に立て、問題の解決を告げた。(伯爵田中光顯談)

## 虚空藏菩薩の立像

公は、小さき銅製の厨子入の虚空藏の立像を所持し居られて、多年旅行の度毎に手鞆に入れて



携帯して居られた。滿洲行の時もさうであつた。此虚空藏は、元は熱海の温泉寺の什物であつて鎌倉八幡の宮司箱崎氏の手に歸して居つたので、公は嘗て林董伯と共に、箱崎氏の宅で、一見して垂涎した品である。それを二十六年頃に箱崎氏が公に贈つたものである。温泉寺は藤原藤房卿の縁故の寺である。虚空藏は、卿が落髮して諸國を巡歴したときに頸にかけて、楠正成、正行父子の冥福を祈つたものといふ言ひ傳へである。外厨子は杉板製であつて、卿の自作と言ひ傳へもある程で、やはり數百年の時代物である。其中に銅製の小さな厨子の中に入つてゐる内厨子の内部に、扶桑禮場、奉經供養。爲丙子五月二十五日、己丑正月五日、忠死菩提。文和三曆、遁倫隱士、と彫つてある。五月二十五日は楠公（編者註、大日本史に依れば、楠公戰死は、延元元年丙子、五月二十五日）正月五日は小楠公（編者註、同書によれば、小楠公戰死は、正平三年戊子、正月五日で、月日は符合してゐるが、年次は内厨子の記録よりも一年前に當ることゝなつてゐる）の命日である。公が此像を携帯の時は、外厨子を殘し、内厨子の儘に緞子の袋に入れて居られた。此虚空藏に附屬して二十七年一月七日付の雲照律師の開眼供養數と、同じく八日付の靈像開眼記といふ二つの書付と、四十二年二月八日付の森田悟由禪師の虚空藏菩薩寶劍改造記といふ書付がある。此等の番付に依るに、雲照律師は二十七年の一月一日より一七日間に二十一度の供養法を行つて開眼したのである。其後如何にせしか寶劍が紛失せしため、四十年の一月晦日に公が自ら悟由を訪うて新造を頼み、悟由師は金

土をして之を造らしめ、恭しく供養して返却したのである。

（劍は縫針の少し大なる位の純金製である。像は右手に寶劍、左手に寶珠を持つてゐる。雲

照律師の開眼記に依るに、此尊體は嵯峨嵐山法輪寺本尊と同體である。虚空藏の本誓功德は、福智の二徳を具足して一切衆生の貧愚の二病を活するにあり。福智二徳は施、戒、忍、進、禪定、知慧の六度即ち六種の善行即ち六波羅密に由つて成就す。寶珠と寶劍とは福智の二徳を表すとす。悟由師の改造記にも、寶珠は以て恩徳を表し、寶劍は以て智斷を表す。楠公の忠、侃公の節、三徳二嚴自ら其中に存す。誰か菩薩一分の權化にあらずとせんやと書いてある。）公が常に此

像を携帯せられしは、宗教的觀念よりもむしろ楠公父子の精忠と、藤房卿の苦忠とを聯想して自己の理想とせる爲めと思はれる。（此像は公未亡人より著者一末松子一に贈られたり）公が忠君の念は、幼年よりの素養と云へ、殆んど天賦である。明治四年に米國にありし時、立君政體の立脚地の如何に論及せし人ありしに、公は直ちに其説を駁し、果は大激論となり、公は奉を振り上げて傍にありしシルクハットを打潰したとの逸話の如き、其の一端を見るに足るべし。

虚空藏の臺座の背面には侃山拜と彫つてある。侃山とは藤房卿が落飾の後自ら斯く號して諸國を廻歴した古記に見ゆ。（子爵末松謙澄手記） （編者註、大日本史列傳註にいふ、天正本大平記に曰く、藤房卿と侃山子と號す。諸州を周遊し、土佐に行く、舟覆つて歿す。藤房の官を棄て、去つたのは、後醍醐天皇の建武元年十月五日。而して上記、虚空藏菩薩の内厨子に記された文和三年は南朝後村上天皇正平九年であるから、遁世後二十一年目に當る。）

## 後に恐縮した落書